

近代以降の甲斐絹の 生産・デザイン・技法に関する基礎的研究



序

山梨県立博物館は、平成17年の開館以来、「山梨の自然と人」を基本テーマに据え、山梨の多様な自然環境のもとで、人々がどのように歩んできたかを解き明かしていくことを、調査研究や企画展といった博物館運営や事業のよって立つ柱として活動してまいりました。

産業もまた、自然と人との関わりの中で生み出され、育まれてきたものです。山梨には、現在でも果樹栽培とその加工、水晶研磨・宝飾、織物、皮革工芸など、多くの地場産業が息づいています。また、過去には養蚕業が盛んに行われてきました。これらの産業は、日照や気温、地質、交通（地理的条件）と密接に関わっています。土地がもたらすさまざまな恩恵と制約のなかで培われた技術や商品の流通には、人と自然の関わりがそのまま反映されていると言っても過言ではないでしょう。

山梨県の郡内地域は、現在でも日本有数の織物の産地です。江戸時代に「ぐんないじま郡内縞」として江戸や大阪、京都などの大都市でも知られ、近代以降昭和初期までは「かいき甲斐絹」の名で国内外に知られた絹織物を産出してきました。時に表地として流行の先端を走り、あるいは美と心意気を内に秘める裏地として、各時代の人々の身を飾りあわせてきたのが、当地の人の手によって創り出された布でした。

布は、博物館資料のなかでも手に入れにくい資料のひとつです。なぜなら、かつての衣生活における衣類とは使い捨てるものではなく、譲られたり売られたりして人の手に渡ったり、あるいは解いて縫い直しては生活用具にも転用し、端切れや糸になるまで使い尽くす側面があったからです。そのため、郡内縞や甲斐絹にまつわる資料においても、関連資料の収集は困難を極めています。

当館では、共同研究の対象として甲斐絹を取りあげることとし、山梨県産業技術センター（富士技術支援センター）が所蔵する甲斐絹コレクションを中心とした調査を実施いたしました。甲斐絹の歴史を整理するとともに、約500点の資料を実見することで、一口に「甲斐絹」と言っても様々な種類があり、意匠に流行や新技術を取り入れようと模索してきたことが浮かび上がってきました。また、研究の過程では、わずかではありますが甲斐絹の収集も行うことができ、当館の衣生活資料研究において担うべき視点も見えてまいりました。

感染症の流行により、当初の調査計画を変更せざるを得ない側面もありましたが、本報告書を出発点として、当館における織物・衣生活資料研究を進めてまいりたいと思います。今後も、調査研究へのみなさまのご協力を賜りますよう、引き続きよろしく願いいたします。

山梨県立博物館

館長 守屋正彦

近代以降の甲斐絹の生産・デザイン・技法に関する基礎的研究

目次

序	1
目次 凡例	2
研究の概要	3
I 甲斐絹に関する基礎的研究	4
1. 甲斐絹概観	4
(1) 甲斐絹とは	4
(2) 江戸時代の郡内絹	5
(3) 近代の甲斐絹	9
2. 甲斐絹関係資料情報	17
(1) 文字資料	17
(2) 実物資料	17
3. 富士技術支援センター所蔵甲斐絹コレクションおよび関連資料	21
(1) 甲斐絹コレクションおよび関連資料一覧	21
(2) コレクションに見る甲斐絹の技法と用途	30
(3) コレクションに見る甲斐絹の意匠	34
4. まとめと今後の課題	37
II 糸から見た甲斐絹	40
1. 目的	40
2. 糸の観察方法	40
3. 糸から見た甲斐絹の特徴	40
4. まとめと今後の課題	43
資料編 富士技術支援センター所蔵甲斐絹コレクションおよび関連資料画像	45
1. 資料画像	45
2. 顕微鏡観察画像	59

凡例

- ・本書は、平成31（令和元）年度から令和3年度まで実施した共同研究「近代以降の『甲斐絹』の生産・デザイン・技法に関する基礎的研究」の調査・研究報告書である。
- ・本書の執筆・編集は丸尾依子（山梨県立博物館学芸員）・西願麻以（同）が担当した。執筆分担は、次のとおりである。
- 研究の概要・I…丸尾依子、II…西願麻以
- ・掲載している写真は、丸尾・西願が撮影した。
- ・個人情報保護への配慮の観点から、所蔵者名はアルファベット表記または「個人」とのみ記載した。

表紙 山梨県産業技術センター（富士産業技術支援センター）所蔵
甲斐絹コレクションおよび関連資料より 甲斐絹4種

裏表紙 同 絵甲斐絹用刷毛

研究の概要

江戸時代、郡内地域において輸入生地似せて作られた「海気」は、明治時代に「甲斐絹」と名を変え、昭和時代初期まで、主に羽裏や輸出用生地として盛んに生産された。第二次世界大戦中の生産力の低下や、生糸の価格高騰、化学繊維の導入の影響を受けて衰退するが、甲斐絹の流れを汲んだ織物産業は、現在も盛んに行われている。

現状において、確認できている甲斐絹の実物資料の残存数は決して多くはない。よって、実物資料を通じてその意匠や用途を知ることは難しい。現存数が少ない理由として、輸出用に用いられていたことや、他産地と比較して小規模生産であったことが挙げられる。また、国内における甲斐絹の主な用途も、羽裏や服・袖裏などの裏地であったため、和服地においては使用する時期はおおむね10・11月頃から翌3・4月頃までに限られ、表地に比べて流通量が少ない。加えて言えば、そもそも布資料は残りにくい性質にある。それは、和服が日常に用いられていた時代、ことに日常着においては、仕立て替えとともに生地を別の衣類や用途に転用する「繰り回し」が行われ、その結果、布は端切れになるまで使い切られていったからである。さらに、衣生活にまつわる資料は極めて個人的なものであることから、所有者の逝去にともない廃棄されることが多い。そうでなくとも、箆筒にしまい込まれたり、古着市場に流れたりして、博物館が入手することが困難な資料の一種である。

本研究は、その衣生活資料であり、かつ山梨県における重要産業であった織物業に関する資料のひとつでもある甲斐絹について、歴史や所蔵等に関する情報を収集するとともに、現存が確認されている実物資料の調査を行い、生産や意匠や技法などの整理を行ったものである。本来であれば、山梨県外に所蔵される資料や、県内で現存確認されているすべての資料に対し実見調査を実施する予定であったが、感染症拡大防止の観点から多くの調査を断念し、山梨県産業技術センター（富士技術支援センター）（旧 山梨県繊維工業試験場）が所蔵する明治時代末期から昭和初期にかけての甲斐絹の端切れを含む資料群のみ実見調査を実施した。

本報告書では、I章において、江戸時代の海気および郡内織物と、明治時代以降の甲斐絹について概観するとともに、甲斐絹に関する当館所蔵の文献資料と、館外資料も含めた甲斐絹の実物資料について、その所蔵情報を掲載する。また、特に山梨県産業技術センター（富士技術支援センター）（以下、富士技術支援センター）が所蔵する甲斐絹の端切れコレクション（以下、甲斐絹コレクション）および関連資料について、調査に基づき、資料の一覧表を掲載するとともに、その分類と意匠の特徴について述べる。また、続くII章では、富士技術支援センターの甲斐絹について、デジタル顕微鏡を用いた観察により、糸や組織等から見た特徴を述べる。

なお、富士技術支援センターの甲斐絹コレクションの調査においては、約500点すべての資料の実見と撮影を行うとともに、あわせて染色や組織を確認するために顕微鏡写真を撮影し、それらの画像を資料編として掲載した。

I. 甲斐絹に関する基礎的研究

1. 甲斐絹概観

(1). 甲斐絹とは

甲斐絹^{かいき}は、山梨県の郡内地方（東部地域）で生産された伝統的な絹織物を指す。生産されたのは明治時代から昭和時代前期であり、第二次世界大戦後には生産が途絶えた。生地の特徴は、富士技術支援センターが作成した甲斐絹紹介のホームページ「The Kaiki Museum」(<https://www.pref.yamanashi.jp/kaiki>)を参照すると、次のように列挙されている。

- ・ 経糸、緯糸ともに絹
- ・ 先練り
- ・ 先染め
- ・ 無撚り
- ・ 細番手
- ・ 高密度
- ・ 平織り

甲斐絹は、文化財のように技法や原材料が厳密に指定されているわけではない。重要無形民俗文化財「結城紬」の場合、指定要件として①糸つむぎ、②緋くびり、③地機織りの三つの工程が指定されている。また、縦糸・横糸とも手つむぎ糸を用いること、緋は手くびりによること、織りはいざり織機を使用することが要件となる。さらに、所在地は結城市および近隣市町村に限られ、管理者は「本場結城紬技術保持会」と指定されている。甲斐絹には、このような技法、素材、製作地、技術保持者の限定はなく、現存する甲斐絹の生地の特徴が挙げられるのみである。また、それらの特徴も、これまでの調査を通じて導き出されたものであり、生産されていた当時に定義されていたものではない。

実際、甲斐絹が誕生した明治時代には、その定義ははっきりしていなかったようである。例えば、洋傘製造者や消費者側では、傘地のことも「甲斐絹」と称していた向きがあるが、生産地の統計では洋傘地と甲斐絹は別に区分されていることがある。また、洋服地としても用いた広巾の織物は、「広巾甲斐絹」と称されることもあるが、単に「服裏地」とされていることもある。さらに、布団皮にも「甲斐絹」の名を用いる場合もあれば、「八反掛」と区別することもある。つまり、甲斐絹とそれ以外の絹織物の区分は明確ではなかったようである。川村文芽（1910）は、傘地や裏地、輸出用生地など様々な用途があったとみられる甲斐絹について、次のように説明する。

甲斐絹といふと、誰でもすぐ蒲団皮の、萌黄と黄と紺と三色の荒い格子縞を連想します。しかし、これは郡内のことで、今でも、蒲団皮の手厚いのに限って郡内といひ、手薄い洋服の裏地や手帕や洋傘地の類は甲斐絹といひます。尤も、洋服裏や手帕や洋傘地は新しい産出で、以前はやはり蒲団皮か羽織の裏に限ったものです⁽¹⁾。

明治時代末期においては、一般的に甲斐絹と言えば布団皮を連想する人が多かったこと、詳しいの間では薄手のハンカチーフや洋傘地に限って甲斐絹と呼んだことがうかがえる。当時の消費者にとって、甲斐絹とは、その用途で区分することなく、主に山梨県の郡内地域で生産される薄地の絹織物を指す曖昧な定義であったと考えることができる。

本稿で対象とする甲斐絹も、生産者と消費者に明確な定義がみられない以上、現時点では、技法や用途によって厳密に規定することは避けざるを得ない。用途や技法を問わず、文献上の名称、あるいは所蔵者

や生産・販売者、所蔵者が甲斐絹と呼称する布資料のうち、絹あるいは人絹による薄手の生地を甲斐絹とみなし、調査対象とした。

「甲斐絹」との表記が用いられたのは明治時代以降である。それ以前の江戸時代には「郡内海貴^{かいき}」と表現したり、「海気」「海黄」「改機」の文字をあてたりすることもあった。「海貴」は、本来は南蛮貿易でもたらされた平織りの絹織物を指す。また、単に「海気」と言った場合は平織りの無地を指し、文様を織り出したものであれば「紋海気」と言った。郡内地域では、それらを真似て寛文年間から生産が始まったとされる。郡内地域は年貢を絹紬で物納しており、17世紀半ばに白生地生産から縞も織るように転じたとされている。縞の他にも織紋付き⁽²⁾の白郡内や、玉虫色の織色郡内や郡内太織などがあったとされる⁽³⁾。このうちで言えば、「郡内海貴(気)」は織色郡内のなかの一種と考えることができる。

「海気」が「甲斐絹」と表記を変えた背景には、明治時代初期の殖産興業政策があった。山梨県では生糸や郡内地域の絹織物の生産に力が入れられた。山梨県初代県令の藤村紫朗は、輸出も含めた織物市場の拡大を視野に入れて織物産業の推進をはかった⁽⁴⁾。「甲斐絹」との表記を公的に用いたのも、藤村紫朗であるとされる。明治11年(1878)の布達「物産表中特有种を追加」のなかで、「甲斐絹」の語が初めて公的に使用されたとみられる。かつて、憧れの舶来品を真似ることではじまった郡内絹の「海気」は、近代の訪れとともに山梨を代表する織物「甲斐絹」として世界に向かって名乗りをあげたのである。

註

1. 川村文芽(1910)「甲斐絹とお召」『婦人世界』5号。
2. 糸の組織で文様を表現した、いわゆる地紋のある生地を指していると思われる。
3. 『萬金産業袋』による。
4. 「藤村紫朗から陸奥宗光あて具申」(明治6年(1873)3月)のうち、「勸業授産ノ方法」に次のように記される。「都留郡々内の織物ハ管内帛種ノ産物ニテ、年々製出ノ数凡拾万疋内外、此ノ代価凡五拾万円、方々追々精巧ヲ加工相応ノ良品ヲ製セリ。然ルニ是等モ前条養蚕ト同ジク唯其業ヲ郡内ノミニ譲リ他ニ他ニテハ一切不整事トス。(中略) 広く海外ニ輸出スルを目途トス(後略)」

(2). 江戸時代の郡内絹

①郡内絹概観

『萬金産業袋^{ばんきんさんすぎわいぶくろ}』(享保17年/1732)を見ると、当時郡内地域では下記のような織物が生産されていたことがわかる。また、「海気」では、外国産の布に、地風だけでなく幅も似せて生産されていたことがうかがえる。

- ・郡内縞…先染め糸で縞を織り出したもの。
- ・白郡内…亀甲、菱、杉綾などの紋がある。「ひし郡内」や「紋郡内」とも呼ばれた。
- ・織色郡内…色はいろいろで、玉虫の類が多い。海気に似ているので郡内海気とも言われる。紋、菱織などもある。
- ・郡内太織⁽¹⁾…白の細糸で織られている。織色の無地も出る。八王子から出るものは、経糸にしけ糸を使っているので品質が良くない。
- ・郡内平…袴地。模様はいろいろである。生糸で地が薄くきれいでつやが良い。
- ・郡内平…夏物の袴地。
- ・大海気…「唐物」とする。巾は三尺一寸(約114cm)とされている。
- ・小海気…「唐物」とする。巾は二尺六・七寸(約78cm)とされている。

郡内絹は、生産量が増えるのにもなって、織物の種類も増えていったとみられる。『甲州噺』(享保17年/1732)には、「白絹の上等は真木・花咲、黄絹は小形山、縞の類は上下谷村、海気は田野倉、八反掛は

江戸時代の郡内絹

新倉、玉川紬は松山、夏袴地は暮地・小沼と申村より多く織り出す」と記される。また、「郡内のかいこ・糸ばかりにて不足の由」とも記されており、原料となる糸が不足し、他所から買い足すほどに盛んに織られていた様子もうかがえる。少し時代が下るが、寛政2年（1772）に伝来し、明治時代に機織り唄になったとされる里謡には、「真木の霜降り」「谷村黒八」「小沼すか織」「つむぎは勝山」、「大幡大吉格子」「鳥沢緋無地」など、郡内地域の各地で産出された織物が歌い込まれている。

真木の霜降卵色 大幡 大吉 万格子 田野倉萌黄の程のよさ 朝日に照す唐茶無地
谷村黒八博多織

谷村縹子おり博多おり 小沼すか織つむぎは勝山 田野倉もえぎに 朝日照す茶無地絹
鳥沢 緋無地の色のよさ 真木の霜降り卵色 大畑 大吉万ごうし⁽²⁾

『甲州噺』において新倉で生産されたと記す「八反掛」は、厚地で丹前や布団地などに用いる絹織物を指す。練り糸を用い、黄色と褐色などで縞模様を織り表すことが多い。その語源は、八反分をまとめて一機で織ることから名づけられたとも、八丈島で織られた綾織りの絹織物である「八丈絹」の別称であるとも言われる。また、機織り唄に歌われ、谷村で織られたという「黒八」は「黒八丈」の略であろうか。江戸時代に八丈島において織られ、年貢として納められた絹織物の名である⁽³⁾。八丈島の絹織物は、隣接する八王子でも類似製品が生産されていたとみられる。『萬金産業袋』によれば、「紬嶋、八王子村より出る。五丈四尺の疋物にて白地混じりなり」とされる織物がある。それらは白地に黒や藍の格子を織り出した紬地であり、京都に送って地染めして八丈絹に似せていたという。『和漢三才図会』には八丈織に似せた「京八丈」の名も記され、これが八王子で織った格子柄の織物を染めたものであった可能性が考えられる。「八反掛」や「黒八」も、これらと同様に八丈絹に連なる製品として生産された可能性がある。

「郡内縞」は江戸時代に流行した表地であったが、ほかの織物については、夏袴地など用途が明確なものもあるが、ほとんどは不詳である。わずかに、江戸時代後期の袴の裏地として「玉虫海気」が用いられたとする事例がある。時代や用途からみて、この「海気」は高価な輸入品ではなく国内生産品であろう。とすれば、郡内地域で「海気」を真似て織られた絹織物も、江戸後期において裏地としての需要を満たしていたとの可能性が考えられる。また、白絹、縞、紬、黒八丈などは、表地と見るのが妥当である。「霜降り」は、緯糸に糸、経糸に白糸を用いて織るもので、経緯の色を変えるという意味では後の「玉虫甲斐絹」に通じるところがある。「緋無地」も、裏地に用いた紅絹もみなどと同様のものと考えれば裏地としての製品の可能性が考えられる。残る「すか織」とは何だろうか。一般的に、「すか」は「すが糸」を指す。「すが糸」とは、精練せず撚りをかけずに一本で用いる糸のことである⁽⁴⁾。無精練という点は異なるが、無撚り、細番手という点では、後の「甲斐絹」に近い特徴を持った織物と言える。

②郡内縞の流行

甲斐絹の前身である江戸時代の「海気」を知るため、もう少し郡内絹を詳しく見ていきたい。郡内で生産された絹紬は精練が足りず、「京の半練りよりも今少し次なり」と評されたといい、高級品ではなかったようだ。東国ではくす糸の混ざる安い粗糸「まがひ糸の太み」をよく使い、郡内も例外ではなかったが、それにより絹に厚みが出て、丈夫で値は安く、新たな需要と消費者を掘り起こしてブームになったとされる。京都西陣で生産された「京郡内」は、そのブームを追従したものであったという⁽⁵⁾。

とはいえ、郡内絹は廉価品というわけでもなかったようである。郡内絹の縞をまとった人については、1600年代から1800年代まで継続的に戯作や記録に表れる。井原西鶴『腕久一世の物語』（貞享2年

/1685) には、「今は郡内絹の羽織着れば大じんだいじん、はちはちはち」との一節がある。歌舞伎や浄瑠璃の題材にもなった「八百屋お七」が市中引き回しとなった時に着ていた振袖は「郡内の碁盤嶋」であったという⁽⁶⁾。これらからは、郡内絹が豊かな人びとの流行の衣類であったことがうかがえる。また、その流行は江戸だけでなく、京都にも広がっていたようだ。元禄年間の歌舞伎評判記には、「郡内嶋こそよけれ。お大尽風で見ようござるぞ」⁽⁷⁾とある。盗難品の記録にも、「郡内嶋綿入れ羽織、地黒く白き小格子」(享保4年/1719)や「郡内嶋茶格子小袖、裏浅黄羽二重」⁽⁸⁾とある。地元甲斐国では、下井尻村の依田家の当主が、80歳の祝儀として郡内嶋などの反物を配っている⁽⁹⁾。郡内絹は高級品ではなく、かといって安物でもなく、価格と品質と実用性が見合い、かつ見映えもよい衣類として消費社会に受け入れられていたようだ。

このように、江戸時代の郡内絹は、まず絹が長着や羽織の表地などとして流行した後に生産量をあげ、地域ごとく様々な種類の織物が生産されるようになったと推測される。それらの用途を分類すると、郡内絹の流行以来の表地と、薄く平滑な平織りの裏地、限定的な用途の夏袴地に分けることができるだろう。

③文学作品のなかの郡内絹

近世の文学作品のなかに、郡内地域の織物はどのように描かれているだろうか。作品中の郡内絹の用途や着用者について述べる。

- ・井原西鶴『椀久一世の物語』貞享2年(1685)

今は郡内嶋の羽織着れば大尽だいじん はちはち

- ・同上『日本永代蔵』(貞享5年/1688)

又商ひの道は有る物、三井九郎右衛門といふ男、手金の光むかし小判の駿河町と云ふ所に、面九間に四十間に、棟高く長屋作りして、新棚を出し、よろづ現銀売りに掛値なしと相定め、四十余人利発手代を追ひ廻し、一人一色の役目、たとへば金襴類一人、日野郡内絹類一人、羽二重一人、紗綾類一人、紅類一人、麻袴類一人、毛織類一人、此のごとく手分をして、天鷲絨一寸四方、緞子毛抜袋になるほど、緋縹子槍印丈、龍門の袖覆輪かたがたにても物の自由に売り渡しぬ。

- ・同上『好色一代男』(口添えて酒軽籠)(天和2年/1682)

湯殿にかけこみ、こころのせくままにちよと物して出る所を、よしに見付けられて、悲しや様々口がため、郡内絹のおもてを約束するこそきのどくなれ

- ・同上『好色五人女』(巻四 恋草からげし八百屋物語)(貞享3年/1686)

今朝見れば、塵も灰もなく、鈴の森松風ばかり残りて、旅人も聞伝へてただは通らず、回向してその後を弔ひける。さればその日の小袖、郡内絹のきれぎれまでも世の人拾ひ求めて、末々の物語の種とぞ思ひける

- ・江島其磧『野白内証鑑』(宝永10年/1710)

柔らかそうなる男の、大格子の郡内嶋に、飛紗綾の黒き帯、大脇差をいかつく差し

江戸時代の郡内絹

- ・近松門左衛門『心中天網島』（享保5年/1720）

けふちりめんの明日はない夫の命白茶裏。娘のお末が両面の紅絹の小袖に身を焦がす。これを曲げては勘太郎が手も綿もない袖無し。羽織もまぜて郡内のしまつして着ぬ浅黄裏。黒羽二重の一張羅定紋丸に蔦の葉の。のきも退かれもせぬ中は内裸でも外錦。男飾りの小袖までさらへて物數十五色。内ばに取つて新銀三百五十匁。

- ・同上『心中宵庚申』（下之巻）（享保7年/1722）

別れはしばしの此世の名残。十念迫つて一念の聲もろ共にぐつと刺す。喉の呼吸も亂るる刃。思ひ切ても四苦八苦手足をあがき身をもがき。

卯月六日の朝露の草には置かで毛氈の。上になき名をとどめたり。

歳は三九の郡内烏血潮に染みて紅の。衣服に姿かい繕い妻の抱へを二つに押切。諸肌脱いで我と我鳩尾と臍の二所。うんと締めては引くり引くり。

- ・寛政2年（1790）に伝えられたとされる機織り唄

真木の霜降卵色 大幡 大吉 万格子 田野倉萌黄の程のよさ 朝日に照す唐茶無地
谷村黒八博多織

谷村縹子おり博多おり 小沼すか織つむぎは勝山 田野倉もえぎに朝日照す茶無地絹
鳥沢 緋無地の色のよさ 真木の霜降り卵色 大畑 大吉万ごうし⁽¹⁰⁾

- ・『甲斐国志』（文化11年/1814成立）に記された江戸時代中期の里謡

甲州みやげになにもろうた 郡内しま絹 ほしぶどう

郡内絹は、特に江戸時代前期から中期の戯作に登場することが多い。当時はそれだけよく知られた素材であり、流行の衣類でもあったということだろう。また、描写された柄は縞・格子がほとんどであり、表地として使用されているとみられる。

着用者は、遊里で遊ぶような懐に余裕がある（あるいは余裕があるように見せたい）人である。井原西鶴『腕久一世の物語』には「今は郡内嶋の羽織着れば大尽だいじん」と書かれ、郡内絹が資産家に見える見映えよい衣類として描写される。一方、同じく近松の『心中天網島』では、「羽織もまぜて郡内のしまつして着ぬ浅黄裏」と表現される。「浅黄裏」とは、表地だけ豪華に見えるが実際は粗末な服の意味や、遊里で振られた男を指す表現であり、「無粋」や「野暮」の暗喩でもある。つまり、無理をして女に見栄を張ろうとする男の象徴である。また、この一文からは、「郡内しま」が表地として使用されていたこともわかる⁽¹¹⁾。

ところで、現代において甲斐絹の歴史を語る際、江戸時代の奢侈禁止令によって生み出されたいわゆる「裏勝り」（地味な表地に対して華やかだったり意匠を凝らしたりした裏地を用いるという）の美意識をルーツとして語られることがある。しかしながら、近世の文学作品に現れた郡内絹から垣間見えるのは、表地の流行を追い華美に装う男性たちの姿であり、かつ裏物への気遣いをうかがうことはできず、「裏勝り」の美学とは対極にあると言わざるを得ない。羽裏地の甲斐絹にも反映されたという「裏勝り」嗜好と、甲斐絹の前身となる郡内絹の流行とは、はっきりと分けて考える必要がある。

註

1. 太織はやや厚みのある絹織物のことで、玉糸などを用いて織ったものである。
2. 山梨県教育委員会編『山梨県の民謡 緊急調査報告書』1983を参照。
3. 八丈島で生産した絹織物で、年貢の代わりに納められた。黄色・樺色・黒色の三色を基調とし、黄色に格子や縞を織り出したものを「黄八丈」、黒基調の織物を「黒八丈」という。
4. 現在は人形の頭髪に使用される糸をすが糸ということもある。
5. 広岩邦彦(2014)『近世のシマ格子』を参照。
6. 「天和笑委集」『新燕石十種』7巻
7. 歌舞伎評判記研究会編(1973)『歌舞伎評判記集成 第3巻』を参照。
8. 京都町触研究会編(1994)『京都町触集成 第1巻』を参照。
9. 「依田長安一代記」国立資料館編(1985)『史料館叢書 7』東京大学出版会を参照。
10. 山梨県教育委員会編(1983)『山梨県の民謡 緊急調査報告書』掲載。
11. 「郡内のしまつして」の一説では、「郡内の縞(しま)」と「始末(しまつ)して」が掛けられているとみられる。

(3). 近代の甲斐絹

①甲斐絹の商品開発

先に述べたように、「甲斐絹」とは、明治時代に生まれた名称である。大槻文彦による『言海』(明治19年/1886 完成)では次のように説明し、「甲斐絹」という表記が浸透しつつあった様子がうかがえる。

カイキ、改機(ベンガル国より製出したりといえは外来語ならむ 甲斐絹などにあらず)絹布の名、元は船来したり、寛文年中甲斐の郡内(都留郡)の職工外邦の製品に倣ひて織出す。

また、明治時代末期の婦人雑誌からは、この頃には「甲斐絹」の表記が一般的となっていたこともうかがえる。

近頃では一般に『甲斐絹』といふ字を使ひますが、あれは、甲斐国でできるから、ああいふアテ字を用ゐたので、實は『海気』と書くのが本當です。⁽¹⁾

甲斐絹が登場した明治時代、郡内地域では、ほかにどのような製品が織られていたのだろうか。当時織られていた主な製品には、次のものがあつた。洋傘地、服裏・袖裏地、八反織物(夜具地、座布団地)、そして甲斐絹である。甲斐絹は主として裕の時期の裏地として用いられるのが通例であつたが、輸出用には明治7年から8年(1874～75)頃から甲斐絹のハンカチーフも織られ、甲斐絹のパジャマなども作られた。また、国内消費用には、明治30年代に広巾の「五裏物」^{いつらもの}⁽²⁾が夏狩で織り出され、経糸に絵柄を染めて織り出す「絵甲斐絹」^{えがいき}のバリエーションを拡げた⁽³⁾。

その甲斐絹は、明治時代初期から海外や国内の博覧会に出品され、輸出も視野に入れた主力商品とみなされていたようである。実際、輸出用絹布としては上記のハンカチーフをはじめ、パジャマ、裏地、傘地など多彩な製品が登場し、明治7年(1874)にはアメリカに洋傘地の輸出も始まっている⁽⁴⁾。市場を海外に拡大した郡内地域では、蕨糊を使用して布の重さをごまかした不良品の発生や、不当取引が行われるなど、問題も多発した。

甲斐絹の様々な商品開発のなかで、特に洋傘地としての需要と開発は、後の「綾甲斐絹」^{あやがいき}の開発にも繋がっていった。通常は平織りを用いる甲斐絹であるが、明治時代には「無地甲斐絹」に綾織りや壁織りなどの組織を用いた製品が開発された。山梨県繊維工業試験場においては、明治41年(1908)に「朱子入」^{しゅすいり}

近代の甲斐絹

甲斐絹^{がいき}の製織試験が行われている⁽⁵⁾ことから、この頃までに平織り以外の甲斐絹の生産が行われ始めたとみてよいだろう。

郡内地域において綾織りの製品が最初に評価を受けるのは、洋傘地においてである。洋傘が日本に入ったのは江戸時代の天保年間（1830～1843）とされるが、広まるのは明治時代と言われている。慶応3年（1867）の『武江年表』には、西洋の傘について「和俗短傘といふ、但し、晴雨ともに用ふなり」と記す。幕末にはすでに洋傘が使用され始めており、それは晴雨兼用傘であったようだ。郡内地域においては、傘地は明治2年（1869）に吉田で織り始められたのが最初とされている⁽⁶⁾。その後も研究が重ねられ、平織りだけでなく綾織りの傘地が開発が続けられた。明治15年（1882）、明見で「泥鯰綾^{どじょうあや}」が開発された。これは、経糸を黒などの濃色に緯糸を銀鼠や萌黄などの淡色を織り込んだもので、泥鯰のように背が黒く腹が淡色なのに似ていることから名付けられた。続いて「ゴム綾」や、明治34年（1901）には「メートル綾」と呼ぶ組織も開発された⁽⁷⁾。新開発の傘地は、京橋にあった坂本商店（仙女香）⁽⁸⁾に納入されたという。

『東京風俗志』（明治34年/1901）には、洋傘の張地について「優れたるは甲斐絹を以て張りしが」と記す。さらに男女や年齢問わず持つが、「男持には甲斐絹・綾甲斐絹・綾毛襦子・瓦斯・紋毛・襦子等を用ひ」とあり、娘子供の上物として綾甲斐絹や本緞子、張レースを挙げている。婦人用の傘地に甲斐絹の名はない。文化学園服飾博物館の収蔵品には、銀座の「甲斐絹屋」初代店主である古谷正平作の手による昭和初期の女性用とみられるパラソルがある。張地は絹の襦子に刺繍、裏打ちにはシルクジョーゼットを用い、骨は象牙という華やかなものである⁽⁹⁾。生地が甲斐絹なのか、あるいは羽二重などの他産地の絹地かは判断に苦慮するところであるが、少なくとも「甲斐絹」の名を屋号に冠するほど、傘地としての知名度や需要が甲斐絹にあったことをうかがわせる。

洋傘は、明治時代後期に日本の主要輸出品に名を連ねていく。それを下支えしたのが甲斐絹であった。洋傘専用地の開発は甲斐絹の応用から始まり、洋傘が主要輸出品となるのと同時期に「綾甲斐絹」の製品化に結び付いていった。急激な西洋文化流入のなかで迎えたチャンスと、新規事業である洋傘地市場の開拓に結び付けていったのである⁽¹⁰⁾。甲斐絹は、海外需要に応えるべく洋傘地だけでなく服地や服裏地としての発展も遂げていく。明治10年代後半から20年代後半にかけては、アメリカやヨーロッパのファッションにおいて、薄絹の需要が高まったことが指摘されている⁽¹¹⁾。これについては、本節④において述べる。

②万国博覧会への出品と甲斐絹の輸出

明治時代、甲斐絹は国内外で開催された数々の万国博覧会に出品された。また、海外に販路を求め、輸出用製品の開発が行われた。殖産興業政策に力を入れた政府は、国際博覧会への出品や国内における開催を重要視した。博覧会への出品は、単に製品を陳列して紹介するというのみならず、国内外の製品を展覧し、その技術や使用方法などの理解と習得に努めるという普及啓発の意味も有していた。明治政府は近代化の一手段として博覧会を利用したのである。

甲斐絹の博覧会出品は、ウィーン万国博覧会（明治6年/1873）に谷村の鈴木与次右衛門によって「絵甲斐絹」が出品されたのが最初である。その甲斐絹は出品進歩賞を受賞した。それを皮切りに、数々の博覧会に出品されたが、ウィーン万博（明治6年/1873）、フィラデルフィア万博（明治8年/1875）、第一回国内勸業博覧会（明治10年/1877）に関しては、出品者の元に贈られたメダルが現存しており、甲斐絹が国内外から高い評価を受けていたことがわかる⁽¹²⁾。

表1 甲斐絹の博覧会出品記録一覧

国際博覧会

開催年		名称	開催地	山梨からの絹布関係の出品（判明しているもの）
明治6年	(1873)	ウィーン万国博覧会	オーストリア	絵甲斐絹
明治8年	(1875)	フィラデルフィア万国博覧会	アメリカ	「海気織」の広幅、並幅、衣服地と裏絹、傘絹、手巾（ハンカチーフ）、「甲州琥珀織」の衣服地
明治11年	(1878)	パリ万国博覧会	フランス	白綾織の洋服裏地
明治24年	(1893)	シカゴ万国博覧会	アメリカ	編蝠傘地 甲斐絹

内国博覧会

開催年		名称	開催地	山梨からの絹布関係の出品（判明しているもの）
明治10年	(1877)	第一回内国勲業博覧会	上野	縞甲斐絹、綾織
明治14年	(1881)	第二回内国勲業博覧会	上野	不詳（資料未見）
明治23年	(1890)	第三回内国勲業博覧会	上野	不詳（資料未見）
明治28年	(1895)	第四回内国勲業博覧会	京都	甲斐絹
明治36年	(1903)	第五回内国勲業博覧会	大阪	甲斐絹（紋甲斐絹、鼠甲斐絹）
明治40年	(1907)	東京勲業博覧会	上野	甲斐絹、洋傘地、洋服裏地
大正3年	(1914)	東京大正博覧会	上野	甲斐絹
大正5年	(1916)	山梨県重要物産共進会		不詳だが、谷村町長から大橋喬命（呉服商）あて案内状あり。
大正11年	(1922)	平和記念東京博覧会	上野	甲斐絹

上記以外に甲斐絹が出品された可能性がある国際博覧会として、明治17年から18年（1884～85）にアメリカのルイジアナ州ニューオリンズで開催された万国博覧会⁽¹³⁾がある。ニューオリンズ万博では、日本は数少ない海外出品国であり、注目を浴びたという。日本館の展示については、ちょうどその頃にニューオリンズに暮らしたラフカディオ・ハーンが記者として訪れ、日本館で見た絹布についてその感想を記している。ハーンが見た絹布には、人物や風景が加飾されていたといい、特に、富士山を精巧に縫い取った絹布について筆を尽くしている。

華やかな絹布が至る所に吊るされている。魅了するような構図や人物、風景、なかでも富士山、火口が八弁の聖なる蓮の形をした不二山の図が精巧に縫い取られた絹布である。大家北斎ひとりで百景を描いた富士山、冠雪の真珠のごとき美しさは、ただ、「乙女の白い歯」にのみたとえられ、山頂は光の無限の変化とともに色調を変える富士山。⁽¹⁴⁾

一説には、この絹布は甲斐絹ではなかったかという⁽¹⁵⁾。山梨県は、「万国工業兼綿百年記博覧会」（ニューオリンズ万博）への出品物の募集を明治17年（1884）4月19日付で布達した。出品にかかる費用は、出品物や渡航に必要な輸送費、交通費、諸税は自己負担、輸送・出品中の事故に関しても自己負担であったが、展示にかかる費用のみ、特別な装飾をする場合を除いて国が負担することになっていた。出品者の負担は大きい、成功すればその後の輸出に大きな足掛かりとなっただろう。

当時の甲斐絹は、明治7年（1874）から洋傘地の生産と輸出が行われていたうえ、フィラデルフィア万博（明治9年/1876）やパリ万博（明治11年/1878）での受賞を経て、輸出品としての手ごたえを得ていたと思われる。しかし、明治時代初期の日本の絹織物は、海外製品に比べて決して品質に優れたものではなかった。明治6年（1873）にウィーン万博の展示を見た久米邦武は、『米欧回覧実記』において、日本の絹について次のように述べている。

絹帛ノ類モ 其糸質ノ美ナルノミ 織綜ノ法 多クハ不均ニシテ 染法ハ僅ニ植物ノ似色ニテナルヲ以テ 光滯ノ潤ヒナシ⁽¹⁸⁾

（絹布の類は糸の質が美しいだけで、製織は均一ではなく、染色は植物の色に似せたもののみで、光沢による滑らかさが無い）

近代の甲斐絹

郡内地域では、ニューオリンズ万博に先立つ明治15年（1882）に甲斐絹の対アメリカ輸出に進出する動きがあり⁽¹⁶⁾、大月市の甲斐絹商であった堀江勇四郎、井上伊助の両氏は、パジャマ地などとして甲斐絹の輸出を行い始め⁽¹⁷⁾、吉田では服裏地の生産も始められた。折しも国内では、松方デフレの影響を受け、甲斐絹は販売生産ともに落ち込んでおり、洋傘地と同様にアメリカへの輸出に対する期待は小さいものではなかったと思われる。だが、その輸出は染織不良から不評を買うことになった。

アメリカにおける販売不振の要因を職工の技術と機械の劣勢にあると見た堀江・井上の両氏は、織物の改良のための技術習得を目的に、明治21年（1888）から3年間アメリカに渡り、サンフランシスコの産地やホワイトハウス紹介の織物部で学んだという。ニューオリンズ万博の開催は、ちょうどこの甲斐絹のアメリカへの販路拡大模索期にあたる。博覧会を通じた技術習得と甲斐絹の普及のため、郡内地域から出品されていた可能性も十分に考えられることである⁽¹⁹⁾。

しかしながら、ニューオリンズ万国博覧会への出品、特に絹織物の出品に関する資料はほとんどみられず、現時点においてその有無をうかがい知ることは難しい。当時、甲斐絹以外に輸出されていた絹布には、甲斐絹と同じく薄地の絹織物である羽二重が挙げられる。明治17年から18年（1884～85）当時、国内の多くの絹織物生産地では生産が落ち込んだとされるが、福井の羽二重は輸出製品の需要によって生産を伸ばしていたという⁽²⁰⁾。いずれにせよ、ニューオリンズ万博以後日本の絹織物は成長を遂げ、明治18年（1885）当時には輸出製品の0.1%（58,000円）に過ぎなかったものが、10年後の明治28年（1895）には7%（10,061,000円）、20年後の明治38年（1905）には9%（30,359,000円）と伸びていった⁽²¹⁾。甲斐絹も明治初期以来万国博覧会への出品をひとつのきっかけとして世界に知られ、技術改良を重ねながら海外における需要を掴んでいったと推測ができる。

③近隣地域にまたがる産地

明治時代の郡内地域においては、甲斐絹やその周辺製品のほかに大石紬、川和縞⁽²²⁾、上田縞⁽²³⁾などが織られていた。他産地の名を冠した織物も生産されていたことは興味深い。また、類似の事例として、近世に八丈織の一種が八王子や郡内地域において生産されたことは、先に述べたとおりである。

織物の名称と実際の産地の不一致という点では、甲斐絹についても同様であった。明治25年（1892）頃には、甲斐絹は郡内地域に限らず、群馬、栃木、福井、神奈川などの各織物産地でも織られていた。さらに、明治39年から40年（1906～1907）の統計からは、先の県に加え京都、山形でも甲斐絹が生産されていたことがわかる⁽²⁴⁾。「銘仙」で知られる織物産地の桐生でも、明治20年代には「高配甲斐絹」の生産を行ったという⁽²⁵⁾。昭和5年（1930）の『實用 織物の研究 絹物』でも、甲斐絹の産地は次のように述べられ、甲斐絹が栃木県、群馬県、石川県、岐阜県でも織られていたことがうかがえる。

甲斐絹は足利市、桐生市、大聖寺町、笠松町等にも出来るが甲斐国即ち山梨縣が主産地で、郡中南都留郡谷村町、瑞穂村、西桂村、北都留郡上野原村、廣里村、大原村等に最も多く出来る。

もちろん、これらの背景には生産量の増強のための下請け的生産や、人気のある織物への追従もあるだろう。江戸時代後期から近代の織物業においては、現代の伝統工芸的視点による「産地」の概念⁽²⁶⁾とは異なり、同心円的に近隣地域にまで広がる織物生産圏があったと考えてもよいのではないだろうか。

また、大月市内における聞き書きでは、明治時代から昭和時代初期にかけて、織物を行う家では手織であれば女性が行い、機械織を行う家では住み込みの「織り子」（織工）を置くこともあったという。明治

時代の「織り子」は静岡の駿東郡から来ることが多く、彼らのことはストウモノと呼称したという。昭和時代初期には、秋山村からも来ていたという⁽²⁷⁾。こうして雇われた「織り子」によって、甲斐絹の技術が周辺地域に広がっていった可能性も考えられる。

さらに、明治36年(1903)第5回内国勸業博覧会には甲斐絹ではなく「海気」の名の織物が出品されているが、これは群馬県(勾配海気)や石川県(勾配海気)で織られたものである⁽²⁸⁾。もとより、海気は海外の織物を真似て織り始めたものが最初であり、郡内地域に特有の織物名称ではない。山梨における「海気」と「甲斐絹」は、明治時代において他と差別化(ブランド化)するために表記を変更したというだけのものである。これまでの甲斐絹の研究においては、その名称から山梨県の郡内地域独自の織物として生産地を限定的に捉え、対象を囲い込んでしまった傾向があるのではないか。本研究期間では着手できなかったが、周辺地域における甲斐絹や海気の生産にも目を向け、技法の違いあるいは同一性、伝播などに注目することも必要だろう。

④和服地と洋服地

江戸時代より和服裏地として使用された甲斐絹は、明治時代に洋傘地に応用されただけでなく、洋服地としても使用されるようになった。洋服地としての用途は、輸出用では表地として、国内では服裏地として使用されていたようである。川村文芽(1910)「甲斐絹とお召」からは、明治時代後期には甲斐絹が国内において洋服裏地として使用され、それによってデザインにも変化があったことがうかがえる。

縞甲斐絹の縞は、緯経の色糸の使ひやうに依ることは言ふまでもありませんが、絵甲斐絹といつて、薄くて上品な白無地の上に、繪を織り出してあるのは、織りながら型紙をあてて、緯糸を墨で塗るのです。さうして経糸を織ると、緯には繪の形に墨がついてゐて、経の白い糸と縦横になるので、あんな一風かはつた模様ができるのです。縞甲斐絹は、もとはあらい縞でしたが、洋服の裏地などに用ひられるやうになつてから、いろいろ變つたものができます⁽²⁹⁾。

甲斐絹が洋服地としての需要を伸ばし始めた背景には、明治時代半ばの輸出用絹地の需要も影響したと考えられる。明治20年代に起こった欧米のファッションにおける薄絹需要が、日本の甲斐絹や羽二重などの輸出を後押しすることになったのである。明治時代の領事報告をまとめた『通商彙纂』には、フランスの里昂から絹布の需要に関する内容が報告されている。

亞細亞産糸当市場ノ需要ヲ占有スルモノハ、目下流行品タル木目形絹布及方形模様甲斐絹製織ニ之レヲ占有スルガ故ナリ⁽³⁰⁾

客歳ハ黒色絹布及基盤形甲斐絹類、頗ル需要アリ、琥珀織ノ如キモ木目形流行ノ為存外多ク売り捌ケタル(後略)⁽³¹⁾

また、同じく明治28年(1895)の報告では、フランスの織場でも無地・縞の甲斐絹の類や縺子が盛んに織られたことや、夏物として「艶付甲斐絹縺子紋織」がよく売れていること、「弁慶縞甲斐絹」が流行していることが報告されている⁽³²⁾。甲斐絹の名を挙げる複数の報告からは、明治20年代後半には甲斐絹やそれに類する薄手の絹布が盛んに輸出され、海外での需要が高かったことがうかがえる⁽³³⁾。

大正期以降、郡内地域では徐々に服裏・袖裏などに用いる洋服地の需要を伸ばして生産量を押し上げ、

近代の甲斐絹

昭和 10 年代には甲斐絹を洋服地の生産が上回る。明治維新以後の衣生活の変化により、洋装化は男性の礼装や外出着から先に進んでいったとされる。次第に女性にも洋装が浸透していくなかで、和服地の需要を洋服地が上回っていったと考えるのが自然である。ただ、国内に洋装が浸透する以前から、甲斐絹は輸出用としてより和服地よりも軽い甲斐絹を織っていたことを忘れてはならない。海外の洋服地に対応した経験があってこそ、洋服裏地への転換がスムーズであったと考えることもできる。

洋服地（服裏・袖裏地）への転換は、甲斐絹のデザインにも変化をもたらした。先に紹介した川村文芽（1910）も、「洋服の裏地などに用ひられるやうになつてから、いろいろ變つたものができ」たと記すように、明治 41 年（1908）には「解し」による染織が行われ、大正時代になると捺染、絞り染めなどの「加工甲斐絹」が登場する。「The Kaiki Museum」によれば、明治時代以降の甲斐絹の主なものには無地、絵、縞があったが、前半は無地が、後半には絵が、大正時代以降には縞がその中心であったという。変化の背景のひとつに、衣生活における洋装の浸透が挙げられるだろう。明治時代後半に盛んであったという絵甲斐絹は、より広範囲かつ平面的・絵画的に裏地を用い、かつ着脱の際に背側の裏地が他者の目に留まりやすい羽織（和服）に適する。これに対し、洋服地では立体裁断となることから裏地が見える範囲は狭まり、裏地は袖口からわずかにのぞくに留まる。よって生地に施された絵は絵画というよりも模様との認識となり、縞や格子など色の組み合わせが重視される。それは絵から縞・格子への需要の変化の一因ではなかったか。

⑤文学作品のなかの甲斐絹

近代以降の文学作品には、甲斐絹は裏地や座布団地として登場する。文学作品に現れた用途が甲斐絹のすべてであるとは言えないが、読者がイメージできるほどに知られた名前であったとの推測はできる。表地として華やかに流行した郡内縞から一転して、近代以降の甲斐絹は裏地や布団地としての需要と知名度を得ていた様子がうかがえる。以下に、甲斐絹が登場する作品をあげ、その一部を引用する。

・夏目漱石『虞美人草』（明治 40 年 /1907）

床の抜殻は、こんもり高く、這い出した穴を障子に向けている。影になった方が、薄暗く夜着の模様を暈す上に、投げ懸けた羽織の裏が、乏しき光線をきらきらと聚める。裏は鼠の甲斐絹である。「少しぞくぞくするようだ。羽織でも着よう」と先生は立ち上がる。「寝ていらしたら好いでしょう」「いや少し起きて見よう」「何ですかね」「風邪でもないようだが、なに大した事もあるまい」「昨夜御出になったのが悪かったですかね」

・樋口一葉『一葉日記』（明治 29 年 /1896 5 月）

木綿かすりの羽織を身につけ裏地は甲斐絹⁽³⁴⁾

・芥川龍之介『戯作三昧』（大正 6 年 /1917）

老人はていねいに上半身の垢を落としてしまうと、止め桶の湯も浴びずに、今度は下半身を洗いはじめた。が、黒い垢すりの甲斐絹が何度となく上をこすっても、脂気の抜けた、小皺の多い皮膚からは、垢というほどの垢も出て来ない⁽³⁵⁾

・中村星湖『少年行』（明治 40 年 /1907）

一口に甲斐絹と云つて了ふものの、絵甲斐絹もある。縞甲斐絹もある。白無地もあり黒無地もあり、

綾物もあれば綾でないのも、五裏だとか何だとか、それ等は皆、裾野の乙女達の手になるのです。そして骨細で百姓の出来ない者で、小金の廻る者は一やはり甲斐絹にも生糸と同じで市がたつた一市場へ出て仕入れたり、つばから頼まれたりして、方々の国へ、所謂甲斐絹商人となつて廻つて行く。

・金子みすゞ（明治36年/1903～昭和5年/1930）『二つの小箱』

紅絹だの、縹子だの、甲斐絹だの、
 きれいな小裂が箱いっぱい。
 黒だの、白だの、みどりだの、
 なんきん玉が箱いっぱい。
 それはみいんな私のよ。

このほか、夏目伸六（漱石の次男）の著書『猫の墓一父・漱石の思い出』では、漱石が座布団皮として弁慶縞の甲斐絹を使用していたことに触れている。また、小泉八雲が明治23年（1890）8月30日から11月15日まで滞在した松江の印象を記した『神々の国の首都』（The Chief City Of The Province Of The Gods）の中で、宍道湖面に映る夕陽のうつろいを“shades of fine shot-silks”と表現しているが、これがニューオリンズ万国博覧会で魅了された甲斐絹であった可能性が指摘されている。ただし、前述のように、現時点ではニューオリンズ万国博覧会に甲斐絹が出品された記録は発見されていない。

近代の文学作品のなかに見る甲斐絹は、近世の郡内縞のような流行の衣類ではなく、表地でもない。日常着やそれに近い位置付けの、かつ裏物として登場する。さらに、『戯作三昧』では「垢すり」に使用されているとおり、羽裏である甲斐絹は仕立て直され、別の衣類や布団地・座布団地などにも繰り回され、最終的には端切れとなって使い切るものだったこともわかる。

また、近世の文学作品の項でも触れたが、少なくともここに上げた作品からは、羽裏にことさら華やかなものを用いたり、必要以上に凝っている様子は見られない。やはり甲斐絹の意匠や用途を語る際に、安易に「裏勝り」嗜好を持ち出すことには疑問を呈さざるを得ない。ただ、『虞美人草』や『一葉日記』において、あえて裏地に言及しているところを考慮すれば、表地だけでなく裏地にも気を遣う心意気があったとは考えてよいだろう。

註

1. 川村文芽（1910）「甲斐絹とお召」『婦人世界』5号
2. 現代で言うところの「額裏^{がくろう}」であろう。
3. 山梨県繊維工業試験場創立60周年記念事業協賛会（1965）『郡内機業の歩み—山梨県繊維工業試験場創立60周年を記念して—』を参照。
4. 前掲同書153頁を参照。
5. 前掲同書155頁を参照。
6. 前掲同書152頁を参照。
7. 前掲同書60頁を参照。
8. 京橋南伝馬町三丁目稲荷新道にあった化粧品屋で、江戸時代以来「美艶仙女香」という白粉の製造販売元であった。「仙女香」の名が知られたため、その名がブランド化した。明治時代にはステッキや洋傘の輸入販売も行い、国産洋傘の製造も行った。
9. 文化学園服飾博物館収蔵品データベース <https://museum.bunka.ac.jp/digmus/> に掲載。
10. 郡内地域における織物生産史を概観する限り、これら傘地と裏地の甲斐絹とは別項目で紹介されることが多い。産地においては、両者は異なる製品とみなされていた。
11. はたや記念館ゆめおーれ勝山（2019）『海を渡った福井の羽二重—ヨーロッパ・アメリカの新しいファッションへ—』

近代の甲斐絹

を参照。

12. メダルは、ミュージアム都留特別展図録『甲斐絹展』（2013）に掲載。
13. 日本名は「万国工業兼綿百年期博覧会」とされる。
14. ラフカディオ・ハーン「ニューオーリンズ博覧会—日本の展示物」（『ラフカディオ・ハーン著作集』第4巻所収）。
15. 小泉八雲記念館（2018）『小泉八雲、開かれた精神の航跡。』を参照。
16. 山梨県繊維工業試験場創立60周年記念事業協賛会（1965）『郡内機業の歩み—山梨県繊維工業試験場創立60周年を記念して—』によれば、甲斐絹は、元々が和服地であり布巾が狭いことや、生産が農家の副業的で手機を用いていることから生産量が少なく輸出用には向かなかった。その改良にいち早く乗り出したのは同じ織物産地である桐生であり、従来の「甲斐絹」を半練白甲斐絹の広巾をタフタとして輸出することに成功していた。それを受け、郡内地域でも研究が行われはじめていた。
17. 前掲同書113頁を参照。
18. 久米邦武編 田中彰校注（2003）『特命全権大使 米欧回覧記』五を参照。
19. ただし、現状ではニューオーリンズ万博への「甲斐絹」の出品申請や実績に関する資料は未確認である。
20. はたや記念館ゆめおれ勝山（2019）『海を渡った福井の羽二重—ヨーロッパ・アメリカの新しいファッションへ—』を参照。
21. 楠本町子（2019）「1884年ニューオーリンズ万国博覧会と日本の展示」『愛知淑徳大学論集—文学部篇—』第44号を参照。
22. 津久井一帯で織られていたものが、明治12~13年頃に島田村に普及した。以上は、山梨県繊維工業試験場創立60周年記念事業協賛会（1965）『郡内機業の歩み—山梨県繊維工業試験場創立60周年を記念して—』59~66頁を参照。
23. 信州上田のもので、八王子でも文化文政期に織られ、郡内地域でも下請けしたという。以上は山梨県繊維工業試験場創立60周年記念事業協賛会（1965）『郡内機業の歩み—山梨県繊維工業試験場創立60周年を記念して—』59~66頁を参照。
24. 山梨県繊維工業試験場創立60周年記念事業協賛会（1965）『郡内機業の歩み—山梨県繊維工業試験場創立60周年を記念して—』54~55頁を参照。
25. 桐生市立図書館（2019）『PDF版桐生市歴史年表』を参照。
26. 「伝産法」（1974制定）では、伝統工芸品の指定の要件のひとつに「一定の地域で産地を形成していること」を挙げる。その産地形成の条件には、原則10企業以上または30人以上の従事者によって一定の地域で製造されることを挙げる。ここでは、そのほか、織物の名称に生産地名を商標的に用いた場合を指している。
27. 2019年聞き書き。
28. 山梨県から出品したものは「甲斐絹」と表記し、差別化している。
29. 川村文芽（1910）「甲斐絹とお召」『婦人世界』5号
30. 「里昂蚕糸市況」『通商彙纂』第6号 明治27年（1884）6月（『通商彙纂』復刻版 第20巻）を参照。
31. 「明治廿七年中里昂蚕糸商況」『通商彙纂』第14号 明治28年（1885）3月（『通商彙纂』復刻版 第23巻）を参照。
32. 「里昂ニ於ケル蚕糸及絹物商況」『通商彙纂』第23号 明治28年（1885）6月（『通商彙纂』復刻版 第25巻）を参照。
33. フランスで織られた絹布を指して「甲斐絹の類」と称していることから、当時言うところの「甲斐絹」とは、山梨県産の絹布に限定せず、薄手で平織りの絹布の総称であった可能性が考えられる。
34. 斉藤緑雨の衣類についての一文。
35. 天保2年（1832）を舞台として描いた作品である。描かれた時代には「甲斐絹」の表記はまだ誕生していない。作品中では、「海気」もしくはそれに類する薄手の絹布を指す語として用いられていると考えられる。

2. 甲斐絹関係資料情報

(1). 文字資料（文学作品をのぞく）

表2 甲斐絹関係文字資料（山梨県立博物館所蔵資料）

名称	年代	資料群名	資料番号	所蔵
1 郡内絹糸等買所仰付方願書	宝永2年~文化9年 (1705)	甲州文庫	歴-2005-003-019543	山梨県立博物館
2 甲州噺	享保17年 (1732)	甲州文庫	歴-2005-003-008094	山梨県立博物館
3 萬金産業袋 巻之一~六	享保17年 (1732)		歴-2013-000-000004	山梨県立博物館
4 借用申金子之事(写)(数年来郡内絹買宿致候処身上立がたく250両借用)	安永8年 (1779)	渡邊家文書	歴-2005-085-005641	山梨県立博物館
5 松阪持参荷物代金割合勘定帳	天保5年 (1834)	甲州文庫	歴-2005-003-020605	山梨県立博物館
6 甲斐名所寿古六	嘉永1年 (1848)	甲州文庫	歴-2005-003-023145	山梨県立博物館
7 海気切代銀請取覚	明治7年 (1874)	甲州文庫	歴-2005-003-019554	山梨県立博物館
8 公借証券(内国博覧会出品の海気買入に付)	明治10年 (1877)	渡邊家文書	歴-2005-085-004565	山梨県立博物館
9 傘地買附仮控	明治16年 (1882)	大木家文書	歴-2005-051-003506	山梨県立博物館
10 瑞穂谷村両市甲斐絹相場	明治22年 (1889)	甲州文庫	歴-2005-003-019542	山梨県立博物館
11 大日本海気織物協会創立主意書	明治25年 (1892)	甲州文庫	歴-2005-003-019573	山梨県立博物館
12 雇人請状之事(養女貴家甲斐絹織工に1か年28円にて奉公)	明治26年 (1893)	渡邊家文書	歴-2005-085-004027	山梨県立博物館
13 南都留甲斐絹同業組合定款	明治28年 (1895)	甲州文庫	歴-2005-003-019574	山梨県立博物館
14 山梨県北都留郡甲斐絹業組合規約	明治28年 (1895)	中央大学寄贈文書	歴-2005-067-001868	山梨県立博物館
15 山梨県南都留郡甲斐絹業組合規約	明治28年 (1895)	甲州文庫	歴-2005-003-019409	山梨県立博物館
16 書簡(甲斐絹領掌札状)	明治33年 (1900)	大木家文書	歴-2005-051-006137	山梨県立博物館
17 甲斐絹 第3号	明治34年 (1901)	甲州文庫	歴-2005-003-002802	山梨県立博物館
18 甲斐絹 第4号	明治34年 (1901)	甲州文庫	歴-2005-003-002803	山梨県立博物館
19 甲斐絹 第6号	明治34年 (1901)	甲州文庫	歴-2005-003-002804	山梨県立博物館
20 内国勲業博甲斐絹出品目録	明治36年 (1903)	甲州文庫	歴-2005-003-019575	山梨県立博物館
21 甲斐絹色染法	明治42年 (1909)	甲州文庫	歴-2005-003-001913	山梨県立博物館
22 甲斐絹商報 第3号	明治43年 (1910)	甲州文庫	歴-2005-003-002805	山梨県立博物館
23 東宮殿下(大正天皇)行啓記念寫真帖	明治45年 (1912)	千野家文書	歴-2005-040-002281	山梨県立博物館
24 甲斐絹案内	大正2年 (1913)	甲州文庫	歴-2005-003-001907	山梨県立博物館
25 甲斐絹同業組合沿革	大正4年 (1915)	若尾資料	歴-2005-009-000906	山梨県立博物館
26 甲斐絹案内	大正5年 (1916)	甲州文庫	歴-2005-003-001908	山梨県立博物館
27 山梨県南都留郡甲斐絹同業組合定款諸給与規程	大正5年 (1916)	渡邊家資料	歴-2005-085-004577	山梨県立博物館
28 郡内絹緋運上札		甲州文庫	歴-2005-003-019563	山梨県立博物館
29 郡内絹緋札紙		甲州文庫	歴-2005-003-019562	山梨県立博物館
30 書簡(東京勲業局出品見本海気の代金または現物を返却被下度)		渡邊家文書	歴-2005-085-006972	山梨県立博物館
31 書状(米払立金のこと、および預りの郡内絹代金につき)		古屋家資料	歴-2005-007-000097	山梨県立博物館
32 米国蘭閣世界博覧会甲斐絹出品申合規約書		渡邊家文書	歴-2005-085-004573	山梨県立博物館
33 山梨県南都留郡甲斐絹業組合規約		大木家文書	歴-2005-051-004288	山梨県立博物館
34 谷村町保坂両吉より甲斐絹代金請取記		輿石・窪田家文書	歴-2005-034-000257	山梨県立博物館
35 八日町若松屋喜兵衛 甲斐絹度袋入袋		手塚家文書	歴-2005-048-001941	山梨県立博物館
36 和漢三才図会		大木家資料		山梨県立博物館

次章で述べる甲斐絹コレクションおよび関連資料を所蔵する富士技術支援センターでは、山梨県工業試験場として創立された明治38年(1905)以後の技術開発に関わる文字資料や、生産・販売(組合関係、呉服店日記など)関係の文字資料も所蔵する。本研究期間内では、これらの内容確認には至らなかった。調査と一覧表の作成は今後の課題としたい。

このほか、山梨県立図書館が所蔵する「山梨県行政文書」のうち、明治45年3月から4月にかけての皇太子(大正天皇)山梨行啓の際の献上品台帳(「奉迎送ニ関スル書類 一」)にも、南都留郡、北都留郡からの献上品として甲斐絹の名が挙げられている。その関連資料となる、当館所蔵の「写真帖」(「東宮殿下(大正天皇)行啓記念寫真帖」 収蔵番号:歴-2005-040-002281)には、それら献上品の写真も含まれている⁽¹⁾。

註

1. 該当資料については、小畑茂雄(2014)(2016)「明治45年3~4月皇太子(大正天皇)山梨行啓について(一)」および「同(二)」『山梨県立博物館研究紀要』第8集ならびに第10集に詳しい。また、本研究期間においては同資料における甲斐絹の掲載について同氏より教示を受けた。

(2). 実物資料

本研究期間においては、他県の甲斐絹の実物資料の所蔵情報について実見調査を行う予定であったが、感染症拡大防止の観点から県外所蔵の資料調査を取りやめた。以下に、それらの資料群を含め、既存の報

甲斐絹関係資料情報

告や図録等から知り得る実物資料の一覧表を掲載した。また、表に続き、山梨県博が収蔵・調査した資料について、若干の聞き書きと実見調査の内容を記載した。富士技術支援センター所蔵の甲斐絹コレクションおよび関係資料については、次章に詳述した。

表3 甲斐絹関係実物資料

分類	資料名	年代	員数	所蔵	指定	来歴等	掲載図録・論文等
海気	紫平絹地裂	18-19世紀	1	共立女子大学博物館	—		古川咲「共立女子大学博物館所蔵・資料名「各種名物裂」に関する研究:作品概要」『共立女子大学博物館年報/紀要』1号 2018年
	萌黄平絹地裂(元火消装束か)	18-19世紀	1	共立女子大学博物館	—		
	茶平絹地獅子模様裂	18世紀	1	共立女子大学博物館	—		
甲斐絹	魚茶事唐花文様錦九条袷袋(裏地)	文化7年(1810)12月	1	個人	市指定	花咲村(大月市)井上久兵衛が西涼寺九代目に寄進	ミュージアム都留特別展『甲斐絹展-甲斐絹と歩んだ都留の歴史と文化-』2013年
	江戸幕府十二代将軍家慶「縞甲斐絹敷蒲団」(縞海気)	嘉永6年(1853)以降	1	ミュージアム都留	—		
	「色大海黄」端切(御用御誂切本)	天保4年(1834)	1	鶴見大学図書館	—		
	甲斐絹の着物・横段(雛形)	昭和20年代	1		—		
	女性用羽織の甲斐絹羽裏・横段(雛形)	昭和時代初期	1		—		
	女性用羽織の甲斐絹羽裏・横段(雛形)	昭和時代初期	1		—		
	女性用羽織の甲斐絹羽裏・格子(雛形)	昭和時代初期	1		—		
	女性用羽織の甲斐絹羽裏・縞(雛形)	昭和時代初期	1		—	安藤安江(1925年上野原市生)が収集した衣類を雛形に作り替えたもの。	安藤やす江「うち織 縞の着物-養蚕農家の手織の着物-」挿藍社 2002年
	男性用羽織の甲斐絹羽裏・横段(雛形)	昭和時代初期	1		—		
	男性用羽織の甲斐絹羽裏・横段(雛形)	大正~昭和時代初期	1	国際基督教大学湯浅八郎記念館	—		
	女性用羽織の甲斐絹羽裏・横段(雛形)	大正時代	1	または	—	平成6年(1994)に101枚を東京家政大学生生活資料館に	
	男性用羽織の甲斐絹羽裏・友禪?(雛形)	大正~昭和時代初期	1	東京家政大学生生活資料館	—		
	男性用紋付羽織の甲斐絹羽裏・横段(雛形)	大正~昭和時代初期	1		—		
	男性用羽織の甲斐絹羽裏・横段(雛形)	大正~昭和時代初期	1		—		
	男性用羽織の甲斐絹羽裏・格子(雛形)	昭和時代初期	1		—		
	絵甲斐絹端切	~昭和時代初期	1		—		
	絵甲斐絹端切	~昭和時代初期	1		—		
	絵甲斐絹端切	~昭和時代初期	1		—		
	絵「甲斐絹」端切	明治時代~昭和時代初期	161		—		
	縞・格子「甲斐絹」端切	明治時代~昭和時代初期	106		—		
	無地「甲斐絹」端切	明治時代~昭和時代初期	40		—	実見あり	The Kaiki Museum https://www.pref.yamanashi.jp/kaiki/index.htm
	緋「甲斐絹」端切	明治時代~昭和時代初期	74	富士技術支援センター	—	山梨県工業試験場(明治38年(1905)に設立)の頃より収集を行ってきたコレクション	山梨県産業技術センター富士技術支援センター作成
	解「甲斐絹」端切	明治時代~昭和時代初期	25		—		
高配「甲斐絹」端切	明治時代~昭和時代初期	21		—			
その他関連資料	明治時代~昭和時代初期	57		—			
後染めの印半纏	大正時代~昭和時代初期	1	個人	—	実見あり 大月出身者が所有していたもので、明治時代生まれの父が着用。会社の式典で着用したもので、社名が染め抜かれている。無地。	山梨県立博物館調査	
格子の布団皮	昭和時代初期か	1	個人	—	実見あり 大月出身者が所有していたもので、祖母が織ったもの。		
着物の裏地と真綿袋	大正時代~昭和時代初期	3	個人	—			
甲斐絹の白無垢(嫁のオボギノ)(写真1)	昭和時代か	1	山梨県立博物館	—	山梨県史編纂時収集資料		
羽織の裏地	昭和時代初期か	1	個人	—	実見あり 古着として購入。銘仙の羽織の裏地として使用されている。絵甲斐絹。仕立て直しの痕跡あり。	山梨県立博物館調査	
絵甲斐絹柄見本	昭和40年代か	1	個人	—	実見あり 西桂村の甲斐絹問屋に関わる資料。	山梨県立博物館調査	

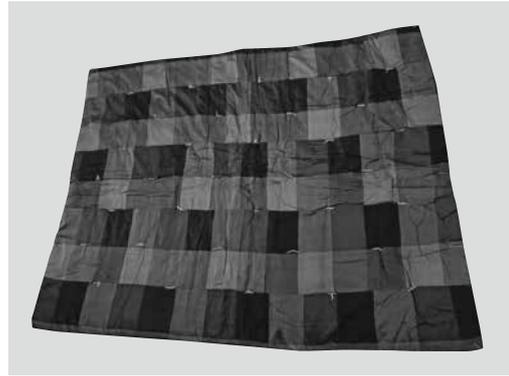
事例①大月市出身 A 家の「うちおり」と甲斐絹

布団皮（写真①）、半纏の裏地、後染めの印半纏（表地・裏地）（写真②）大島風の着物（裏地が自家製）、端切れで作った真綿袋（写真③）などが現存し、その一部を博物館資料としてご提供いただいた。現存する生地を織ったのは、主として所蔵者（昭和 13 年 /1938 生）の祖母である。自家で糸を取って織ったり、糸を買って織ったりしたもので、いわゆる「うちおり」と称される着物の類である。A 家では、明治時代には静岡県駿東郡から、その後も秋山村などから住み込みの織子を雇って置いたこともあったといい、小規模な織場経営が行われていたとみられる。以下は、生産に関する所蔵者からの聞き書きであり、小規模な甲斐絹生産と出荷の様子をうかがい知ることができる。

大月市柳川の A 家では、祖母が養蚕と機織りを生業とした。祖母は四方津の養蚕農家の生まれで、A 家に嫁に来た。当時は機織りが上手であることが「良い嫁」の条件であり、学校を出るより良いと思われていたという。その家で生まれた母は、昭和 4 年（1929）に女学校を卒業し、長女として婿を取った。

祖母は、5 月頃から 10 月頃にかけて養蚕を行い、冬季には糸作りを行った。蚕の種紙は、長野の「千曲社」のものを注文して購入し、土間に炭をおこして稚蚕飼育を行った。小学生の頃には、畳をあげて蚕をやっていた記憶もある⁽¹⁾。桑も自家の畑を持っていた。田圃ができるのは土地があり、男手もある家である。A 家では女性を中心となって稼ぐ必要があったので、桑と麦を育てた。桑畑は、昭和 35 年から 40 年（1960～65）頃には田圃に切り替え、桑の根は薪として燃した記憶がある。

祖母は平織り専門で、それ以外の縮緬などは織らなかった。織った生地は、上野原に 1 日と 15 日に立つ市に持って行って売った。売りに行くのは一般的には男性だったが、祖母の場合は自分で売りに行っていた。そのほか、繭の状態でも上野原で売った。名前が入った油単に入れて、それを集めに来る人がいた。また、自家用の衣類にする糸は、真綿からも作った。冬の天気の良い時に繭を煮て、ほぐして引っ張って枠にかけて作った。機織りは戦後まで行っていた。進駐軍のジープが乗り付けて生地を売れというのを祖母が断ったこともある。



写真① 平織り・格子柄の布団皮



写真② 後染めの印半纏



写真③ 端切れで作った真綿袋

甲斐絹関係資料情報

現存している布団皮（写真①）や真綿袋に転用した端切れ（写真③）などは、祖母が織ったものである。白生地や糸を染める時には、上等の着物を染めてもらうなら王子の「ヤジマ」で、普通は上野原の「スガノ」で染めてもらった。また、父が着用した会社の印半纏（写真②）は、自家で白生地を織り、東京で染めたものである。布団皮や裏地に使われているような先染めの生地は、自家で染めた。



写真④ 絵甲斐絹の裏地を用いた羽織

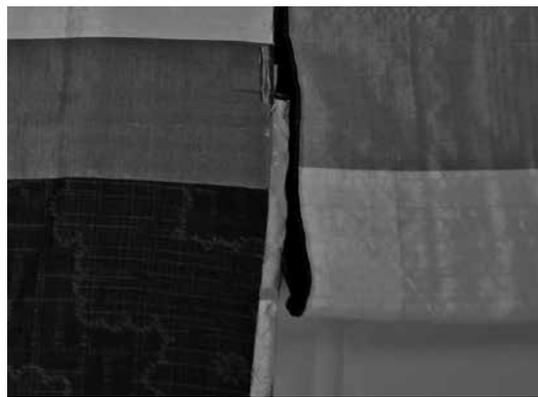
事例② 銘仙羽織の絵甲斐絹羽裏

古着として一般市場に流れたものを購入した資料である（写真④）。表地に銘仙を用い、羽裏は、横段に摺絵を組み合わせた絵甲斐絹（写真⑤）である。表地の色味は地味だが、振りと身八つ口があることから女性ものであることがわかる。また、左右の胸の位置近くに輪染みがあることから、授乳期の女性が着用したと推測される。羽裏は乳の位置に欠けがあることや、マチの上部に別布があてがわれている（写真⑥）ことから、別の男性物の羽織をほどこき、生地を転用して仕立て直したものであることがわかる。礼装用ではなく、日常着から余所行き程度に用いられたと思しき衣服である。

通常、女性用の羽裏には「五裏物」ではなく、中～小型のチラシによる絵甲斐絹⁽²⁾や縞・格子などが用いられることがほとんどである。甲斐絹のデザインについては次章に述べるが、富士技術支援センターの甲斐絹コレクションには、蝶や花、唐草、幾何学模様などを華やかな色彩で表現した女性ものと思われる生地が多数見られる。本資料の意匠も、横段に家並を繰り返し染めたチラシである。横段に用いられた色合いは抑えられているが、摺絵の線が丸みを帯び柔和さを感じさせる。女性用として使用しても違和感はない意匠であるとともに、表地の銘仙の色合いとも合っている。近代以降、女性の羽織着用が浸透するなかで、従来の男性用羽裏とは違う需要が生まれ、それが絵甲斐絹のデザインにも影響を与えていった可能性が指摘できるのではないか。



写真⑤ 横段に摺絵を組み合わせた絵甲斐絹



写真⑥ 身頃のマチ上部に別布をあてがう

註

1. その後、昭和50年代（1975～1984）には農協の稚蚕飼育所で行うようになったが、当時、集落内で養蚕を行う家はすでに2軒程であった。なお、その頃A家はすでに養蚕をしていない。
2. 柄を布全体に散らすように配置した意匠のこと。

3. 富士技術支援センター所蔵 甲斐絹コレクションおよび関連資料

富士技術支援センターは、明治38年（1905）山梨県工業試験場として南都留郡谷村（現都留市）に設置され、繊維産業が盛んな山梨県富士東部地域において、その技術発展と支援のために調査・研究が行われてきた。同センターは、明治時代末期から昭和時代にかけて収集された甲斐絹の端切れのコレクションと、関連資料を多数所蔵する。今回の研究において、この端切れを中心として資料群の調査の機会を得、令和3年（2021）10月から11月にかけて5回の調査を行い、すべての端切れの実見と撮影を行った。以下に、その概要を記すとともに、コレクション中の意匠、技法等について述べる。

(1). 甲斐絹コレクションおよび関連資料一覧

富士技術支援センターが所蔵する甲斐絹関連資料のうち、甲斐絹の端切れは約470点である。コレクションのなかには、一部同センター職員の購入品も含まれる。台紙に貼られて整理された端切れは、「絵」「無地」「縞・格子」「縞」「解」「高配」「加工」の7つに分類され、分類ごとに帙に納められ、保管されている。端切れは試験場が生産者から購入したものや、試織したものと考えられ、一部には購入年、製作地、製作者や一尺の価格などの情報も記録される。これ以外の端切れ類は、2つの木箱に納められ、保管されている。以下に、表4として、富士技術支援センター所蔵の甲斐絹コレクションおよび関連資料の一覧を掲載した。あわせてコレクションの全画像を、巻末に資料編として掲載するとともに、組織や糸色が確認できる顕微鏡画像も掲載した。資料画像に付与した各番号は、以下に掲載する一覧表の資料番号に対応する。

表4 富士技術支援センター所蔵 甲斐絹コレクションおよび関連資料一覧

箱番号	資料番号	時代:和暦(西暦)	寸法:縦×横 単位(mm)	意匠等	技法	生地の色	備考	調査日
絵甲斐絹 1	1 - 1	明治 43 (1910)	395 × 350	古銭	摺り	白		20211022
	1 - 2	大正 2 (1913)	410 × 350	文字	摺り	赤		20211022
	1 - 3	明治 40 (1907)	433 × 352	竹/青海波/段	摺り	橙/緑		20211108
	1 - 4	大正 2 (1913)	389 × 350	竹	摺り	白		20211022
	1 - 5	明治 43 (1910)	435 × 350	三つ巴	摺り			20211022
	1 - 6		456 × 355	幾何学/段	摺り/縞	橙/紫		20211022
	1 - 7	大正 2 (1913)	410 × 355	竹	摺り	白		20211022
	1 - 8	大正 2 (1913)	430 × 355	楓/格子	摺り/縞	青/白		20211022
	1 - 9	大正 2 (1913)	405 × 355	抽象/段	摺り/縞	茶/青/象牙		20211022
	1 - 10	大正 2 (1913)	405 × 350	竹/雀/段	摺り/縞	白/墨/藍/赤		20211022
	1 - 11	大正 2 (1913)	423 × 350	瓢箪/段	摺り/縞	藍/桃/黒/鼠/象牙		20211022
	1 - 12	大正 3 (1914)	425 × 355	鏝/段	摺り/縞	墨/象牙/茶/薄茶		20211022
	1 - 13	大正 3 (1914)	420 × 355	松竹梅/段	摺り/縞	象牙/緑/青		20211022
	1 - 14	大正 2 (1913)	375 × 353	菊と蝶/段	摺り/縞	象牙/青/緑		20211022
	1 - 15	大正 2 (1913)	425 × 348	菊/格子/段	摺り/縞	白/薄橙/青/黒		20211022
	1 - 16	大正 3 (1914)	410 × 355	雀/雀/段	摺り/縞	白/象牙/藍/鼠		20211022
	1 - 17	大正 2 (1913)	393 × 355	菖蒲/牡丹/縞/格子	摺り/縞/格子	黒/灰/白/茶/紺/桃		20211108
	1 - 18	大正 2 (1913)	375 × 350	文字/桜/段	摺り/縞	白/青/茶/黒/朱/緑		20211022
	1 - 19		310 × 355	花紋/七宝/段	摺り/縞	象牙/紫/赤/緑		20211022
	1 - 20	大正 5 (1916)	355 × 350	馬/銜/格子	摺り/描き/経緯格子	薄茶/茶		20211022
	1 - 21		440 × 355	麻の葉/花紋/段	摺り/縞	象牙/橙/水		20211022
	1 - 22	明治 43 (1910)	426 × 353	印籠/縞/段	摺り/縞/縞	白/灰/紺/赤		20211108
	1 - 23	明治 43 (1910)	430 × 350	萩/蝶/格子	摺り/格子/縞	象牙/茶/青/水		20211022
	1 - 24		345 × 355	花葉玉(桜)/銜/段/縞	摺り/段/縞	薄茶/茶/黒		20211022
	1 - 25	明治 40 (1907)	325 × 355	花鳥紋/木賊/花格子/段	摺り/縞	象牙/青/茶/緑		20211022
	1 - 26	明治 42 (1909)	195 × 356	松/暈し段	摺り/縞	象牙/茶		20211022
	1 - 27	大正 5 (1916)	395 × 355	草花/段	摺り/縞	白/茶/橙/若草	一尺14銭	20211022
	1 - 28	大正 2 (1913)	405 × 352	竹/唐草/段	摺り/縞	薄茶/茶/青		20211022
	1 - 29	大正 2 (1913)	405 × 352	蝙蝠/段/格子	摺り/縞	象牙/橙/薄橙/青/藍	紙付箋「四拾六點」	20211022
	1 - 30	大正 2 (1913)	434 × 354	萩/薄/流水/段	摺り/縞	灰/紺/萌黄/縹/朱		20211108
	1 - 31	大正 5 (1916)	420 × 350	抽象/段	摺り/糸/縞	白/青		20211022
	1 - 32	大正 2 (1913)	410 × 353	雀踊り/段	摺り/縞	白/象牙/抹茶		20211108
	1 - 33	大正 3 (1914)	410 × 356	松/輪繫ぎ/段	摺り/縞	白/墨/藍/朱		20211022
	1 - 34	明治 43 (1910)	400 × 352	千鳥/蝶/庵木瓜/格子	摺り/格子/縞縞	白/黒		20211022

甲斐絹コレクション一覧

箱番号	資料番号	時代・和暦(西暦)	寸法:縦×横 単位(mm)	意匠等	技法	生地の色	備考	調査日
	1 - 35	大正 3 (1914)	410 × 350	提灯 / 木柱 / 簾 / 段	摺り / 縞	象牙 / 若草 / 藍 / 茶	屋形船の意匠	20211022
	1 - 36	大正 2 (1913)	405 × 353	文字 / 絞り染め風 / 段	摺り / 縞	象牙 / 茶 / 青 / 黒		20211022
	1 - 37							
	1 - 38	大正 3 (1914)	387 × 360	菖蒲 / 流水 / 段	摺り / 縞	薄水 / 薄黄 / 藍		20211022
	1 - 39	大正 2 (1913)	430 × 355	一富士二鷹(多嘉) 三茄 / 格子 / 段	摺り / 描き / 縞	白 / 黒 / 赤		20211022
	1 - 40	大正 2 (1913)	407 × 350	立涌 / 段	摺り / 縞	象牙 / 黒 / 青		20211022
	1 - 41	大正 2 (1913)	600 × 350	楓 / 縹縹	摺り / 縞	白 / 青 / 水		20211022
	1 - 42	明治 41 (1908)	190 × 350	鳶	摺り	茶		20211022
	1 - 43	明治 43 (1910)	414 × 352	龍と虎 / 段	摺り / 縞	薄茶 / 茶 / 墨 / 白		20211022
	1 - 44		300 × 352	銜 / 格子	摺り / 格子	薄茶 / 茶		20211022
	1 - 45	明治 40 (1907)	357 × 355	円 / 抽象 / 段	摺り / 縞	薄紫 / 紫 / 赤 / 緑 / 黄		20211022
	1 - 46	明治 42 (1909)	190 × 343	柿 / 鳥 / 段 / 緋	摺り / 縞 / 横緋	白 / 薄紫 / 紫		20211022
	1 - 47	明治 42 (1909)	205 × 350	鶏 / 緋 / 格子	摺り / 格子 / 緋	白 / 茶 / 藍		20211022
	1 - 48	大正 2 (1913)	390 × 352	絞り染め風 / 幾何学 / 段	摺り / 縞	象牙 / 青	型の幅 340-350	20211022
	1 - 49	明治 40 (1907)	450 × 352	蜜柑 / 流水 / 段	摺り / 縞	青 / 緑 / 黄	下部針孔	20211022
絵甲斐絹 2	1 - 50	明治 43 (1910)	428 × 350	竜 / 格子 / 緋	摺り / 格子 / 緋	白 / 朱 / 象牙 / 灰 / 薄茶 / 薄橙 / 紺 / 鼠 / 朱		20211022
	1 - 51	大正 5 (1916)	384 × 352	幾何学 / 段	摺り / 縞	白 / 茶 / 墨		20211108
	1 - 52	明治 43 (1910)	417 × 356	文字 / 人物 / 格子 / 緋 / 段	摺り / 描き? / 格子 / 縞 / 緋	白 / 薄橙 / 墨 / 藍		20211022
	1 - 53	明治 43 (1910)	375 × 357	花 / 青海波 / 段	摺り / 縞	青 / 緑 / 桃 / 朱		20211022
	1 - 54		353 × 370	花 / 蝶 / 幾何学 / 段	摺り / 縞	白 / 藍 / 薄茶		20211022
	1 - 55	大正 3 (1914)	397 × 357	竹 / 雀	摺り	白		20211022
	1 - 56	明治 40 (1907)	218 × 352	桜 / 破れ七宝 (三折か)	摺り	桃		20211022
	1 - 57	明治 43 (1910)	362 × 350	蝶 / 重ね菱	摺り	薄橙		20211022
	1 - 58	明治 43 (1910)	422 × 350	松ぼっくり / 松葉	摺り	白 / 灰緑		20211108
	1 - 59		400 × 108	BASEBALL	捺染?			20211022
	1 - 60	大正 2 (1913)	407 × 351	古鏡 / 勾玉 / 剣	摺り	藍		20211022
	1 - 61	明治 42 (1909)	154 × 344	絞り染め風 / 格子	摺り / 緋 / 格子	白 / 藍 / 朱		20211022
	1 - 62	大正 2 (1913)	406 × 355	家並 / 段	摺り / 縞	象牙 / 薄黄 / 薄藍 / 藍		20211022
	1 - 63	明治 43 (1910)	404 × 352	蝶 / 格子	摺り / 格子	白 / 藍 / 墨		20211022
	1 - 64	明治 43 (1910)	422 × 352	動物? / 格子	摺り / 格子	薄茶 / 白 / 墨		20211022
	1 - 65	大正 2 (1913)	303 × 357	兜 / 段	摺り / 縞	白 / 紺 / 黒		20211108
	1 - 66	大正 3 (1914)	417 × 355	竹 / 段	摺り / 縞	白 / 薄茶 / 茶		20211022
	1 - 67	大正 3 (1914)	364 × 352	鎮 / 虫? / 段	摺り / 縞	鼠 / 青 / 橙		20211022
	1 - 68	明治 43 (1910)	328 × 351	麻の葉 / 輪繫ぎ格子 / 段	摺り / 縞	象牙 / 緑 / 墨 / 藍		20211022
	1 - 69	大正 2 (1913)	392 × 352	花鳥 / 格子 / 斜め縞(緋) / 段	摺り / 縞 / 緋	薄茶 / 茶 / 墨 / 藍		20211022
	1 - 70	明治 41 (1908)	188 × 350	雪輪 / 桜 / 帆船 / 破れ格子 / 緋格子	摺り / 緋	鼠 / 橙 / 赤紫		20211022
			210 × 350	竹 / 筍 / 緋	摺り / 緋	鼠 / 茶		20211022
	1 - 71	明治 43 (1910)	420 × 351	雀 / 段	摺り / 縞	鼠 / 薄橙 / 茶		20211022
	1 - 72	明治 41 (1908)	204 × 345	燕 / 緋格子	摺り / 緋	薄茶 / 藍		20211022
			200 × 350	木 / 蜘蛛 / 段 / 緋	摺り / 縞 / 緋	墨 / 朱		20211022
	1 - 73	明治 43 (1910)	420 × 350	花 / 格子・緋	摺り / 緋 / 格子	象牙 / 藍 / 墨		20211022
	1 - 74	明治 43 (1910)	415 × 360	苦舟 / 千鳥 / 格子	摺り / 格子	鼠 / 墨		20211022
	1 - 75		297 × 350	萩 / 格子	摺り / 格子	白 / 紺 / 茶 / 薄茶		20211108
	1 - 76	明治 41 (1908)	198 × 348	草 / 段	摺り / 縞	墨 / 薄茶 / 黒		20211022
			196 × 347	撫子 / 段 / 緋	摺り / 縞 / 緋	墨 / 朱 / 白		20211022
	1 - 77	明治 43 (1910)	444 × 349	三保の松原 / 格子	摺り / 格子	鼠 / 黒		20211022
	1 - 78	大正 5 (1916)	414 × 350	裂取更紗 / 水玉 / 段	摺り / 縞	白 / 赤 / 青磁 / 青緑		20211108
	1 - 79	明治 43 (1910)	361 × 350	鶴丸 / 緋 / 格子	摺り / 格子 / 格子	白 / 青磁 / 赤茶 / 薄桃 / 朱		20211108
	1 - 80	大正 3 (1914)	415 × 352	二つ巴 / 桔梗 / 段 / 緋	摺り / 縞 / 緋	象牙 / 緑 / 藍		20211022
	1 - 81	明治 41 (1908)	191 × 346	丁子 / 緋 / 格子	摺り / 格子 / 緋	墨 / 薄茶 / 藍		20211022
			194 × 343	燕? / 緋 / 格子	摺り / 格子 / 緋	墨 / 薄茶 / 藍		20211022
	1 - 82	明治 43 (1910)	411 × 350	麻の葉 / 段	摺り / 縞 / 緋	象牙 / 藍 / 鼠 / 黒		20211022
	1 - 83	大正 5 (1916)	407 × 353	お手玉? (花・麻の葉・巴ほか) / 格子	摺り / 格子	象牙 / 赤 / 青 / 黄 / 緑 / 茶	一尺14銭	20211022
	1 - 84	大正 3 (1914)	406 × 355	手毬 / 縞	摺り / 縞	象牙 / 薄橙 / 薄藍 / 墨		20211022
	1 - 85	明治 43 (1910)	400 × 350	花 / 格子 / 緋	摺り / 格子 / 緋	薄橙 / 茶 / 薄茶 / 藍		20211022
	1 - 86	大正 2 (1913)	411 × 359	桐 / 花押 / 文字 / 段	摺り / 縞	鼠 / 茶		20211022
	1 - 87	明治 41 (1908)	192 × 348	雪輪に桜 / 帆船 / 段 / 緋	摺り / 縞 / 段	鼠 / 茶 / 藍	1-70と同型	20211022
			205 × 349	雪輪に桜 / 帆船 / 段 / 緋	摺り / 縞 / 段	鼠 / 墨	1-70と同型	20211022
	1 - 88		449 × 355	松竹梅 / 段	摺り / 描き / 縞	薄黄 / 深緑 / 藍 / 薄紫	型の幅 344 ~ 355	20211022
	1 - 89		341 × 353	梅桜 / 流水 / 船 / 段 / 緋	摺り / 縞 / 緋	象牙 / 茶 / 薄茶		20211022
	1 - 90		456 × 356	丸に宝尽くし / 段	摺り / 縞	白 / 薄茶 / 臘脂 / 藍		20211022
	1 - 91		306 × 356	水車 / 唐草 / 段	摺り / 縞	白 / 紫 / 薄茶	型の幅 340 ~ 345	20211022
	1 - 88		449 × 355	松竹梅 / 段	摺り / 描き / 縞	薄黄 / 深緑 / 藍 / 薄紫	型の幅 344 ~ 355	20211022
	1 - 89		341 × 353	梅桜 / 流水 / 船 / 段 / 緋	摺り / 縞 / 緋	象牙 / 茶 / 薄茶		20211022

甲斐絹コレクション一覧

箱番号	資料番号	時代・和暦(西暦)	寸法:縦×横 単位(mm)	意匠等	技法	生地の色	備考	調査日
絵甲斐絹 3	1 - 90		456 × 356	丸に宝尽くし/段	摺り/縞	白/薄茶/胭脂/藍		20211022
	1 - 91		306 × 356	水車/唐草/段	摺り/縞	白/紫/薄茶	型の幅 340 ~ 345	20211022
	1 - 92	明治 43 (1910)	416 × 352	楓/ヤツデ/縞	摺り/縞	白/藍		20211022
	1 - 93	大正 5 (1916)	377 × 352	幾何学(曲線)/段	摺り/縞	象牙/青/茶/薄黄	型の幅 342~345	20211022
	1 - 94	大正 3 (1914)	671 × 352	木立/斜縞/段	摺り/縞	白/薄茶/橙/黒		20211022
	1 - 95	明治 41 (1908)	197 × 350	緋/段	緋/縞	白/象牙/藍/茶		20211022
	1 - 96	大正 5 (1916)	410 × 351	蕨/蝶/格子	摺り/格子	白/薄橙	一尺 14 銭	20211022
	1 - 97	大正 5 (1916)	427 × 355	花札/桜/段/緋	摺り/縞/緋	白/朱/緑/藍	一尺 14 銭	20211022
	1 - 98							
	1 - 99	大正 5 (1916)	267 × 357	幾何学/縞/段	摺り/縞/縞	茶/青/緑		20211022
	1 - 100	明治 41 (1908)	195 × 356	竹/格子/緋	摺り/格子/緋	墨/赤/白		20211022
	1 - 101	大正 5 (1916)	200 × 347	蕨/縞/緋	摺り/縞/緋	藍/茶		20211022
	1 - 102		382 × 354	雪景色の村	摺り	白		20211027
	1 - 103	大正 5 (1916)	220 × 346		摺り	白		20220313
	1 - 103	大正 3 (1914)	415 × 353	鼓/扇/笹	摺り	白/抹茶		20211108
	1 - 104	大正 3 (1914)	405 × 356	葛紋/縞	摺り/縞	象牙/桃		20211027
	1 - 105	明治 43 (1910)	376 × 354	布袋/宝珠/段/緋	摺り/緋/縞	白/黒/赤/黄/茶		20211027
	1 - 106		433 × 351	九重ね	摺り	白/黄/赤		20211108
	1 - 107		376 × 352	丸に鳥/幾何学/緋/段	摺り/緋/縞	茶/黄	上部劣化	20211027
	1 - 108		384 × 358	丸に千鳥/七宝/段	摺り/縞	黄/白/緑	型の幅 345 ~ 355	20211027
	1 - 109	大正 5 (1916)	424 × 356	蕨/格子	摺り/格子			20211027
	1 - 110	大正 5 (1916)	381 × 353	梅・藤・松・梅/段	摺り/縞	薄黄/紫		20211027
	1 - 111	明治 40 (1907)	392 × 350	唐草/丸に花/丸に幾何学/段	摺り/縞	茶/苔/緑/薄紫		20211027
	1 - 112		391 × 353	唐草/丸に花/段	摺り/縞	白/紺/若草/薄茶		20211108
	1 - 113	大正 2 (1913)	410 × 351	千鳥/蝶/庵木瓜/段	摺り/縞	藍/薄水/薄黄	型の幅 342~345	20211027
	1 - 114		373 × 351	菖蒲/花/獣/段/沙綾型に楓/七宝に楓	摺り/縞	白/紺/薄茶/深赤/茶		20211108
	1 - 115	大正 3 (1914)	404 × 353	丸に草花/丸に器物/段	摺り/縞	薄緑/青/白/赤		20211027
	1 - 116	大正 5 (1916)	380 × 352	笹/流水に蝶・蛇籠/鹿の子/段	摺り/縞	白緑/薄緑/紺/薄茶/黄		20211027
	1 - 117	大正 3 (1914)	388 × 354	楓/縞/緋	摺り/緋/縞	白/藍/赤	「検査之証」印、 「納税済 都留税務署」印、「山梨県南都留郡甲斐絹同業組合 造人」印 ■大野亀吉	20211027
	1 - 118	大正 2 (1913)	419 × 350	唐傘/波/文字/段	摺り/描き/縞	白/緑/黒/灰/朱/緑/薄茶	書き文字か	20211108
	1 - 119	大正 3 (1914)	393 × 357	丸に侍/文字/段	摺り/縞	白/薄藍/藍	「検査之証」印	20211027
	1 - 120	明治 43 (1910)	429 × 352	竹/格子	摺り/緋	薄橙/紫/青/黒		20211027
	1 - 121	明治 41 (1908)	195 × 345	竹/月/格子/緋	摺り/格子/緋	白/紺/紫/薄茶/青磁		20211108
			197 × 351	松に鶴/格子/緋	摺り/格子/緋	水色/茶/魚げ茶/橙/薄橙/灰/緑		20211108
	1 - 122	大正 5 (1916)	412 × 352	○△□/菖蒲/格子/縞/段	摺り/縞	赤/緑/黄/紫/金	1尺 14 銭	20211027
	1 - 123	明治 43 (1910)	361 × 355	笹/鶴丸/段/緋	摺り/緋/縞	白/水色/黒/薄緑/抹茶/橙/紺/茶		20211027
	1 - 124	大正 2 (1913)	412 × 355	みみずく/段	摺り/縞	白/薄橙/抹茶/黒/灰緑/水色	型の幅 337	20211108
	1 - 125	大正 2 (1913)	355 × 383	丸に楓・竹・雲/縞	摺り/縞	薄茶/緑/黒		20211027
	1 - 126	大正 2 (1913)	410 × 347	木立/水面/縞	摺り/縞	薄茶/黄/青/白		20211027
	1 - 127	大正 2 (1913)	404 × 352	鳳凰/幾何学/格子	摺り/縞	薄黄/青/藍/赤		20211027
	1 - 128	大正 2 (1913)	409 × 357	クレマチス/縞	摺り/縞	薄黄/白/青/黒		20211027
	1 - 129	大正 2 (1913)	356 × 346	雪持ちの竹/露芝と月/笹/吉野山と太鼓/文字	摺り/縞	白/赤/茶/薄黄	文字の型が裏表逆	20211027
	1 - 130	大正 3 (1914)	382 × 353	竹杵に蕨/縞	摺り/縞	白		20211027
	1 - 131	大正 2 (1913)	517 × 354	虎と竹/縞	摺り/縞	白/緑/橙/墨		20211027
	1 - 132	大正 2 (1913)	408 × 350	月と竹/縞	摺り	薄茶/墨/緑/青		20211027
	1 - 133	大正 2 (1913)	411 × 355	鳳凰/馬/雲	摺り	緑/藍/鼠/白		20211027
	1 - 134	大正 2 (1913)	398 × 352	松場と幾何学/縞	摺り/縞	水色/青/薄茶/墨	型の幅 344	20211027
	1 - 135	大正 2 (1913)	401 × 354	唐草/幾何学/段	摺り/縞	薄茶/藍/茶/鼠	型の幅 332 ~ 337	20211027
	1 - 136	明治 40 (1907)	418 × 353	蕨/縞	摺り/縞	薄茶/緑/薄黄/茶		20211027
	1 - 137	明治 42 (1909)	200 × 351	雪輪に桜/帆船/格子/緋	摺り/縞/緋	藍/白/茶		20211027
	1 - 137	明治 42 (1909)	202 × 346	植物/縦暈し	摺り/暈し	金糸		20211027
	1 - 138	大正 3 (1914)	411 × 351	桜/傘/輪繫ぎ/縞	摺り/縞	白/茶/薄茶/橙/緑		20211027
	1 - 139	大正 3 (1914)	425 × 356	柳に幔幕/袖/アヒル/縞	摺り/縞	薄茶/茶/藍/橙/薄緑		20211027
	1 - 140	大正 3 (1914)	408 × 354	竹/縞	摺り/縞	茶/藍/薄藍		20211027
	1 - 141	大正 2 (1913)	412 × 355	紋付羽織と侍/壺/縞	摺り/縞	薄緑/薄青/藍/墨	忠臣蔵か	20211027
	1 - 142	大正 2 (1913)	407 × 353	竹/藤/縞	摺り/縞	薄黄/薄橙/青		20211027

甲斐絹コレクション一覧

箱番号	資料番号	時代・和暦(西暦)	寸法:縦×横 単位(mm)	意匠等	技法	生地の色	備考	調査日
	1 - 143	大正 2 (1913)	411 × 350	鳳凰/蝶/縞/緋	摺り/縞/緋	白/藍/茶/薄緑		20211027
	1 - 144	大正 2 (1913)	419 × 353	網干に千鳥、日/蛇籠/縞	摺り/縞	薄茶/水色/墨/薄緑		20211027
	1 - 145	大正 2 (1913)	409 × 351	氷割れあるいは壺垂れ/縞	摺り/縞	白/茶		20211027
	1 - 146	大正 2 (1913)	388 × 350	寺院/笠と尺八/「天莫」/桜	摺り/縞	藍/鼠/紫/薄茶		20211027
	1 - 147	大正 3 (1914)	410 × 348	木立と鳥/木目に「奉納」/破魔矢/緋/縞	摺り/縞/緋	薄黄/薄茶/薄緑/茶/墨		20211027
	1 - 148	大正 3 (1914)	403 × 354	獅子と牡丹/縞	摺り/縞	薄水色/薄黄		20211027
	1 - 149	明治 40 (1907)	377 × 346	丸に花/格子/縞	摺り/格子/縞	茶/白/黄土色/緑		20211027
	1 - 150	大正 5 (1916)	423 × 355	菊/格子/縞	摺り/格子/縞	白/青/藍/緑	一尺14銭	20211027
	1 - 151	明治 43 (1910)	334 × 350	雪持ち松と鶴	摺り	白		20211027
	1 - 152	明治 43 (1910)	381 × 348	梅/文字/格子	摺り/格子	白/藍		20211027
	1 - 153	明治 43 (1910)	362 × 347	鶏/太陽/槌	摺り/縞	白/墨/胭脂		20211027
	1 - 154	大正 5 (1916)	426 × 352	梅/麻の葉/格子	摺り/格子	白/墨	一尺14銭	20211027
	1 - 155	大正 3 (1914)	427 × 355	梅と月/縞	摺り/縞	白/墨/薄墨		20211027
	1 - 156	明治 43 (1910)	391 × 353	梅と月	摺り	白		20211027
	1 - 157	明治 43 (1910)	450 × 349	富士の巻狩/縞	摺り/縞	薄橙/紫		20211027
	1 - 158		356 × 352	蝶/「大入り」/芝居番付	摺り/縞	白/桃/藍/緑/水色	番付の文字は表裏逆	20211027
	1 - 159	明治 43 (1910)	400 × 360	文字/縞	摺り/縞	白/黄/藍	ヤブレ	20211027
	1 - 160		1000 × 315	笹/瓢箪/緋/縞	摺り/縞	水色/薄鼠/藍/茶	羽裏解き	20211027
	1 - 161		600 × 352	花/縞	摺り/縞	白/薄藍	羽裏解き	20211027
緋甲斐絹	2 - 1	明治 43 (1910)	349 × 348	達磨/緋	摺り/緋	紺/緑/茶/白		20211027
	2 - 2	大正 3 (1914)	431 × 353	緋/亀甲	緋	黒/橙/緑		20211027
	2 - 3	明治 43 (1910)	374 × 348	緋/よろけ縞	緋	紺/白/橙/紫		20211027
	2 - 4	大正 3 (1914)	389 × 372	緋/格子	緋/格子	白/青/橙		20211027
	2 - 5	大正 3 (1914)	420 × 355	緋/亀甲/格子	緋/格子	白/茶/紺		20211027
	2 - 6	明治 43 (1910)	440 × 350	緋/亀甲/縞	緋/縞	白/紺		20211027
	2 - 7	明治 42 (1909)	193 × 345	緋/麻の葉	緋	薄橙/黒		20211027
	2 - 7	明治 42 (1909)	184 × 349	緋/網	緋	鼠/紺		20211027
	2 - 8	明治 43 (1910)	438 × 348	緋/斜め縞/縞	緋/縞	赤/白/薄緑/鼠		20211027
	2 - 9	明治 43 (1910)	438 × 359	緋/星/縞	緋/縞	茶/白/鼠		20211027
	2 - 10	明治 41 (1908)	185 × 209	緋/斜め縞	緋	白/赤/黒		20211027
	2 - 10	明治 41 (1908)	186 × 210	緋/斜め縞	緋	白/黒		20211027
	2 - 11	明治 41 (1908)	186 × 213	格子/縦緋	緋/格子	白/金茶/紺/茶/赤/赤茶		20211108
	2 - 12	明治 41 (1908)	181 × 214	緋/格子	緋/格子	白/紺		20211027
	2 - 12	明治 41 (1908)	180 × 215	緋/格子	緋/格子	紺/白/茶		20211027
	2 - 13	明治 41 (1908)	184 × 214	緋/格子	緋/格子	茶/鼠/白		20211027
	2 - 13	明治 41 (1908)	186 × 214	緋/縞	緋/縞	白/桃/黒		20211027
	2 - 14	明治 41 (1908)	181 × 213	緋/斜め縞	緋	藍/薄藍/白		20211027
	2 - 14	明治 41 (1908)	181 × 216	緋/縞	緋/縞	橙/茶/白		20211027
	2 - 15	明治 41 (1918)	184 × 214	緋/縞	緋/縞	赤/青/白/薄藍		20211027
	2 - 15	明治 41 (1918)	184 × 212	緋/格子	緋/格子	藍/薄茶/灰/白		20211027
	2 - 16	明治 43 (1910)	432 × 348	緋/亀甲/斜め縞	緋	茶/薄緑/緑/青/白		20211027
	2 - 17	大正 3 (1914)	350 × 285	格子/横緋	格子/緋	茶/濃紺/薄茶/水色/茶		20211108
	2 - 18	大正 3 (1914)	349 × 293	格子/横緋	格子/緋	墨/青磁/若草/黒/黄/赤		20211108
	2 - 19	明治 43 (1910)	437 × 351	横緋	緋	黒/赤		20211108
	2 - 20	明治 42 (1909)	141 × 352	緋/斜め縞	緋	白/黒/紫		20211027
	2 - 20	明治 42 (1909)	100 × 350	緋/格子	緋/格子	白/紫/赤/薄紫		20211027
	2 - 21	明治 42 (1909)	350 × 175	緋/松	緋/摺	紫/桃/薄紫		20211027
	2 - 22	明治 41 (1908)	183 × 215	緋/格子	緋/格子	紺/白/茶/黄		20211027
	2 - 22	明治 41 (1908)	181 × 216	緋/縞	緋/縞	紺/橙/鼠		20211027
	2 - 23	明治 41 (1908)	182 × 215	緋/格子	緋/格子	紺/白/朱		20211027
	2 - 23	明治 41 (1908)	183 × 213	緋/縞	緋/縞	白/紺/茶		20211027
	2 - 24	明治 43 (1910)	154 × 347	緋/菱格子/縞	緋/縞	白/赤/黒		20211027
	2 - 25	大正 3 (1914)	408 × 352	格子	格子	象牙/黒/橙/緑/白/紺/緑/朱/茶		20211108
	2 - 26	大正 3 (1914)	355 × 325	格子/横緋	格子/緋	白/赤茶/茶/藍		20211108
	2 - 27		250 × 353	格子/横緋	格子/緋	茶/白/茶/黄/緑/白/薄緑/青		20211108
	2 - 27		195 × 351	段	縞	藤/紫/茶/黄/緑/水色		20211108
	2 - 28	明治 41 (1908)	177 × 215	緋/斜め縞	緋	朱/白/薄茶/黒		20211027
	2 - 28	明治 41 (1908)	181 × 215	緋/格子	緋/格子	黒/朱/紺/白		20211027
	2 - 29	明治 41 (1908)	182 × 214	緋/斜め縞	緋	黒/白/朱/茶		20211027
	2 - 29	明治 41 (1908)	176 × 212	緋/斜め縞	緋	紺/鼠		20211027
	2 - 30	明治 41 (1908)	180 × 212	緋/斜め縞	緋	白/朱/黒		20211027
	2 - 30	明治 41 (1908)	182 × 214	緋/格子	緋/格子	緑/紺/白		20211027
	2 - 31	明治 41 (1908)	184 × 215	緋/縞	緋/縞	紺/茶/白		20211027
	2 - 31	明治 41 (1908)	185 × 210	緋/格子	緋/格子	茶/白/黒		20211027
	2 - 32	大正 3 (1914)	410 × 353	格子/横緋	格子/緋	若草/茶/群青/		20211108

甲斐絹コレクション一覧

箱番号	資料番号	時代・和暦(西暦)	寸法:縦×横 単位(mm)	意匠等	技法	生地の色	備考	調査日
	2 - 33	大正 3 (1914)	415 × 354	縞/横縞	縞/縞	朱/白/青		20211108
	2 - 34	大正 3 (1914)	310 × 355	格子/横縞	格子/縞	白/赤/薄茶/茶/ 焦げ茶/水色/青/ 象牙		20211108
	2 - 35	大正 3 (1914)	349 × 331	格子/渦巻	格子/縞	濃紺/緑/赤		20211108
	2 - 36	明治 43 (1910)	182 × 343	縞/格子/輪	縞/格子	紺/鼠/朱		20211027
			234 × 349	縞/縞	縞/縞	白/鼠/薄茶		20211027
	2 - 37	大正 3 (1914)	415 × 344	縞/亀甲/縞	縞/縞	紺/鼠/茶/薄茶		20211027
	2 - 38	大正 3 (1914)	360 × 270	縞/亀甲/縞	縞/縞	象牙/朱/緑/薄橙/ 薄茶/薄緑/茶		20211027
	2 - 39	大正 3 (1914)	373 × 350	格子/横縞	格子/縞	薄橙/赤紫/水色/ 茶/緑		20211108
	2 - 40	大正 3 (1914)	395 × 354	格子/横縞	格子/縞	白/茶/橙/青/黄/ 緑		20211108
	2 - 41	明治 41 (1908)	185 × 214	縞/格子	縞/格子	藍/鼠/朱/薄茶/ 白		20211027
			177 × 215	縞/縞	縞/縞	朱/黒		20211027
	2 - 42	明治 43 (1910)	440 × 350	縞/輪繫ぎ	縞	紺/白/薄橙		20211027
	2 - 43	大正 3 (1914)	409 × 351	縞/格子	縞/格子	白/茶/鼠		20211027
	2 - 44	明治 43 (1910)	440 × 351	縞/紗綾型	縞	象牙/朱	鉛筆書きにて [261 ①]	20211027
	2 - 45	明治 43 (1910)	445 × 350	縞/縞	縞/縞	桃/紺/薄黄/赤/ 橙		20211027
	2 - 46	大正 3 (1914)	356 × 233	縞/縞/格子	縞/格子	橙/薄茶/紺/茶/ 緑/赤		20211027
	2 - 47	大正 3 (1914)	354 × 310	縞/縞/格子	縞/格子	象牙/茶/薄茶/朱/ 緑		20211027
	2 - 48	大正 3 (1914)	356 × 197	縞/縞/格子	縞/格子	薄茶/紺/象牙/朱/ 茶/緑		20211027
	2 - 49	大正 3 (1914)	354 × 328	縞/縞/格子	縞/格子	薄茶/紺/朱/茶/ 緑		20211027
	2 - 50	大正 3 (1914)	410 × 350	縞/格子	縞/格子	茶/白/紺/薄黄		20211027
	2 - 51	大正 3 (1914)	350 × 232	縞/縞/輪繫ぎ	縞/縞	鼠/臙脂/紺/白		20211029
	2 - 52	大正 3 (1914)	349 × 350	縞/格子	縞/格子	象牙/黒/朱/茶/ 緑		20211029
	2 - 53	明治 43 (1910)	438 × 351	格子/縞	格子/縞	薄橙/青/灰/黒/ 白		20211029
	2 - 54	大正 3 (1914)	412 × 354	縞/格子	縞/格子	黒/黄土/緑/象牙/ 薄橙/橙/茶		20211029
	2 - 55	明治 43 (1910)	443 × 354	縞/縞	縞/縞	鉄紺/紺/鼠/橙		20211029
	2 - 56	明治 43 (1910)	449 × 350	縞/渦巻	縞	薄橙/赤		20211029
	2 - 57	明治 43 (1910)	440 × 347	縞/縞	縞/縞	紺/紫/白/茶/水 色		20211029
	2 - 58	大正 3 (1914)	411 × 355	縞/亀甲/縞	縞/縞	薄茶/茶/朱/緑/ 赤		20211029
	2 - 59	明治 43 (1910)	440 × 352	縞/格子	縞/格子	白/黒/茶/紺/洗 朱/薄緑		20211029
	2 - 60	明治 43 (1910)	422 × 347	縞/輪繫ぎ/格子	縞/格子	紺/白/橙		20211029
	2 - 61	明治 43 (1910)	450 × 350	縞/輪繫ぎ/格子	縞/格子	紺/象牙		20211029
	2 - 62	大正 3 (1914)	364 × 350	縞/格子	縞/格子	薄茶/茶/黒/橙/ 緑		20211029
	2 - 63	大正 5 (1916)	213 × 354	縞/縞	縞/縞	橙/茶/緑/薄黄		20211029
	2 - 64	大正 3 (1914)	412 × 353	縞/網/縞	縞/縞	鉄紺/紺/黒/橙		20211029
	2 - 65	大正 4 (1915)	517 × 323	縞/縞	縞/縞	白/黒/水色	広巾、上部に 注記アリ	20211029
	2 - 66	大正 3 (1914)	418 × 354	縞/縞/輪繫ぎ	縞/縞	紺/臙脂/薄茶/白		20211029
	2 - 67	大正 3 (1914)	412 × 354	縞/縞/輪繫ぎ	縞/縞	紺/鼠/臙脂/白/ 藍		20211029
	2 - 68	大正 3 (1914)	404 × 360	縞/縞/格子	縞/格子	橙/薄橙/象牙/緑		20211029
	2 - 69	大正 5 (1916)	409 × 352	縞/格子	縞/格子	白/薄茶/緑/薄緑/ 橙/黒/黄		20211029
	2 - 70	大正 3 (1914)	406 × 350	縞/格子	縞/格子	白/黒/紺/橙/赤/ 薄橙/薄緑		20211029
	2 - 71	大正 3 (1914)	410 × 350	縞/縞/亀甲	縞/格子	臙脂/紺/白		20211029
	2 - 72	大正 4 (1915)	354 × 223	縞	縞	薄茶/紺/茶/鼠		20211029
	2 - 73		444 × 364	縞/亀甲/縞	縞/縞	紺/鼠/青鼠	広巾か	20211029
	2 - 74		445 × 364	縞/よろけ縞	縞	紺/鼠/白/臙脂	広巾か	20211029
縞・格子 甲斐絹	3 - 1	大正 5 (1916)	418 × 353	縞/格子	縞/格子	薄茶/黒/茶/緑/ 黄/白		20211029
	3 - 2	大正 4 (1915)	331 × 355	格子	格子	黒/薄鼠/鼠/紺/ 薄紺/茶	左右下に検印 跡アリ	20211029
	3 - 3	大正 4 (1915)	358 × 228	格子	格子	黒/鼠/薄鼠/紺/ 茶		20211029
	3 - 4	大正 4 (1915)	403 × 358	格子	格子	茶/黒/薄茶/薄鼠/ 赤/茶		20211029
	3 - 5	大正 3 (1914)	417 × 352	格子	格子	茶/水色/青/黄土/ 黒		20211029
	3 - 6	大正 4 (1915)	309 × 358	格子	格子	鼠/紺/灰緑/黒/ 薄黄土		20211029
	3 - 7	大正 5 (1916)	276 × 348	縞/格子	縞/格子	薄紫/臙脂/象牙/ 桃/紫		20211029

甲斐絹コレクション一覧

箱番号	資料番号	時代・和暦(西暦)	寸法:縦×横 単位(mm)	意匠等	技法	生地の色	備考	調査日
	3 - 8	大正 4 (1915)	242 × 353	格子	格子	薄茶 / 紺 / 薄紺 / 黒 / 茶 / 薄鼠		20211029
			146 × 355	格子	格子	薄茶 / 黒 / 茶 / 薄鼠		20211029
	3 - 9	大正 4 (1915)	142 × 358	格子	格子	薄茶 / 黒 / 紺 / 茶 / 鼠		20211029
	3 - 10	明治 42 (1909)	191 × 351	格子	格子	茶 / 紺 / 白 / 鼠 / 藤 / 青		20211029
	3 - 11	明治 41 (1908)	182 × 354	格子 / 暈し	格子	桃 / 薄桃 / 黒		20211029
	3 - 12	大正 5 (1916)	350 × 267	格子	格子	紺 / 白 / 鼠 / 薄緑 / 朱		20211029
	3 - 13	大正 4 (1915)	358 × 197	格子	格子	鼠 / 紺 / 茶 / 白 / 朱 / 薄茶		20211029
	3 - 14	大正 4 (1915)	420 × 357	格子	格子	鼠 / 紺 / 薄茶 / 薄紺		20211029
	3 - 15	大正 4 (1915)	283 × 362	格子	格子	鼠 / 紺 / 白 / 薄茶 / 薄紺		20211029
	3 - 16	大正 5 (1916)	430 × 355	格子	格子	薄茶 / 緑 / 紺 / 茶		20211029
	3 - 17	大正 3 (1914)	352 × 318	格子	格子	赤茶 / 青 / 白 / 薄茶		20211029
	3 - 18	明治 43 (1910)	436 × 350	格子	格子	紺 / 灰緑 / 白 / 鼠 / 朱		20211029
	3 - 19	大正 4 (1915)	391 × 355	格子	格子	白 / 紺 / 薄水色 / 薄鼠 / 鼠 / 茶	左右下に検印跡アリ	20211029
	3 - 20	大正 3 (1914)	393 × 350	格子	格子	薄茶 / 紺 / 茶 / 緑 / 橙 / 象牙		20211029
	3 - 21	明治 43 (1910)	437 × 345	格子	格子	薄鼠 / 橙 / 灰緑 / 鼠 / 赤		20211029
	3 - 22	明治 43 (1910)	436 × 351	格子 / 紺	格子 / 紺	象牙 / 黒 / 薄茶 / 薄鼠 / 鼠 / 紺 / 薄橙		20211029
	3 - 23	大正 3 (1914)	392 × 352	縞	縞	白 / 薄緑 / 黄緑 / 緑 / 茶 / 薄橙 / 橙 / 朱 / 赤		20211029
	3 - 24	大正 3 (1914)	410 × 354	縞	縞	薄茶 / 紺 / 緑 / 茶		20211029
	3 - 25	大正 5 (1916)	417 × 350	縞	縞	黄土 / 灰緑 / 茶 / 焦げ茶		20211029
	3 - 26	明治 42 (1909)	195 × 350	縞 / 暈し	縞	象牙 / 桃 / 紫 / 臘脂		20211029
	3 - 27	大正 5 (1916)	410 × 352	縞	縞	赤茶 / 茶 / 黄土 / 深緑 / 緑		20211029
	3 - 28		411 × 353	格子	格子	桃 / 緑		20211029
	3 - 29	大正 3 (1914)	412 × 355	縞	縞	茶 / 薄茶 / 紺		20211029
	3 - 30	大正 4 (1915)	383 × 352	縞	縞	紺 / 茶 / 苔色		20211029
	3 - 31	大正 4 (1915)	330 × 324	縞	縞	薄茶 / 茶 / 焦げ茶 / 象牙 / 墨 / 薄墨		20211029
	3 - 32		424 × 352	縞	縞	紺 / 薄茶 / 赤茶		20211029
			161 × 260	縞	縞	鼠 / 茶 / 灰		20211029
	3 - 33	大正 4 (1915)	102 × 272	縞	縞	濃紺 / 鼠 / 薄茶 / 茶 / 紺		20211029
	3 - 34		280 × 355	縞 / 紺	縞 / 紺	紫 / 黄土 / 白 / 紺	玉虫風	20211029
	3 - 35		280 × 358	縞 / 紺	縞 / 紺	黒 / 紫 / 黄 / 赤 / 臘脂 / 藤 / 灰緑 / 緑 / 黄土		20211029
	3 - 36	大正 5 (1916)	216 × 354	格子	格子	赤茶 / 紺 / 黄 / 橙		20211029
			146 × 351	格子	格子	黄 / 茶 / 赤茶 / 緑 / 紺		20211029
	3 - 37		385 × 355	縞	縞	茶 / 緑 / 黄	検査印アリ	20211029
	3 - 38	大正 4 (1915)	409 × 352	縞	縞	灰 / 鼠 / 象牙 / 薄鼠 / 茶 / 墨		20211029
	3 - 39	大正 4 (1915)	357 × 280	縞	縞	紫 / 紺 / 薄茶		20211029
	3 - 40	大正 4 (1915)	335 × 357	縞	縞	鼠 / 茶 / 紺 / 薄鼠 / 薄紺		20211029
	3 - 41	大正 4 (1915)	361 × 356	縞	縞	鼠 / 薄茶 / 紺 / 墨 / 茶 / 黄土		20211029
	3 - 42		353 × 353	縞	縞	萌黄 / 抹茶 / 青 / 白 / 黄 / 黒		20211029
	3 - 43		227 × 352	縞	縞	茶 / 白 / 橙 / 赤 / 緑		20211029
			181 × 351	縞	縞	黄土 / 白 / 緑 / 抹茶		20211029
	3 - 44		146 × 355	縞	縞	黄土 / 緑 / 茶 / 紫 / 薄茶	孔、ヤブレ	20211029
	3 - 45		212 × 356	縞	縞	臘脂 / 抹茶 / 青 / 白		20211029
	3 - 46		382 × 353	縞	縞	茶 / 白 / 緑 / 紫		20211029
	3 - 47		231 × 352	縞	縞	紫 / 抹茶 / 黄 / 緑 / 橙 / 深緑		20211029
	3 - 48	大正 3 (1914)	344 × 354	縞	縞	灰 / 鼠 / 茶 / 緑 / 黒		20211029
	3 - 49	大正 4 (1915)	357 × 162	縞	縞	灰緑 / 青 / 鼠 / 焦げ茶 / 白	検査印アリ	20211029
	3 - 50	大正 3 (1914)	194 × 352	縞	縞	黒 / 薄茶 / 薄焦げ茶 / 茶 / 薄鼠 / 緑	説明書きアリ	20211029
			133 × 356	縞	縞	灰緑 / 墨 / 白 / 茶		20211029
	3 - 51	大正 4 (1915)	164 × 352	縞 / 紺	縞 / 紺	白 / 墨 / 灰桃 / 紺 / 鼠		20211029
	3 - 52	明治 43 (1910)	427 × 347	縞	縞	灰 / 薄橙 / 黒 / 青 / 茶 / 象牙 / 白		20211029

甲斐絹コレクション一覧

箱番号	資料番号	時代・和暦(西暦)	寸法:縦×横 単位(mm)	意匠等	技法	生地の色	備考	調査日
	3 - 53	大正 3 (1914)	374 × 353	縞	縞	灰紫 / 茶 / 薄茶 / 紺		20211029
	3 - 54	大正 3 (1914)	397 × 212	縞	縞	薄緑 / 茶 / 橙 / 象牙	広巾か	20211029
	3 - 55	明治 43 (1910)	441 × 350	縞	縞	紺 / 鼠 / 茶 / 薄茶		20211029
	3 - 56		452 × 351	段	縞 / 綾織り	茶 / 金茶 / 朱 / 白		20211108
	3 - 57		380 × 359	縞	縞 / 綾織り	黒 / 赤 / 緑		20211029
	3 - 58		457 × 354	縞	縞 / 綾織り	茶 / 黒 / 緑		20211029
	3 - 59		464 × 355	縞	縞 / 綾織り	臙脂 / 縹 / 黄緑		20211029
	3 - 60		412 × 358	段	縞 / 綾織り	赤茶 / 抹茶 / 茶 / 黄 / 藍		20211108
	3 - 61		424 × 354	格子	格子 / 綾織り	薄茶 / 鼠 / 紺 / 茶		20211029
	3 - 62		463 × 355	段	縞 / 綾織り	茶 / 金茶 / 緑		20211108
	3 - 63		463 × 357	縞	縞 / 綾織り	茶 / 薄茶 / 臙脂 / 黒 / 薄黄土		20211029
	3 - 64		470 × 357	段	縞 / 綾織り	朱 / 緑 / 茶		20211108
	3 - 65	大正 6 (1917)	900 × 250	縞	縞	薄桃 / 灰 / 黒 / 白 / 墨 / 赤 / 薄橙 / 薄緑 / 緑 / 紫 / 薄紫	輸出用、広巾	20211029
	3 - 66	大正 9 (1920)	593 × 316	格子	格子 / 縹子織り	白 / 黒 / 象牙		20211029
	3 - 67	昭和 5 (1930)	705 × 331	縞	縞	茶 / 薄茶 / 薄黄土 / 黒	人絹、広巾、シワ	20211029
	3 - 68	大正 6 (1917)	435 × 307	縞	縞	灰 / 水色 / 白 / 橙 / 黒 / 紫 / 緑		20211029
	3 - 69	昭和 5 (1930)	424 × 361	縞	縞	赤 / 紅 / 橙 / 薄橙 / 桃	人絹、広巾、シワ	20211029
	3 - 70	大正 15 (1926)	480 × 350	縞	縞	薄桃 / 薄黄 / 桃 / 紫 / 赤	アードラ・シルク綾	20211029
	3 - 71	大正 4 (1915)	900 × 285	縞	縞	黒 / 白	広巾	20211029
	3 - 72	大正 4 (1915)	520 × 335	縞	縞	黒 / 白	広巾	20211029
	3 - 73	大正 4 (1915)	342 × 326	縞	縞	黒 / 白	広巾	20211029
	3 - 74	大正 5 (1916)	533 × 305	縞	縞	白 / 青 / 紫 / 黒 / 茶		20211029
	3 - 75	昭和 4 (1929)	510 × 355	縞	縞	橙 / 肌色 / 薄橙 / 赤 / 青	キレット	20211029
	3 - 76	大正 5 (1916)	222 × 349	縞	縞	茶 / 黒 / 薄茶 / 緑 / 青		20211029
	3 - 77	大正 12 (1923)	520 × 370	格子	格子	灰 / 薄青 / 茶 / 白 / 緑	右下斜めに裁断	20211029
	3 - 78	明治 39 (1906)	415 × 351	格子	格子	白 / 臙脂 / 薄茶 / 緑		20211029
	3 - 79	大正 6 (1917)	695 × 350	格子	格子	白 / 薄黄 / 灰緑 / 緑 / 青 / 茶	広巾	20211029
	3 - 80	大正 8 (1919)	463 × 365	格子	格子 / 縹子織り	白 / 黒		20211029
	3 - 81	昭和 5 (1930)	441 × 355	格子	格子	茶 / 薄茶 / 白 / 紺		20211029
	3 - 82		325 × 354	縞	縞	紫 / 黄 / 緑		20211029
	3 - 83	明治 39 (1906)	258 × 355	格子	格子 / 白の浮糸の星	青 / 赤 / 緑 / 黄 / 白	折り目キレット	20211029
	3 - 84	大正 9 (1920)	436 × 340	格子	格子	灰 / 白 / 赤 / 緑		20211029
	3 - 85		460 × 338	格子	格子	白 / 黒 / 赤	広巾	20211029
	3 - 86	大正 5 (1916)	715 × 340	格子	格子	紫 / 白 / 黒 / 青 / 赤	広巾	20211029
	3 - 87	昭和 5 (1930)	295 × 370	格子	格子	橙 / 白 / 紅	人絹、「整理品」の札	20211029
			435 × 370	格子	格子	橙 / 白 / 紅	人絹	20211029
	3 - 88	大正 15 (1926)	620 × 350	縞	縞	紅 / 紫 / 桃 / 薄桃	人絹	20211029
	3 - 89	大正 5 (1916)	677 × 325	縞	縞 / 縹子織り	白 / 紫 / 緑 / 薄緑		20211029
	3 - 90	明治 43 (1910)	429 × 357	縞	縞 / 縹子織り	茶 / 薄藍 / 薄茶 / 黒 / 薄黄土 / 赤		20211029
	3 - 91	大正 15 (1926)	564 × 350	縞	縞	桃 / 紅 / 紫 / 薄桃	人絹、3-88と同じか	20211029
	3 - 92	大正 4 (1916)	915 × 290	縞	縞	青 / 白	広巾	20211029
	3 - 93	大正 15 (1926)	535 × 370	縞	縞	鼠 / 茶	人絹	20211029
	3 - 94	大正 5 (1916)	522 × 320	縞	縞	薄黄 / 黄 / 橙	広巾	20211029
	3 - 95	昭和 5 (1930)	724 × 347	格子 / 緋	格子 / 緋	橙 / 薄緑 / 黄緑 / 薄黄		20211029
	3 - 96		422 × 352	縞	縞	紺 / 茶 / 黄緑 / 灰 / 茶		20211029
	3 - 97	大正 5 (1916)	435 × 357	縞	縞	白 / 赤 / 緑 / 橙 / 黄 / 紺		20211029
	3 - 98	昭和 5 (1930)	419 × 354	格子	格子	藤 / 橙 / 朱 / 赤	下部にキレット	20211029
	3 - 99		940 × 350	格子	格子	紺 / 白	広巾	20211029
	3 - 100	大正 2 (1913)	720 × 323	縞	縞	黒 / 白	広巾	20211029
	3 - 101	明治 45 (1926)	354 × 406	段	縞	白 / 鼠 / 薄橙 / 黒 / 水色		20211108
			270 × 81	縞	縞	紺 / 鼠 / 茶		20211029
	3 - 102	大正 4 (1915)	277 × 57	縞	縞	紺 / 薄茶		20211029
			277 × 67	縞	縞	薄茶 / 灰緑 / 黒 / 茶 / 象牙		20211029
	3 - 103		425 × 365	縞	縞	緋 / 赤 / 白 / 緑		20211029
	3 - 104		410 × 365	縞	縞	赤 / 緑 / 紺 / 茶		20211029
	3 - 105		470 × 280	縞	縞	黒 / 緑 / 黄 / 赤	下部に針孔、広巾	20211029
	3 - 106		453 × 364	縞	縞	赤 / 紺 / 黄緑 / 茶		20211029

甲斐絹コレクション一覧

箱番号	資料番号	時代・和暦(西暦)	寸法:縦×横 単位(mm)	意匠等	技法	生地の色	備考	調査日
解新甲斐絹	4 - 1	大正 3 (1914)	459 × 354	縞/解し/つる草	解し捺染/縞	白/黒/緑/薄茶/橙/薄橙		20211108
	4 - 2		405 × 357	解し/網目/蝶	解し捺染	赤/黒/黄/緑/白		20211108
	4 - 3	大正 2 (1913)	449 × 335	解し/藤/段	解し捺染/縞	白/緑/灰/赤/鼠/灰緑/薄茶		20211108
	4 - 4	大正 3 (1914)	405 × 373	解し/竹/縞	解し捺染/縞	黒/茶/白/青/ピンク/鼠/薄茶		20211108
	4 - 5	昭和 4 (1929)	550 × 362	解し/八重梅	解し捺染	緑		20211108
	4 - 6	昭和 4 (1929)	540 × 365	解し/木の実	解し捺染	橙		20211104
	4 - 7	昭和 6 (1931)	276 × 354	解し/格子と花	解し捺染	桃		20211104
	4 - 8	昭和 4 (1929)	640 × 360	解し/チューリップ	解し捺染	朱/薄橙		20211104
	4 - 9	明治 41 (1908)	410 × 352	解し/朝顔	解し捺染か	白/青/赤		20211104
	4 - 10	昭和 2 (1927)	686 × 357	解し/木目調/幾何学	解し捺染	橙	一尺 88 匁、ヤブレ・キレット	20211104
	4 - 11	明治 40 (1907)	423 × 352	解し/格子/ブドウ	解し捺染/格子	薄茶/桃/白/茶/紺		20211104
	4 - 12	大正 5 (1916)	535 × 365	解し/あじだい	解し捺染	赤	一尺 40 匁、キレット	20211104
	4 - 13	大正 3 (1914)	251 × 357	解し/格子/バラ	解し捺染/格子	紺		20211104
	4 - 14	明治 44 (1911)	412 × 351	解し/松/格子	解し捺染/格子	白/灰緑/抹茶/薄鼠/黒/白/黄土	機械織か、緯糸絹	20211104
	4 - 15	昭和 4 (1929)	590 × 350	解し/斜め縞/幾何学	解し捺染	銅	機械捺染、一尺 84 匁、キレット	20211104
	4 - 16	明治 44 (1911)	355 × 360	解し/松/縞	解し捺染	白/白緑/灰緑	機械織か、緯糸面	20211104
	4 - 17		380 × 352	解し/花(菊か)	解し捺染	象牙		20211104
	4 - 18	昭和 4 (1929)	765 × 378	解し/とんぼ/幾何学	解し捺染	朱	キレット	20211104
	4 - 19	昭和 2 (1927)	695 × 330	解し/幾何学	解し捺染	白/桃	折り目キレット	20211104
	4 - 20	昭和 4 (1929)	391 × 360	解し/花	解し捺染	白/橙		20211104
	4 - 21	明治 39 (1906)	329 × 354	解し/ほかし/玉虫	解し捺染	白(緯糸)		20211104
	4 - 22	昭和 4 (1929)	670 × 364	解し/唐花	解し捺染	緑	下部針孔、キレット	20211104
	4 - 23	昭和 4 (1929)	570 × 361	解し/チューリップ	解し捺染	朱/薄橙	折り目キレット	20211104
	4 - 24	昭和 4 (1929)	342 × 362	解し/枝葉	解し捺染	白		20211104
	4 - 25	大正 2 (1913)	395 × 364	解し/菊	解し捺染	白		20211104
無地甲斐絹	5 - 1	明治 45 (1912)	387 × 351	無地	玉虫	白/薄緑		20211104
	5 - 2	明治 45 (1912)	381 × 353	無地		橙		20211104
	5 - 3	明治 45 (1912)	430 × 353	無地	玉虫	鼠/紺		20211104
	5 - 4	明治 45 (1912)	320 × 355	無地		薄橙		20211104
	5 - 5	明治 45 (1912)	379 × 354	無地		山吹		20211104
	5 - 6	明治 45 (1912)	336 × 355	無地	玉虫	白/黄土		20211108
	5 - 7	明治 45 (1912)	342 × 354	無地		白		20211104
	5 - 8	明治 45 (1912)	374 × 356	無地		鼠		20211108
	5 - 9	大正 1 (1912)	311 × 350	無地		桃	「紅梅甲斐絹」	20211104
	5 - 10	大正 5 (1916)	685 × 308	無地		薄緑	広巾	20211104
	5 - 11	大正 15 (1926)	650 × 325	無地		魚げ茶	「重目甲斐絹」	20211104
	5 - 12	明治 42 (1908)	455 × 355	無地	玉虫	ピンク/薄緑/灰藤		20211108
	5 - 13	明治 42 (1909)	436 × 354	無地	玉虫	紫/緑/茶		20211104
	5 - 14	大正 4 (1915)	557 × 331	無地		薄藤	広巾	20211104
	5 - 15	大正 4 (1915)	475 × 325	無地		紺	広巾	20211104
	5 - 16	大正 1 (1912)	340 × 354	無地		桃		20211104
	5 - 17	明治 42 (1909)	405 × 355	無地	玉虫	水色/紅/藤		20211104
	5 - 18	大正 4 (1915)	690 × 319	無地		紅藤	広巾	20211104
	5 - 19	大正 4 (1915)	695 × 302	無地		紫	広巾	20211104
	5 - 20	大正 7 (1918)	340 × 357	無地	壁織り	赤	「壁甲斐絹」	20211104
	5 - 21	明治 42 (1909)	410 × 356	無地	玉虫	青/ピンク/緑	付着物、孔、キズ	20211108
	5 - 22	明治 42 (1909)	281 × 354	無地	玉虫	青緑/紫		20211104
	5 - 23	明治 42 (1909)	436 × 355	無地	玉虫	緑/桃		20211104
	5 - 24	明治 42 (1909)	411 × 353	無地	玉虫	萌黄/薄緑/灰梅		20211108
	5 - 25	大正 2 (1913)	390 × 357	無地		鼠	「ルイジン」	20211104
	5 - 26	大正 4 (1915)	321 × 335	無地	玉虫	ピンク/黄		20211104
	5 - 27	大正 5 (1916)	690 × 160	無地	綾織り	白	広巾、輸出用	20211104
	5 - 28	明治 42 (1909)	400 × 348	無地	玉虫	青緑/紫/茶		20211104
	5 - 29	大正 6 (1917)	421 × 343	無地	玉虫	水色/紫/萌黄	「カメレオン甲斐絹」、広巾	20211104
	5 - 30	大正 5 (1916)	708 × 220	無地	綾織り	黒	広巾、輸出用	20211104
	5 - 31	大正 4 (1915)	370 × 360	無地	玉虫	黄/白	シミ	20211104
	5 - 32	明治 42 (1909)	425 × 351	無地	玉虫	緑/紫/茶		20211104
	5 - 33	大正 6 (1917)	729 × 325	無地	壁織り	白	輸出用、「壁甲斐絹」、広巾	20211104
	5 - 34	大正 4 (1915)	414 × 330	無地	玉虫	ピンク/青緑		20211108
	5 - 35	明治 45 (1912)	372 × 358	無地		紺		20211104
	5 - 36	明治 45 (1912)	372 × 356	無地		藍		20211104
	5 - 37	明治 45 (1912)	369 × 354	無地		薄抹茶		20211104
	5 - 38	大正 6 (1917)	679 × 357	無地	壁織り	白	輸出用、「壁甲斐絹」、広巾	20211104
5 - 39		429 × 365	無地	玉虫/綾織り	赤/緑		20211104	
5 - 40		429 × 367	無地	綾織り	赤		20211104	

甲斐絹コレクション一覧

箱番号	資料番号	時代・和暦(西暦)	寸法:縦×横 単位(mm)	意匠等	技法	生地の色	備考	調査日
高配甲斐絹	6 - 1	大正 6 (1917)	404 × 292	無地	高配織り/縞	白/桃/黒/灰/灰 緑	広巾か	20211108
	6 - 2	大正 6 (1917)	401 × 170	無地	高配織り/格子	白/黒/桃/象牙/ 焦げ茶	広巾か	20211108
			400 × 170	無地	高配織り/縞	白/赤/水色/藍色/ /桃色	広巾か	20211108
	6 - 3	大正 6 (1917)	399 × 285	無地	高配織り/格子	白/水色/藍	広巾か	20211108
			103 × 64	無地	高配織り/縞	白/桃	広巾か	20211108
	6 - 4	大正 6 (1917)	410 × 127	無地	高配織り/縞	白/紫/青/水色/ 桃/灰	広巾か	20211108
			408 × 1309	無地	高配織り/縞	白/黒	広巾か	20211108
			395 × 124	無地	高配織り/縞	白/ピンク/青緑/ 藍/青	広巾か	20211108
	6 - 5	大正 6 (1917)	392 × 278	無地	高配織り	白/ピンク	広巾か	20211108
	6 - 6	大正 6 (1917)	382 × 255	無地	高配織り	白/水色/薄橙	広巾か	20211108
	6 - 7	大正 6 (1917)	392 × 332	無地	高配織り	白/水色/ピンク	広巾か	20211108
	6 - 8	大正 6 (1917)	420 × 320	無地	高配織り	白/薄茶/水色	広巾か	20211108
	6 - 9	大正 6 (1917)	404 × 313	無地	高配織り	白/水色	広巾か	20211108
	6 - 10	大正 6 (1917)	436 × 305	無地	高配織り/縞	白/紫/藤/緑	広巾か	20211108
	6 - 11	大正 6 (1917)	424 × 314	無地	高配織り/縞	白/藤	広巾か	20211108
	6 - 12	大正 6 (1917)	467 × 300	無地	高配織り/縞	白/桃/薄藍/象牙	広巾か	20211108
	6 - 13	大正 6 (1917)	453 × 250	無地	高配織り/縞	白/薄緑	広巾か	20211108
	6 - 14	大正 6 (1917)	445 × 152	無地	高配織り/縞	白/灰緑/ピンク/ 梅鼠/黒/象牙	広巾か	20211108
			440 × 160	無地	高配織り/縞	白/黒/赤/白	広巾か	20211108
	6 - 15	大正 6 (1917)	409 × 81	無地	高配織り/縞	白/薄藍/黒/ピン ク	広巾か	20211108
			445 × 180	無地	高配織り/縞	白/青/薄藍/水色	広巾か	20211108
6 - 16	大正 6 (1917)	410 × 111	無地	高配織り/縞	白/薄藍	広巾か	20211108	
		430 × 105	無地	高配織り/縞	白/藤/墨/水色	広巾か	20211108	
		430 × 105	無地	高配織り/縞	白/黒	広巾か	20211108	
6 - 17	大正 6 (1917)	408 × 84	無地	高配織り/格子	白/薄藍/水色	広巾か	20211108	
		403 × 106	無地	高配織り/縞	白/赤茶/水色/ピ ンク/藍	広巾か	20211108	
		408 × 295	無地	高配織り/縞	白/水色/薄茶/藍	広巾か	20211108	
6 - 18	大正 5 (1916)	700 × 295	無地	高配織り/縞	白/藤/青緑/黒	広巾か	20211108	
6 - 19	大正 5 (1916)	682 × 330	無地	高配織り/縞	白/薄茶	広巾か	20211108	
6 - 20	大正 5 (1916)	217 × 352	無地	高配織り/縞	白/黒/赤/藤/緑/ 紫	広巾か	20211108	
		298 × 338	無地	高配織り/縞	白/赤/黒/青/薄 橙	広巾か	20211108	
		253 × 335	無地	高配織り/縞	白/緑/薄橙/黒	広巾か	20211108	
		269 × 352	無地	高配織り/縞	白/藍/緑	広巾か	20211108	
6 - 21	大正 6 (1917)	710 × 305	無地	高配織り/縞	白/ピンク	広巾か	20211108	
木箱1	木箱1 - 1		1000 × 355	無地	玉虫	茶/薄茶	No.239、寸法 は最大値	20211111
	木箱1 - 2		1443 × 354	無地		鳩羽色	No.238、寸法 は最大値、検 印アリ	20211111
	木箱1 - 3		360 × 160	縞	縞	黒/臙脂/灰	No.244、折ら れて糸留め	20211111
	木箱1 - 4		1226 × 353	縞		白/桃/紫/黄/赤/ /白	No.242	20211111
	木箱1 - 5		351 × 276	蝶	ナチュラル(型染)	紫		20211111
	木箱1 - 6		239 × 108		ナチュラル(型染)	赤/紫	検印アリ	20211111
	木箱1 - 7		347 × 149		ナチュラル(型染)	緑	検印アリ	20211111
	木箱1 - 8		555	絞り染め	絞り染め	桃		20211111
	木箱1 - 9		333	絞り染め	絞り染め	桃	墨書き	20211111
	木箱1 - 10		350 × 138	絞り染め	絞り染め	桃		20211111
	木箱1 - 11		341 × 312	絞り染め	絞り染め	茶		20211111
	木箱1 - 12		345 × 345	絞り染め	絞り染め	桃		20211111
	木箱1 - 13		346		ナチュラル(型染)	赤	記載5m	20211111
	木箱1 - 14		354 × 688	鶴/松葉/鬘斗/梅/牡丹	型染め	赤/白/緑/金/茶/ /朱	夜具地	20211111
	木箱1 - 15		360 × 673	獅子/牡丹	型染め	茶/薄茶/抹茶/白/ /茶	夜具地、カビ、 シミ	20211111
	木箱1 - 16		567 × 576	唐草	紋織り/型染め	紅/白	夜具地	20211111
	木箱1 - 17		672 × 363	花車	紋織り/型染め	黄/桃/白/緑	夜具地	20211111
	木箱1 - 18		185 × 365	格子	格子	朱/黄/白/緑/赤	夜具地、人絹、 折られている	20211111
	木箱1 - 19		374 × 366		紋織り	白/茶/赤茶/薄茶	夜具地、記載 1m、折られて いる	20211111
	木箱1 - 20		367 × 580	解し/鶴	解し	白/紫/赤紫/薄茶	夜具地、孔	20211111
	木箱1 - 21		360	花卉の中に松竹梅、菱、牡 丹、亀甲、菊など	型染め	白/金茶/赤/緑	八端夜具地、 記載一反	20211111
	木箱1 - 22		620 × 380	格子	格子	焦げ茶/赤茶/薄茶	八端座布団地、 ラベル痕	20211111
	木箱1 - 23		625 × 1305	格子	格子	茶/薄茶/焦げ茶	八端座布団地、 札アリ	20211111
	木箱1 - 24		633 × 310	格子/緋	格子/緋	茶/紺	八端座布団地	20211111

甲斐絹コレクション一覧

箱番号	資料番号	時代・和暦(西暦)	寸法:縦×横 単位(mm)	意匠等	技法	生地の色	備考	調査日
木箱1	25		627 × 265			抹茶 / 茶	八端座布団地	20211111
	26		627 × 441	格子	格子	抹茶 / 茶	八端座布団地、 「五疋付二拾円也」	20211111
	27		628 × 631	沙綾型	型染め	濃緑 / 薄茶	八端座布団地	20211111
	28		602 × 890	梅	型染め	金茶 / 茶	八端座布団地	20211111
	29		614 × 646	花紋	型染め	濃緑、黄	八端座布団地、 カビ	20211111
	30		625 × 668	解し / 市松 / 鳳凰	解し	紫 / 薄茶	八端座布団地	20211111
	31		625 × 785	解し / 暈し	解し	黄土 / 茶 / 薄茶	紋座布団地、 五枚分	20211111
	32		256 × 160	冊子			「本絹無地」「人絹」生地見本冊子	20211111
	33		908 × 932	幾何学		抹茶 / 薄茶	八端風呂敷、 裏に「誠」の墨書	20211111
	34		753 × 770	解し / ぶどう	解し	紺 / 朱 / 金茶	八端風呂敷	20211111
	35		625 × 654	解し / 糸菊	解し	緑 / 朱	八端風呂敷	20211111
	36		530 × 540		織り模様	緑 / 茶 / 赤 / 青	小風呂敷(富士工業技術センター記念品)	
	37		690 × 1141	紋甲斐絹に描繪	紋織り / 描き	白	羽裏解き、広巾	20211111
木箱2	1			八端座布団地		茶 / 青 / 緑	ヤブレ	20211111
	2		616 × 625	八端座布団地		藍 / 灰 / 灰白		20211111
	3		620 × 630	八端座布団地		臘脂 / 薄茶 / 抹茶	シール痕	20211111
	4		360 × 140	人絹無地甲斐絹、「改良尺」、記載一疋		白	記載一疋、折られている	20211111
	5		360 × 142	人絹天織無地甲斐絹、記載一疋		鼠	記載一疋、折られている	20211111
	6		297 × 362	写真織額絵			キレット	20211111
	7		273 × 439	写真織額絵、西郷隆盛				20211111
	8		662 × 387	捺染天鷲絨額絵、静物			ホツレ、キレット	20211111
	9		336 × 273	捺染天鷲絨額絵、清水寺				20211111
	10			絹、紗、薄物収集品 29 枚				20211111
	11			満州向け製品 3 枚				20211111
	12			ネクタイ製品 1 枚				20211111
	13		950 × 610	男性用羽織、(羽裏) 絵甲斐絹、縞 / 烏に小鳥	摺り	白 / 灰緑 / 黄土	寸法は最大値(着丈・裾)	20211111
14		885 × 635	女性用羽織、(羽裏) 無地、玉虫、絵を4種類を縦ぎ合わせる	摺り	紫 / 紫・青	寸法は最大値(着丈・裾)	20211111	
絵甲斐絹用の型紙	型 - 1		317 × 433	鯉①、摺絵甲斐絹の型				20211111
			328 × 398	鯉②、摺絵甲斐絹の型			ヤブレ	20211111
			336 × 399	鯉③、摺絵甲斐絹の型			ヤブレ	20211111
			320 × 417	鯉④、摺絵甲斐絹の型				20211111
	型 - 2		716 × 360	花と鶏①、摺絵甲斐絹の型				20211111
型 - 3		719 × 356	花と鶏②、摺絵甲斐絹の型				20211111	
ロッカー	ロッカー - 1		107 × 650	男性用羽織、(羽裏) 絵甲斐絹、軍配・力士 / 草・犬 / 風神 / 漁火 / 山と家 / 鶴と布袋、の6種類を縦ぎ合わせる		白	袖口ヤブレ	20211111
	ロッカー - 2		1355 × 615	女性用長着、(裏地) 紺木綿 / 絵甲斐絹(蜘蛛の巣・段) / 格子甲斐絹 / 縞甲斐絹 / 絵甲斐絹 / 絵甲斐絹(植物) / 縞、の5種類を縦ぎ合わせる				20211111
	ロッカー - 3		110 × 50	摺絵甲斐絹用刷毛、※刷毛の径50mm			狸毛	20211111

(2). コレクションに見る甲斐絹の技法と用途

富士技術支援センター所蔵の甲斐絹は、意匠や技法により次の7種に分類がなされている。すなわち、①「絵」、②「縞・格子」、③「無地」、④「緋」、⑤「解」、⑥「高配」、⑦「加工」である。以下、①から順に、各分類の生地について、その特徴等を記す。

①. 絵甲斐絹

絵甲斐絹は、文政12年(1829)に生産が始まったとされる。当初は「絵海気」と呼ばれ、画家が無地甲斐絹に直接絵を描く技法であったというが、その後明治10年(1877)以降には織機の上で経糸に型紙をあて、その上から墨や顔料を刷毛で刷り込む技法(「摺絵甲斐絹」あるいは「押し絵甲斐絹」)に変わった

とされる⁽¹⁾。型紙は伊勢型紙を用い、刷毛には狸毛を用いた（別表 No. ロッカー -3）。明治時代以降、縞・格子、緋などの技法との併用が行われた⁽²⁾。

絵甲斐絹は、明治 15 年（1882）頃に最も盛んになり、縞・格子甲斐絹と並び無地甲斐絹に次ぐ生産量となった。明治 30 年（1897）頃には、広巾に描絵や摺絵を施した「五裏物」も生産された。「五裏物」では、広巾に織ることで背縫いを無くし、羽裏を一幅の絵画のように見せる。当初は描絵もあったが、技術的な問題から後に摺絵（押絵）に変わっていったという。『織物秘伝集』（明治 28 年 /1895）の「押絵甲斐絹」の項には次のように記述があり、「五裏物」と並巾との使い分けがわかる。

押絵甲斐絹は、織工が織りながら絵をタテの織口に押すもので、場所を定めて押すものと、チラシに押すものの二種類がある。場所を定めて押すものは大抵五裏物で、一裏ごとに変わった人物とか花鳥などを押すことを通例とした。五裏物とは一疋六丈を、一丈二尺づつの五ツの羽織裏になるように織ったもので、その絵は何れも背裏に当る所へ二巾跨ぎに出るように押すものである。

絵甲斐絹の用途は、国内では主として羽裏であった。輸出用にも用いられた可能性も考えられるが、輸出用生地用途が洋服地であることを考慮すると広巾であったり、薄地に織ったりしたことが予想できる。しかし、広巾絵甲斐絹や、薄地の絵甲斐絹に関する資料が見られないことから、輸出用があったとしても、和服用に織られた並巾絵甲斐絹の転用によるものであったと推測される。

②. 縞・格子甲斐絹

先染め糸によって、縞状または格子状の模様を織り出した生地で、織り方は基本的に平織りである。明治時代中期以降には、^{かべお}壁織りを取り入れた複合的な技法の生地も生産されている。また、明治時代以降は絵甲斐絹との併用も行われた。国内では主として羽裏に用いられた。明治 15 年から 16 年（1882～83）頃には、絵甲斐絹に並ぶ生産量であったという。輸出用にも用いられていた。『實用 織物の研究 絹物』（1930）には、縞甲斐絹について次のように説明する。

二種以上の色糸を用ひ多く横縞を織るが立縞、格子縞等があつて裏地に用ふ。輸出向きのものは目付十一匁前後である。

現在、着物や羽織の裏地として使用される生地には、通常の仕立であれば 14 匁から 18 匁程度が用いられる。それから考えても、11 匁という重さはかなりの薄地である。輸出用の縞甲斐絹は、国内流通用の転用ではなく別に織られていたと考えることができる。

③. 無地甲斐絹

無地甲斐絹には、色で分類すれば、経糸と緯糸が同色のものと、色を変えた「玉虫甲斐絹」や、経糸に 2 色の糸を合わせて使うなど、経糸・緯糸で合計 3 色以上の色糸を用いた「カメレオン甲斐絹」がある（Ⅱ. 糸から見た甲斐絹にて記述）。甲斐絹のなかでは最も多くの生産量を占めた。また、玉虫やカメレオンは色に特徴を持たせた生地であるのに対し、織り組織自体に特徴を持たせた「平織り」、「綾織り」、壁糸を織り込んだ「壁織り」の三種も生産された。

平織りの無地は、国内では主として羽裏に用いられたが、大正時代以降に洋服が普及するにつれて洋服裏地・袖裏地としても用いられた。輸出用には、明治時代初期にはハンカチーフやパジャマ地としての用

コレクションに見る甲斐絹の技法と用途

途も模索された。その後明治20年代（1887～1896）以降は、多くが洋服地としての需要を得ていた。

綾甲斐絹が登場したのは、大正期と思われる。それ以前の明治時代初期にも洋傘地としての生産はあった⁽³⁾が、「この頃谷村町（都留市）の小山定一氏らが、甲斐絹の綾組織を応用し綾甲斐絹として消費者に多くの好評を得た」⁽⁴⁾とも記されているのを見ると、大正期には洋傘時以外の「綾甲斐絹」の生産が始まったものと考えられる。綾織りの場合、平織りに比べてやや強度が劣るが、より厚地を織ることができるという特徴があることから、和服地ではなく服裏・袖裏地などの洋服地や夜具地としての用途であったものと推測される。壁織りの場合も、生地すべりや表地への影響を考慮すると、和服地以外であったと推測すべきだろう。

『實用 織物の研究 絹物』（1930）では、無地甲斐絹と玉虫甲斐絹、さらに綾甲斐絹、紋甲斐絹を別種として記載する。意匠という視点から一口に無地と言っても、組織や糸の太さ、種類により、多様な展開があったことがわかる。以下に該当箇所を引用して紹介する。

無地甲斐絹

無地に織つて染め、又は経緯共に同じ色に染めて織つたもので、鶉色、納戸、ネベ色、クリーム色、浅黄、藤色、鼠、紺、茶、黒、オリーブ等がある。産性染料を主として用いるが、堅牢を必要とするものはクローム染料等を使ふて染め裏地に用ふ。

玉虫甲斐絹

経と緯とに異色を用ひて異様の光澤を出したものである。例へば経を赤に染め緯を青、萌黄、褐等にするか、経を薄紺色に染め緯を白で織りこむ等が普通で、裏地に用ふ。

綾甲斐絹

組織を四枚綾又は六枚綾に織つたもので、風呂敷、座布団地、ふとん地等に用ひハンカチにされて印度にも輸出される。

紋甲斐絹

模様を織り出したもので薄地はハンカチ又は装身用として多く印度へ輸出される、緯に玉糸を織つたものに玉紋甲斐絹と云ふのがある。

④. 緋甲斐絹

緋は、糸を先染めする際、麻糸などで括って防染し、染め分けることで模様を織り出す技法である。緋甲斐絹は基本的に平織りで、明治時代後期には絵甲斐絹との併用も見られる。国内では主として裏物で、多くは羽裏に用いられたが、大正時代以降に洋服が普及するにつれて洋服裏地・袖裏地としても用いられたと考えられる。また、輸出用にも用いていたと考えられる。コレクション中には、輪繫ぎや亀甲など、伝統的な意匠が多く見られる。

⑤. 解甲斐絹

「解し」とは先染めの技法の一種で、仮織りした経糸を捺染台の上で型染めした後、いったん解いてから機に掛け、平織りで織る技法を指す。織っていく途中に経糸がわずかにずれることで、暈しや滲みのような色表現が可能となる。糸を縛って先染めする括り緋や、溝を掘った板で挟んで糸を染める板締め緋などとは異なり、曲線や複雑な文様の表現を可能にした⁽⁵⁾。また、摺絵甲斐絹でも似たような表現となるが、機に糸を掛けてから型染めするため、小型の型しか用いることができない。これに対し解し捺染では、より大きな型を用いることができるため、柄の繰り返しの間隔は大きくなる。また、糸のずれも摺絵より大

きくなるが、それがデザインの一部として生きる。

解し捺染は、着物の表地においては、銘仙の主流であった「模様銘仙」に顕著な技法として知られている⁽⁶⁾。その手法自体は外国から日本に伝わったとされており、各生産地で導入された。銘仙の産地のひとつである秩父では、横瀬村の坂本宗太郎が、明治41年(1908)に「シゴキ捺染法」で特許を取ったのが始めであるとされる。郡内地域でも明治41年(1908)に山梨県繊維工業試験場で用いられていることから、明治時代後期に銘仙産地などを中心に一気に普及した技法であると考えられる。

解甲斐絹の用途は、生地の特徴からみて、国内では基本的に裏物であったと考えられる。また、当初は羽裏として用いられていたのが、大正時代以降に洋服が普及するにつれて洋服裏地・袖裏地としても用いられたものと推測される。

販売においては、同じ染色技法を用いて織られる銘仙の場合、百貨店などと提携してブランド化戦略が取られたことが知られている⁽⁷⁾。戦略どおり、銘仙は女性の間で大流行となり大きな需要を生み出した。一方、裏地である甲斐絹は、表地のように爆発的に需要が増えることはなかった。その理由として、まず第一に衿の時期である10・11月頃から翌3・4月頃に限られる需要であること、第二にファッションとしてより人目に付く表地が優先されたこと、第三には裏地には繰り返した生地も使用されたことが挙げられる。解甲斐絹に限らず、目新しい技法や染料、流行を取り入れたとしても、甲斐絹が裏地である限り、消費者にとって最優先すべき生地ではなかったのだろう。これは、洋服地に転向した以後でも同じことが言える。

⑥. 高配甲斐絹

高配とは「勾配」のことで、絹糸に間隔をあけて木綿の太糸を縞状または格子状に織り込み、ワッフル地のような凹凸感を出して組織に変化を持たせた生地のことを言う。高配織の技法自体は、幸若舞の那須与一の詞章にも、「梅地の織紅梅、十二ひと重のきぬのつまをたかたかとおとって」とあることから、近世初めまでには存在していたと考えられるが、現時点において、近世の郡内織の記録のなかには高配織を確認することはできず、甲斐絹に応用されたのは明治時代と考えられる。

コレクション中の高配甲斐絹に用いられた木綿糸は、ほとんどが白色であり、染色した木綿糸を用いたものは少ない。また、格子状よりも縞状に織り込まれたものが多い。明るい色合いで薄手に織られた絹布の間に白い木綿糸が畝状に織り込まれることで、見た目にも軽やかさを演出した生地である。高配織の質感は張りやシャリ感があることが特徴であり、現在でも夏用の和服地に用いられる。一方、その特徴により、表地には沿いにくいことから裏地向きではない。コレクション中の高配甲斐絹は広巾に織られており、明治時代以降には輸出用に用いられたことから、主として洋服の表地に用いられたと考えられる。国内において和服地として流通した可能性があるとするれば、盛夏向きの表地ではなかったか。

⑦. 加工甲斐絹

加工甲斐絹登場以前は、無地、絵甲斐絹、縞・格子、緋、解のいずれであっても、先染めによる加飾表現であった。しかし、大正時代以降になると甲斐絹に後染めによる加飾が施されるようになった。白無地甲斐絹に捺染を施したり、絞り染め加工を施したりしたものが大正12年(1923)に工業化された⁽⁸⁾。翌13年には、「ナチュラル甲斐絹」が創案される。「ナチュラル甲斐絹」とは、白生地の上に木の葉や型紙を置き、霧吹きで染料を吹き付けて模様を染めたものである。明治時代後期以降、着物の文様にも取り入れられたアール・ヌーヴォー様式の影響を受け、植物の自然な造形を表現しようとしたものと考えられる。

これらの加工甲斐絹も、いずれも主として羽裏や洋服裏地として使用されたと考えられる。登場時期は、

コレクションに見る甲斐絹の技法と用途

いずれも衣生活の洋装化が進みはじめ、郡内地域においても服裏・袖裏地などの洋服地の生産が行われつつあった時期である。白生地に後染めすることにより、デザインの幅はより大きく広がった。

甲斐絹の製造においては、常に新しい技術や流行を取り入れたり、幅広いデザイン需要に応えたりすることで、付加価値を高め、用途を広げようと模索していた様子がうかがえる。

註

1. 都留市博物館（2013）『甲斐絹展』26頁を参照。
2. 山梨県繊維工業試験場創立60周年記念事業協賛会（1965）『郡内機業の歩み—山梨県繊維工業試験場創立60周年を記念して—』によれば、その時期は明治35年（1902）頃である。
3. 第1章の甲斐絹概観に述べた。
4. 山梨県繊維工業試験場創立60周年記念事業協賛会（1965）『郡内機業の歩み—山梨県繊維工業試験場創立60周年を記念して—』63頁参照。
5. 埼玉県立歴史と民俗の博物館（2021）『銘仙』を参照。
6. 「解し捺染」技法と化学染料の導入は、「模様銘仙」の登場を後押しした。模様銘仙登場までは、太織と呼ばれる平織りの絹織物で縞が中心だった。また、明治初期までは天然染料を使用していたが、明治20年代より化学染料が浸透した。新たな技法と化学染料の導入が、多様な文様表現を可能にした。
7. 埼玉県立歴史と民俗の博物館（2021）『銘仙』を参照。
8. 山梨県繊維工業試験場創立60周年記念事業協賛会（1965）『郡内機業の歩み—山梨県繊維工業試験場創立60周年を記念して—』158頁を参照。

(3). コレクションに見る甲斐絹の意匠

コレクション中、最も点数が多いのは絵甲斐絹である。先に述べたように、絵甲斐絹は江戸時代には「描絵」であったが、明治時代になって型紙を使用した「摺絵」の技法が用いられるようになった。型紙を何枚かを組み合わせ使用したり、同じ型で色を変えたり、また先染めの格子・縞や緋と組み合わせること多彩なバリエーションを生み出すことができた。海気を始祖とすれば、本来の甲斐絹は無地や玉虫であろうが、明治時代以降の甲斐絹を特徴づけるのは絵甲斐絹であると言っても過言ではないだろう。

絵甲斐絹で表現される文様は多様であるが、主として次のような意匠をあげることができる。

- ・物語文様…物語や和歌などから題材を得て、その一場面を描くなどしたもの
- ・吉祥文様…縁起が良いとされる動植物や物品をモチーフとしたもの
- ・植物・動物文様…植物や動物を描いたり、デザイン化したもの
- ・自然・風景文様…四季の風物や風景を描いたり、デザイン化したもの
- ・器物文様…器や道具類など物品を描いたり、デザイン化したもの
- ・幾何学文様…図形や直線などを配列して模様としたもの

いずれも、一般的に和服に見られる文様ではあるが、同じく文様として一般的な有職文様や正倉院文様、名物裂文様などの格高かつ王朝風の文様は、甲斐絹にはほぼ見られない。裏地は表地に合わせて選ばれたものと思われるが、男性の羽織着用の衣生活規範自体が武家式であること、女性の正礼装には羽織が用いられないことから、上記の文様は裏地として高需要ではなかったものと推測される。

物語文様に見られる題材は、例えば「曾我物語」の意匠である。千鳥、蝶、庵木瓜を組み合わせた意匠（別表・画像 No.1-34、明治43年/1910）や、「千鳥と蝶」（別表・画像 No.1-113、大正2年/1913）、「蝶と三柙」（別表・画像 No. 1-57、明治43年/1910）などがある。「曾我物語」では、兄の十郎を千鳥、弟の五郎を蝶、庵木瓜は工藤祐経を表す。「蝶と三柙」の場合は、同じく蝶が曾我五郎を表し、三柙は歌舞伎における演者である成田屋（市川團十郎家）を指したもののだろう。同じ題材で表現が違うものに、富士山と狩の様子

を組み合わせた「富士の巻狩」（別表・画像 No.1-157、明治 43 年 /1910）がある。

江戸時代の風流踊りとして発生し、歌舞伎にも取り入れられた「雀踊り」の意匠も見られる。雀の頭部を持った人が踊る絵をチラシに配置したもの（別表・画像 No.1-32、大正 2 年 /1913）や、意匠化された雀紋が大きく配されたもの（別表・画像 No.1-71、明治 43 年 /1910）である。このほか、芝居番付と大入袋の意匠が見られる（別表・画像 No.1-158、製作年不詳、志村作太郎作）。番付には「菅原傳授手習鑑」「連獅子」「鎗権三重帷子」といった外題が並んでいる。文字を裏にして摺っている理由は不明である。

このような歌舞伎や物語に因む意匠は、主に男性物の羽裏の文様として好まれるものである。また、先に述べたように王朝風の文様が見られない一方で、町人文化的意匠が好まれる傾向にあったことは興味深い。意匠の傾向は、おそらく甲斐絹の購買層によるものだろう。

吉祥文様もよく見られる。縁起物や、「波に千鳥」のように取り合わせの良い意匠同士を組み合わせ、幸運や長寿、勇猛などを願う文様である。縁起物としては「一富士二鷹三茄子」（別表・画像 No.1-39、大正 2 年 /1913）や「布袋」（別表・画像 No.1-105、明治 43 年 /1910）などがある。「一富士…」の意匠では、富士と茄子は絵で、鷹は文字で「二多嘉」と表す。文字も型を用いた摺絵である。また、布袋が持つ袋は宝珠に似せている。取り合わせの良い意匠としては「竹に雀」（別表・画像 No.1-16、大正 3 年 /1914）（別表・画像 No.1-55、大正 3 年 /1914、小宮芳蔵作）、「竹に虎」（別表・画像 No. 1-131、大正 2 年 /1913）、「虎と籠」（別表・画像 No.1-43、明治 43 年 /1910）、などがある。

自然・風景文様も比較的多く見られるデザインで、かつ絵画的な表現だけに留まらない多様な意匠の展開を見ることができる。絵画的な表現では、「五裏物」の広幅生地を用い、背に一幅の絵画のように風景を描いたもの（別表・画像 No. 木箱 1-37、年代不詳）が代表的である。また、同じ絵画的表現でも、縞甲斐絹の横段を掛軸の一文字のように見立て、横段の間の白場に摺絵を施したものもある。縞甲斐絹との組み合わせでは、横段を利用し、間の白場の下から流水、木目、提灯と柱、御簾、などを摺絵で表して屋形船風の意匠に見立てたもの（別表・画像 No.1-35、大正 3 年 /1914、志村作太郎作）、竹林と筍を摺絵で、筍の皮のような文様を緋で表したもの（別表・画像 No.1-70、明治 41 年 /1908）など、緋や縞、格子を絵画の一部として使った意匠が特徴的である。

また、自然・風景文様においては、例えば、楓、桜、柿、蜜柑など、秋から初夏にかけての意匠を多く見ることができる一方で、盛夏を思わせる意匠は少ない。これは、甲斐絹の多くが羽裏として用いられたことから、需要は袷羽織を用いる 10・11 月頃から翌 3・4 月頃に限られ、その時期に適した意匠が好まれたとみることができるだろう。

西洋風の文様表現やアール・ヌーヴォーやアール・デコの影響も顕著に見られる。例えば、格子の組み合わせの絵甲斐絹では、摺絵により格子柄の蝶と蕨をあしらった意匠（別表・画像 No. 1-96、大正 5 年 /1916）、花鳥文様と幾何学文様を組み合わせた意匠（別表・画像 No.1-107、製作年不明、志村作太郎作）や、唐草風の摺絵と、曲線や斜線の緋を組み合わせた意匠（別表・画像 No.1-28、大正 2 年 /1913）などである。

器物文様においては、古典的な表現の意匠の場合、古銭（別表・画像 No.1-1、明治 43 年 /1910）や、古鏡と勾玉（別表・画像 No.1-60、大正 2 年 /1913）、家並（別表・画像 No.1-62、大正 2 年 /1913）、兜（別表・画像 No.1-65、大正 2 年 /1913）といったように、白地や格子・縞甲斐絹に摺絵をあしらった意匠がある。これらは、どちらかといえば器物を絵画として見せる意匠で、格子や縞の扱いはあくまでも背景的である。これに対し、新しい意匠では横段の縞甲斐絹に唐草風の丸紋と植物や器物を摺絵であしらったものや（別表・画像 No.1-115、大正 3 年 /1914、小宮芳蔵作）、縞甲斐絹に鳳凰と雲紋を三角形に切り取った摺絵を施したもの（別表・画像 No.1-127、大正 2 年 /1913）など、縞や格子もデザインの一部として構成される。曲線を摺りで、段を緯糸で表現した意匠（別表・画像 No.1-31、大正 5 年 /1916）（別表 No.1-40、大正 2 年

コレクションに見る甲斐絹の意匠

/1913)には、アール・デコ様式の影響が見られる。

また、格子の間や横段の間の白場に○や△などの図形や、デザイン化した花などをあしらった意匠(別表・画像 No.1-122、大正5年/1916)、(別表・画像 No.1-19、製作年代不明)、(別表・画像 No.1-25、明治40年/1907)、(別表・画像 No.1-45、明治40年/1907)では、反物幅に合わせた小型の型を複数組み合わせ、同じ型でも色を変えることでアレンジを加えたパターンが見受けられる。甲斐絹は副業的な小ロット生産であったとされる。そのため、織り手によってデザインを細かく変化させることが可能であったと思われる。



写真⑦
「絵甲斐絹柄見本」

おそらく、このような細かな意匠のアレンジには、甲斐絹をはじめとした羽裏地の販売方法も関わっている。甲斐絹の販売形態の詳細は今後の調査となるが、甲斐絹問屋にまつわる資料として前章の表3に記載した「絵甲斐絹柄見本」がある(写真⑦)⁽¹⁾、布の地色や絵柄を印刷した紙を台紙に貼って冊子状にしておき、問屋はこれを見せて受注し、場合によっては細かな色の変更指定も受けていたのではあるまいか。また、コレクション中には、「一尺14銭」といった記載がある台紙が複数あり、羽裏地は必要尺に応じて切り売りされていたとみられる。そのような小売り方法を前提に、末端消費者(着用者)を想定して、一回に織る布のなかにも様々な色・デザインを盛り込むなどして、小ロット生産であることを活かした生産方法をとっていたのではないかと推察される。

このほか、コレクション中には、近代以降の絵甲斐絹のなかでは珍しく、直接筆で描いたとみられる描絵甲斐絹も見ることができる。多くは摺絵と文字とを組み合わせたもので、絵には型紙を用い、文字部分のみを筆で記したとみられる(別表・画像 No.1-52、明治43年/1910)。摺絵の場合、技法上の特性から、文字であっても彩色の際の部分や、最初に刷毛を付けた部分が濃くなるか、逆に全体が均一な色付きとなる。一方、文字を筆で書き記した場合は、当然のことながら筆跡によって墨の濃淡が生じるため、筆運びが重なったところや、最初の一画目が濃くなる。この特性により、No.1-52の甲斐絹は、後者の可能性が考えられるのである。描絵では糸の下に板を当てて安定させて筆を走らせるのだが、筆が糸に筆が引っかかるため、よほど筆に慣れた人でないと難しいという⁽²⁾。そのため、文字であっても型を用い摺絵で表現されたものが多くなる。近代以降、絵甲斐絹に用いられる技法は摺絵が多くなったとはいえ、文字などの一部の意匠においては描絵の技法が続けられていたことがわかる。

以上、富士技術支援センターの甲斐絹コレクションには、明治時代以降に発達した様々な技法と意匠が見られる。端切れの収集年代は明治時代末期から昭和時代初期にかけてであり、おそらく、技法、染料ともに甲斐絹が最も多様化した時期の資料群である。江戸時代に比べて甲斐絹の意匠が多様化したこと背景には、新技法だけでなく合成染料の導入や、アール・ヌーヴォーやアール・デコに代表されるような西洋文化の流入もあるが、甲斐絹の主な用途であった羽裏の需要の変化もあるだろう。

江戸時代、羽織自体は主として男性の、それも武家の衣服であった。武家の羽織は、正装である袴に次ぐものとされ、町人や、庄屋・名主に限り農民の着用も許されていた。女性は基本的に羽織を着用しなかったが、一説には、宝暦年間(1751～1764)頃に深川の辰巳芸者が男羽織を着用したのを契機に、幕末には女性にも浸透していったと語られる。また、羽裏には木綿製もあり、絹製の甲斐絹はすべての人が着用できるものではなかっただろう。明治時代に武士の袴が廃止されると、羽織袴は男性の正装となり、あわ

せて女性の羽織も日常着として普及した。明治維新以後は、男性の洋装化は女性に先立って進んだのに対し、女性の洋装化は女子学生、職業婦人などの公的領域（さらに子ども）から始まり、家庭を中心として生活する既婚女性の和装は昭和時代まで続き、第二次世界大戦を経てようやく家庭内にまで浸透した⁽³⁾。明治時代以降、日常における和装の担い手は女性に集約されていったのである。和服地の主たる消費者が女性に移りゆくことで、絵甲斐絹の絵画的表現や古典的な意匠、歌舞伎の題材の判じ絵のような男性的な意匠よりも、流行のデザインや、表地との意匠的バランスがとりやすい縞・格子絵甲斐絹が好まれた可能性は考えられないだろうか。羽裏の需要が男性だけでなく女性にも広がった衣生活の変化と、女性の和服の需要がより長く続いたことが、甲斐絹のデザインの多様化や鮮やかで流行を取り入れた意匠の展開に影響し、コレクションの多様なデザインにも反映されているというのが筆者の考えである。

甲斐絹のデザインの多様化や衰退は、和服から洋服への変化と共に説明されることが多く、それに異論はない。ただし、衣生活の変遷の男女差や、主たる消費者の変化という視点も加えるべきと考える。特に、甲斐絹の衰退期は、第二次世界大戦後に女性の衣生活に洋装が浸透した時期と重なる。女性の洋装化とともに甲斐絹の生産も終焉に向かい、服裏地・袖裏地の生産に集中し始めたのではなかったか。明治時代から大正時代にかけての甲斐絹は、絵甲斐絹から縞・格子甲斐絹に需要が変化したとされるが、その背景にも羽織着用層の広がり（絵甲斐絹の多様化）と洋装文化への移行（縞・格子甲斐絹の需要）という、二つの背景を指摘することができるだろう。

註

1. 写真⑦の右頁の意匠は、一覧表および資料画像 No.1-57 の絵甲斐絹と同一である。
2. 2021年富士技術支援センターにおける聞き書き。
3. 広井多鶴子（2020）「和服と洋服 女性の服装の変化が意味するもの」『実践英文学』72-3 実践女子大学を参照

4. まとめと今後の課題

江戸時代、外国産の織物を真似て織られた「海気」は、郡内地域で産出される複数の織物の一種であった。それが明治時代以降、「甲斐絹」と名を変え、洋傘地やハンカチーフなどの和服地以外の製品や海外輸出、女性の羽織着用により需要を伸ばした。また、その過程では、国際博覧会や内国勲業博覧会等への出品を通じた知名度の向上もプラスに働き、新しい技術とデザインへの探究心も遺憾なく発揮された。こと絵甲斐絹においては、その技法から生産のロットは小さく、問屋や製作者、発注者の創意工夫により、同一の型からも多彩なバリエーションを生み出すことが可能であった。「小回りが利く生産」だからこそ、流行に対する素早い反応を可能とし、軽微な変更による「オリジナル性」の演出にも対応できたとすれば、その柔軟性こそが甲斐絹の持ち味であり、消費者の心を掴んだのではなかったか。

また、甲斐絹は山梨県の郡内地域独自の織物であると捉えがちであるが、当時の消費者の視点では、薄手の平織り生地の種類を指す呼称としても用いられていたと考えられ、産地を限定するものではなかった。ただし、その名称から山梨県が産地の中心的な存在であるとの意識はあったようである。本研究においては、生産地が広域にわたっていたことと、出稼ぎ的な織工の存在が確認できた。今後は、職工の移動の調査の継続により、周辺地域との技術共有の可能性を探ることも必要である。あわせて、県外産の甲斐絹の実物資料や生産に関わる資料の収集と調査にも目を配りたい。

ただし、実物資料収集において課題となるのが、甲斐絹の特定である。甲斐絹は、絵甲斐絹であれば技法の特徴から特定が可能であるが、その定義が曖昧であるが故に、無地・縞・緋・解・加工の各甲斐絹は、その他の薄地の絹布との区別が極めて困難である。現状では、絵甲斐絹以外は検印や商品に付けられた札、聞き書きなどに頼り判別するほかない。

まとめと今後の課題

さて、今回の研究期間においては、感染症拡大防止を考慮し、他館所蔵の実物資料の調査の多くを見送らざるを得なかった。苦肉の策として、明治時代から昭和時代初期にかけての衣生活資料に関する展覧会図録から甲斐絹を探す作業を行ったが、それらの多くは表地のみの画像を掲載したものであった。裏地の画像が掲載されているか、裏地についての言及がある例は稀であった。自戒を込めて言えば、博物館資料においても、表地に比べて裏地は注目されづらく、その積極的な研究や資料的価値の発信を行ってこなかったのである。また、このこと自体が、歴史・民俗・服飾史等の関連分野における裏物への関心を物語っているのだろう。確かに、表地に比べて、裏地からは生地製の製作年代や使用者の年齢を推し量ることは難しい。しかし、ことに和服の裏地からは、着用によって起こるスレや、着用時の暖かさ、見映えなどを考慮して布を配置し、縫いあげていったことがうかがえる。その意味では、裏地は製作者の工夫や息遣い、あるいは家族構成や布に対する思いが感じられ、衣生活資料としての情報量は多い。いわば「縁の下の力持ち」的な存在として、実用性をもって衣生活を支えてきたのが裏地であった。甲斐絹のように意匠に凝り、流行と実用性を備えた生地も生産されてきた。衣生活資料における裏地研究の一端を担うことができるよう、甲斐絹の調査研究と資料収集を継続せねばならない。

参考文献

- 芥川龍之介『お富の貞操 戯作三昧：他十一篇』角川書店 1958
井原西鶴『好色一代男』雄山閣 1937
井原西鶴『日本永代蔵』富山房 1903
井原西鶴『椀久一世の物語』上巻 珍書会 1915
江島其磧『野白内証鑑』『新編 日本古典文学全集 65・浮世草紙集』小学館 2000
外務省通商局編纂『通商彙纂 復刻版』第20巻 不二出版 1989
外務省通商局編纂『通商彙纂 復刻版』第23巻 不二出版 1989
金子みすゞ『二つの小箱』『金子みすゞ童謡全集 空のかあさま<上>』JULA 出版局 2004
桐生市立図書館『PDF 版桐生市歴史年表』2019
京都町触研究会 編『京都町触集成』第1巻 岩波書店 1994
楠元町子「1884年ニューオーリンズ万国博覧会と日本の展示」『愛知淑徳大学論集—文学部篇— 第44号』2019
久米邦武編 田中彰校注『特命全権大使 米欧回覧記』岩波書店 2003
小泉八雲「知られぬ日本の面影」『小泉八雲全集』第3巻 第一書房 1930
小泉八雲記念館『小泉八雲、開かれた精神の航跡。』2018
埼玉県立歴史と民俗の博物館『銘仙』2021
実業之日本社『婦人世界』第五号 第十一號 1910
東京織物研究会『實用 織物の研究 絹物』1930
中村星湖『少年行』山梨県立文学館 1994
夏目伸六『猫の墓—父・漱石の思い出』河出書房新社 1984
夏目漱石『虞美人草』岩波書店 1990
西原勝三郎『織物秘伝集』東洋織物講習會 1895
西村益者『實用 織物の研究 絹物』東京織物研究会 1931
はたや記念館ゆめおーれ勝山(勝山商工振興課)『海を渡った福井の羽二重—ヨーロッパ・アメリカの新しいファッションへ—』2019
八王子市教育委員会『織物の八王子—戦後から現代までをたどる—』2020
樋口一葉『樋口一葉日記』上・下 岩波書店 2002
平出鏗二郎『東京風俗志』上 富山房 1899
平出鏗二郎『東京風俗志』下 富山房 1901
広井多鶴子「和服と洋服 女性の服装の変化が意味するもの」『実践英文学 72-3』実践女子大学 2020
広岩邦彦『近世のシマ格子 着るものと社会』紫紅社 2014

- 古川咲「共立女子大学博物館所蔵：資料名「各種 名物裂」に関する研究：作品概要」『共立女子大学博物館 年報／紀要』35-50 2018
- ミュージアム都留 『甲斐絹展—甲斐絹と歩んだ都留の歴史と文化—』 2013
- 山梨県教育委員会編『山梨県の民謡 緊急調査報告書』 1983
- 山梨県繊維工業試験場創立 60 周年記念事業協賛会『郡内機業の歩み—山梨県繊維工業試験場創立 60 周年を記念して—』1965
- 山梨県立博物館 『おふどうと名乗った家—豪商 大木家の 350 年—』 2012
- ラフカディオ・ハーン「ニューオーリンズ博覧会—日本の展示物」『ラフカディオ・ハーン著作集』第 4 巻 恒文社 1987
- 『都留市史』通史編 1996
- 『都留市史』資料編 近世 1994
- 『富士吉田市史』行政編・上巻 1979
- 『富士吉田市史』通史編 第二巻 近世 2001
- 『富士吉田市史』通史編 第三巻 近・現代 1999
- 『山梨県史』資料編 16 近現代 3 経済社会 I 1998
- 「依田長安一代記」『史料館叢書 7』東京大学出版会 1985
- Lafcadio Hearn, Glimpses of Unfamiliar Japan (BiblioBazaar, 2006)

II. 糸から見た甲斐絹

1. 目的

富士技術支援センターには、明治の終わりから昭和初期に収集された甲斐絹の端切れが収集されている。427点の台紙に端切れが1枚もしくは2、3枚ずつ台紙に貼られており、すべてではないが多くのものに収集年と、収集地域または製作者の名前が記録されている。おおまかに絵甲斐絹、緋、縞、格子、解、無地、高配と分類されている⁽¹⁾。デジタル顕微鏡を用いて、この甲斐絹コレクションの糸の観察を行い、甲斐絹の特徴や技法を探ってみたい。

2. 糸の観察方法

デジタル顕微鏡（Anmo社製 Dino-Lite DINOAM7915MZT）を用いて糸の観察を行った。顕微鏡をスタンドに固定し、資料との距離を調節することで、ピントを合わせ観察した。倍率は、約50倍、約100倍、約200倍と、観察目的によって適宜適切な倍率で観察を行った。観察した画像の一部を、資料編2にまとめている。画像名の資料番号の後ろの、50、100、200の数字は、観察した倍率を示す。

3. 糸から見た甲斐絹の特徴

3-1 甲斐絹の特徴

観察された顕微鏡画像の糸の組織を見ると、多くの資料で以下の特徴が見られた。平織りで、無撚りの糸またはゆるい撚りの糸が使用されており、糸の形状は平たく、撚りがかけられた糸の特徴の丸みは見られない。経糸、緯糸が隙間なくきっちりと合わさり、異状繊維などは見られず、単繊維の乱れもあまり見られない。経糸、緯糸が高密度で織られており、画像から確認できる糸の幅を見てみると、多くは経糸が約0.15 mm前後で、緯糸は約0.2 mm前後と細い。経糸よりも緯糸のほうが、若干幅が太いものが多かったが、同じ幅のものも見られた。また、先染めされた糸を用いて、縞や格子、文様、絵が表現されている。一部、平織りではないものや、強く撚りがかかった糸が使われているもの、糸が太いもの、低密度のものも見られたが、多くは、平織り、無撚り、先染め、細い糸、高密度であった。

3-2 絵甲斐絹

絵甲斐絹は、手織機の上で経糸に型を用いて刷毛で絵や模様を染色したり、直接絵を描く技法が用いられている。コレクションの絵甲斐絹では、型染めで染色されている色は黒、赤、青が多く、その他、茶、濃い緑、薄い緑、少ないが黄色も見られた（資料編2-②）。縞などに用いられる先染めされた糸の色のバリエーションに対し、絵甲斐絹の型染めの色の数は少ない。色数は少ないが、同じ色であっても濃淡をつけていたり（資料編2-③ 1-042）、赤や青、緑、茶の上に黒を重ねて暗色が表現されている（資料編2-② 1-009, 1-027, 1-118）。一度染めてから、同じ色または別の色で染めて濃淡をつけているものもあれば、一つの型で染める際にグラデーションをつけているものもある（資料編2-③ 1-040, ④）。薄い色から先に染め、濃い色が重ねられていた（資料編③ 1-009）。糸の色の染まり方を見てみると、黒、赤、青、濃い緑では不均一である様子が見られる（資料編2-②）。後述の縞や格子などに用いられる先染めされた糸は全体が均一の色と濃さに染まっているのに対し、絵甲斐絹の型染めされた糸は均一に染まっておらず、染まっている繊維と染まっていない繊維が混ざっており、一部、色材が塊になっている様子も見られる（資料編2-②）。型を使うという点では一緒である、解甲斐絹の染まり方とも異なる。経糸を織機に張った状態で、刷毛で染めているため、このように不均一の染色になり、この不均一な染まり方が、絵甲斐絹の絵や文様のやわらかい風合いを生み出しているのではないかと考えられる。色材の塊が見られることから、顔料が用いられていると推測されるが、顔料使用の影響か、滲みが生じているものもある（資料編2-⑤）。薄い

緑と、黄色は、他の色と比べて染まりがよい。ほとんどのものは先染めであったが、資料1-156では、後染めを行っている様子が見られた（資料編2-③ 1-156）。

3-3 縞甲斐絹・格子甲斐絹

縞甲斐絹・格子甲斐絹は、単色で先染めした糸を用いて、経縞、緯縞、格子が織り出されている。糸は様々な色が見られ、全体が均一の色と濃さで染められている（資料編2-①, ⑥）。基本は、色の違う糸を用いることで、縞や格子が表現されているが、太さの違う糸を用いているものや（資料編2-⑥ 3-076, 4-014）、縞に緋糸を用いているもの（資料編2-⑥ 3-007）、経糸に綾織の縞を入れ、立体的な縞が表現されているものも見られた（資料編2-⑥ 3-089, 3-090）。生地全体が綾織のものもある（資料編2-⑥ 3-059）。

3-4 緋甲斐絹

緋は、斑に染めた糸を、経糸や緯糸に用いて、文様や絵を織り出す技法である。絵甲斐絹や、解甲斐絹も緋の技法が用いられているが、緋甲斐絹は、型を用いずに斑に先染めした糸を経糸や緯糸に用いている。コレクションには113枚の台紙に、経緋が32点、緯緋が86点、経緯緋が17点見られた。縞や格子、型染めと併用されているものも多く、緋糸を縞や格子に用いているものも見られる。緋の表現は、色の違いで文様を織り出しているものや、色の変わり目をずらして織り込むことで、色の移り変わりをかすれたように表現しているもの、1本の糸を定期的な幅で2色または複数の色で染め、細かい線の模様を表現しているものの3種類が見られた（資料編2-⑦）。色の変わり目をずらして織ることで、模様や色の変わり目のかすれた輪郭線が表現されるが、ずらし具合を変えることで、様々なかすれが表現されている。

糸は様々な色で糸全体がしっかり染められている。多くは2色または3色に染め分けた糸を用いている。4、5、6色に染め分けているものも見られ、一番多いものは資料1-147で7色に染め分けた糸を用いていた。緋糸の色と色の変わり目に注目してみると、すぐに色が変わっているもの、グラデーションが見られるもの、間に少し白色が見られるもの（資料編2-⑦ 1-147）、色の変わり目に別の色を少し入れているもの（資料編2-⑦ 2-016, 1-143）があった。グラデーションは様々な幅のものが見られた。糸の染め方を変えることで緋の表現にバリエーションを持たせていることがわかる。

3-5 解甲斐絹

「解し」は、仮織りした経糸を、捺染台に延ばして置き、型紙を用いて染色し、いったん経糸の仮織を解き、織機にかけ、緯糸を織り込む技法である。絵甲斐絹と同様に、型を用いて経糸が染色されているが、解しは経糸を一度解いているため、織りあがったものは、縦方向に自然な糸のずれが見られる。

コレクションの解甲斐絹の糸の色に注目すると、型染めされた経糸の色は絵甲斐絹の型染めされたものとは違い、色のバリエーションが様々で、全体が均一にしっかり染色されている（資料編2-①、⑧）。捺染台で糸がしっかりと染められている様子が伺える。また、絵甲斐絹で見られた色材の塊なども見られない。同じ色や違う色を重ねることで、色の濃淡の表現は見られるが、絵甲斐絹で見られた、同じ色で濃淡のグラデーションをつける表現は見られなかった。

3-6 玉虫甲斐絹

玉虫生地は、経糸と緯糸に、それぞれ異なる色の糸を用いて平織りにしたものである。玉虫の羽のように、見る角度によって色が変わって見えることから玉虫と呼ばれており、色相の差が大きいほど、見る角度による印象が大きく変化する。

糸から見た甲斐絹

コレクションには、「玉虫甲斐絹」と記された無地の資料が13点確認でき、12点が平織りで、1点が綾織りであった（資料編2-⑨）。糸の配色の仕方が以下3パターン確認された。経糸1色、緯糸1色のものが4点（資料5-26, 31, 34, 39）、経糸が2色交互に配置され、緯糸1色のものが8点（資料5-12, 13, 17, 21, 22, 24, 28, 32、そのうち5-22は経糸のうち1本が緯糸と同系色）、経糸が2色交互に配置、緯糸が経糸の1色と同じ色のものが1点（資料5-23）であった。2種の色合いが用いられるものと、3種の色合いが用いられているものがある。生地を見てみると、資料5-22, 5-26, 5-34が特に見る角度による印象の違いがはっきり感じられた。実際に、顕微鏡の観察画像を見ると、その3点では経糸、緯糸の色の違いがはっきりしている。色にもよるが、3種の色合いのものより、2種の色合いのものの方が見る角度による印象の違いは感じやすい。また、資料5-17や5-23など淡い色合いのものは、印象の違いが感じにくかった。同じ色合いの糸を用いて、いるが5-22と5-34では、織りあがった生地の色合いに違いが見られた。糸の配色の仕方によって、生地の色合いのバリエーションを増やしていたのではないかと考えられる。

3-7 カメレオン甲斐絹

資料3-79（1917年）、3-84（1920年）、5-29（1917年）に「カメレオン甲斐絹」と記されている。これらの糸を観察すると、1本の経糸が2色で構成されていることがわかる（資料編2-⑨）。他の資料では、同様の経糸が見られないことから、1本の経糸に2色用いられたものを「カメレオン甲斐絹」と呼んでいたのではないかと考えられる。3-79は、2色で構成される経糸に淡いピンクと水色、3-84は濃い赤と緑、5-29は紫と水色といずれも色相の異なる色が組み合わせられている。

3-8 無地甲斐絹

経糸、緯糸ともに同色の無地が26点あり、そのうち、23点が平織りで、3点が綾織りであった（資料編2-⑩）。資料5-11（1926年）、5-25（1913年）、5-27（1916年）、5-30（1916年）は他の甲斐絹に比べて糸が太い。5-25には「ルイジン」と、5-27, 30には「輸出綾甲斐絹」と書かれている。資料5-20（1918年）、5-33（1917年）は、緯糸に撚りが強くかけられた絡み糸が用いられており、生地は独特のシャリ感があった。5-20は「壁」、5-33には「輸出壁甲斐絹」、と記されており、緯糸に撚りが強くかけられた絡み糸が用いられている。一般的な甲斐絹の特徴を持つ生地だけを生産していたわけではなく、需要や目的によって、糸の太さや、撚り、織り方を変えていることがわかる。

3-9 高配甲斐絹

高配甲斐絹は、絹糸の合間に綿などの太い糸を縞状、もしくは格子状に織りこみ、凸凹を表現した甲斐絹である。コレクションには、21枚の台紙に、縞が28点、格子が4点確認された。縞は、太い綿糸が経糸に用いられ、すべて経縞であった。綿を織り込んで縞状または格子状の畝が作られているが、1本から複数本の撚りの強い綿の糸を織り込み、様々な太さの畝が作られている（資料編2-⑪）。綿の糸は、白色が多いが、黒、灰、薄茶、茶、薄紫、モスグリーン、深緑、水色、青、桃、赤と様々な色が見られる（資料編2-⑪）。絹地の部分に注目すると、糸の色は、すべて緯糸が白色で全体的に淡い色調となっている。使われている糸も淡い色合いが多い。他の甲斐絹の絹地と比べ、経糸、緯糸の密度が低く、糸と糸との間に隙間が確認できる（資料編2-⑪ 6-001）。密度が低いいためか、生地が薄く透けているものもあった。同じ甲斐絹でも、色合い、織り方を変えて、目的や需要に応じた生地が作られていたことがわかる。

3-10 金糸銀糸

資料 1-122 (1916 年)、1-137 (1909 年) で金糸が、1-97 (1916 年)、4-11 (1907 年) で銀糸が横方向に織り込まれていた (資料編 2-⑫)。1-137 は形状が平たく四角であり、1-122 や 1-97、4-11 は形状が丸みを帯びふくらみがある。1-137 は金色箔を和紙に貼り、縦に細長く切った平金糸で、1-122 や 1-97、4-11 は、平金糸または平銀糸を芯糸に巻きつけた撚り金糸、撚り銀糸であると考えられる。金糸・銀糸には、金箔、銀箔以外にも錫箔や真鍮箔など、金銀以外の金属箔が使われることも知られているが、今回の調査では、金属種までは判定はできなかった。1-97 および 4-11 は 1 本の緯糸として織り込まれていた。1-122 の長さ約 8.9 cm と 11.7 cm の 2 種類の長さの金糸がで、1-137 は約 4.0 cm と 4.5 cm で、金糸 1 本につき 3 ヶ所ずつ黒く塗られていた。糸の幅は、1-122 が約 0.2 mm、1-137 が約 0.3 mm、1-97 が約 0.2 mm、4-11 が約 0.15 mm であった。それぞれの劣化の具合を見てみると、1-122、1-137 の金糸は非常に金色の残りがよく黒変や錆び等は見られなかった。見る角度によって、光が反射し、綺麗に光る様子が見られた。1-97 や 4-11 は銀色の部位は残ってはいるが、箔が剥がれたのか茶色に変色しており、顕微鏡で観察することで銀が確認できる状態であった。

3-11 グラデーション

資料 1-26 (1909 年)、1-137 (1909 年)、3-11 (1908 年)、3-26 (1909 年)、4-9 (1908 年)、4-21 (1906 年) の 6 点で、横方向に色が変わる淡いグラデーションが見られる。1-137、3-26 は左右両端から中央に向かって変色するグラデーションで、その他は、横方向にグラデーションがついた変色が何回か繰り返され、経縞のように表現されている。経糸に決まった色、本数の繰り返しが見られ、経糸にわずかな色の差の糸を順番に用いることで、グラデーションを作っていることがわかる (資料編 2-⑬)。

3-12 その他

資料 3-83 (1906 年) は「星入甲斐絹」と記されており、縦方向に約 1.5 mm の白い糸が並縫いされていた (資料編 2-⑭ 6-5)。また、資料 3-67 (1930 年)、3-69 (1930 年)、3-87 (1930 年)、3-88 (1926 年)、3-93 (1926 年) は、「人絹甲斐絹」と記されており、糸の太さが他の甲斐絹に比べて太く、経糸と緯糸の密度が低い様子が見られた (資料編 2-⑭ 3-67、3-69、3-93)。資料 3-70 (1926 年) は、「アードラ・シルク」と書されており、他の甲斐絹では見られない、独特の光沢が見られる (資料編 2-⑭ 3-70)。

4. まとめと今後の課題

約 470 枚の甲斐絹の糸の観察から、甲斐絹の特徴、およびそれぞれの技法ごとにある程度決まった糸の組織の様子や色の染め方が観察された。また、糸の太さ、撚り、密度、色合いが異なる生地も確認され、需要や使用目的によって生地を作り分けている様子が伺えた。今回、甲斐絹の時代や地域による違いの有無の検証も試みたが、各年に様々な製作者の端切れが収集されたというよりは、少数の製作者の端切れが収集されている様子が見られたため、時代や地域による違いではなく、製作者の違いによるものである可能性が高く、検証にはいたらなかった。今後、このコレクション以外の甲斐絹の調査も進め、今回確認された糸の組織や染め方が、製作者による特徴なのか、甲斐絹全般に見られるものなのかの検証を進めていきたい。また、今回は、観察の結果を紹介するのみにとどまったが、得られた甲斐絹の特徴と、同年代他地域の絹織物や当時の織物技術との比較、考察も進めていきたい。

糸から見た甲斐絹

註

- (1) 絵甲斐絹、緋、縞、格子、解、無地、高配と分類されているが、縞や格子、緋と絵甲斐絹、解などが併用されているものも多く見られた。また、ごく一部であるが、分類されている種類のものではないものも混ざっている様子も見られた。コレクションには、台紙に貼られていない資料もあるが、本報告では、台紙に貼られた資料を対象とした。

参考文献

- 佐藤昌憲『絹文化財の世界：伝統文化・技術と保存科学』2005
京都造形芸術大学『染織演習 織』1999
ミュージアム都留『甲斐絹展 一甲斐絹と歩んだ都留の歴史と文化一』2013

資料編 富士技術支援センター所蔵甲斐絹コレクションおよび関連資料画像

1. 資料画像



1-001



1-002



1-003



1-004



1-005



1-006



1-007



1-008



1-009



1-010



1-011



1-012



1-013



1-014



1-015



1-016



1-017



1-018



1-019



1-020



1-021



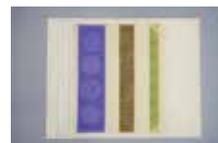
1-022



1-023



1-024



1-025



1-026



1-027



1-028



1-029



1-030



1-031



1-032



1-033



1-034



1-035

資料編



1-036



1-037



1-038



1-039



1-040



1-041



1-042



1-043



1-044



1-045



1-046



1-047



1-048



1-049



1-050



1-051



1-052



1-053



1-054



1-055



1-056



1-057



1-058



1-059



1-060



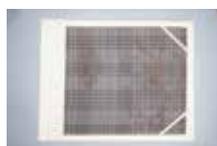
1-061



1-062



1-063



1-064



1-065



1-066



1-067



1-068



1-069



1-070



1-071



1-072



1-073



1-074



1-075



1-076



1-077



1-078



1-079



1-080



1-081



1-082



1-083



1-084



1-085



1-086



1-087



1-088



1-089



1-090



1-091



1-092



1-093



1-094



1-095



1-096



1-097



1-098



1-099



1-100



1-101



1-102



1-103



1-104



1-105

資料編



1-106



1-107



1-108



1-109



1-110



1-111



1-112



1-113



1-114



1-115



1-116



1-117



1-118



1-119



1-120



1-121



1-122



1-123



1-124



1-125



1-126



1-127



1-128



1-129



1-130



1-131



1-132



1-133



1-134



1-135



1-136



1-137



1-138



1-139



1-140



1-141



1-142



1-143



1-144



1-145



1-146



1-147



1-148



1-149



1-150



1-151



1-152



1-153



1-154



1-155



1-156



1-157



1-158



1-159



1-160



1-161



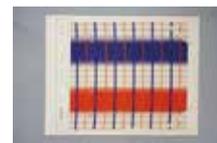
2-001



2-002



2-003



2-004



2-005



2-006



2-007



2-008



2-009



2-010



2-011



2-012



2-013



2-014

資料編



2-015



2-016



2-017



2-018



2-019



2-020



2-021



2-022



2-023



2-024



2-025



2-026



2-027



2-028



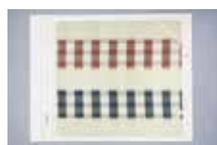
2-029



2-030



2-031



2-032



2-033



2-034



2-035



2-036



2-037



2-038



2-039



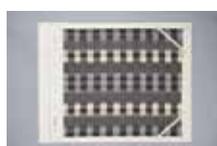
2-040



2-041



2-042



2-043



2-044



2-045



2-046



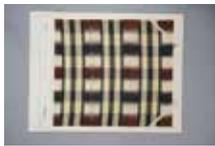
2-047



2-048



2-049



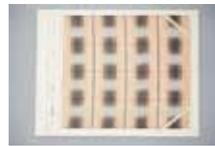
2-050



2-051



2-052



2-053



2-054



2-055



2-056



2-057



2-058



2-059



2-060



2-061



2-062



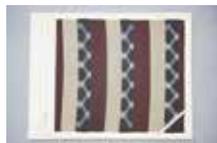
2-063



2-064



2-065



2-066



2-067



2-068



2-069



2-070



2-071



2-072



2-073



2-074



3-001



3-002



3-003



3-004



3-005



3-006



3-007



3-008



3-009



3-010

資料編



3-011



3-012



3-013



3-014



3-015



3-016



3-017



3-018



3-019



3-020



3-021



3-022



3-023



3-024



3-025



3-026



3-027



3-028



3-029



3-030



3-031



3-032



3-033



3-034



3-035



3-036



3-037



3-038



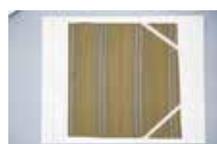
3-039



3-040



3-041



3-042



3-043



3-044



3-045



3-046



3-047



3-048



3-049



3-050



3-051



3-052



3-053



3-054



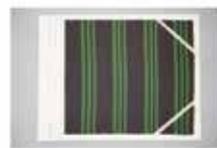
3-055



3-056



3-057



3-058



3-059



3-060



3-061



3-062



3-063



3-064



3-065



3-066



3-067



3-068



3-069



3-070



3-071



3-072



3-073



3-074



3-075



3-076



3-077



3-078



3-079



3-080

資料編



3-081



3-082



3-083



3-084



3-085



3-086



3-087



3-088



3-089



3-090



3-091



3-092



3-093



3-094



3-095



3-096



3-097



3-098



3-099



3-100



3-101



3-102



3-103



3-104



3-105



3-106



4-001



4-002



4-003



4-004



4-005



4-006



4-007



4-008



4-009



4-010



4-011



4-012



4-013



4-014



4-015



4-016



4-017



4-018



4-019



4-020



4-021



4-022



4-023



4-024



4-025



5-001



5-002



5-003



5-004



5-005



5-006



5-007



5-008



5-009



5-010



5-011



5-012



5-013



5-014



5-015



5-016



5-017



5-018



5-019

資料編



5-020



5-021



5-022



5-023



5-024



5-025



5-026



5-027



5-028



5-029



5-030



5-031



5-032



5-033



5-034



5-035



5-036



5-037



5-038



5-039



5-040



6-001



6-002



6-003



6-004



6-005



6-006



6-007



6-008



6-009



6-010



6-011



6-012



6-013



6-014



6-015



6-016



6-017



6-018



6-019



6-020



6-021



木箱1-01



木箱1-02



木箱1-03



木箱1-04



木箱1-05



木箱1-06



木箱1-07



木箱1-08



木箱1-09



木箱1-10



木箱1-11



木箱1-12



木箱1-13



木箱1-14



木箱1-15



木箱1-16



木箱1-17



木箱1-18



木箱1-19



木箱1-20



木箱1-21



木箱1-22



木箱1-23



木箱1-24



木箱1-25



木箱1-26



木箱1-27



木箱1-28

資料編



木箱1-29



木箱1-30



木箱1-31



木箱1-32



木箱1-33



木箱1-34



木箱1-35



木箱1-36



木箱1-37



木箱2-01



木箱2-02



木箱2-03



木箱2-04



木箱2-05



木箱2-06



木箱2-07



木箱2-08



木箱2-09



木箱2-10



木箱2-11



木箱2-12



木箱2-13



木箱2-14



型1-1



型1-2



型1-3



型1-4



型2



型3



ロッカー1



ロッカー2



ロッカー3

2. 顕微鏡観察画像

① 糸の染まり方の違い



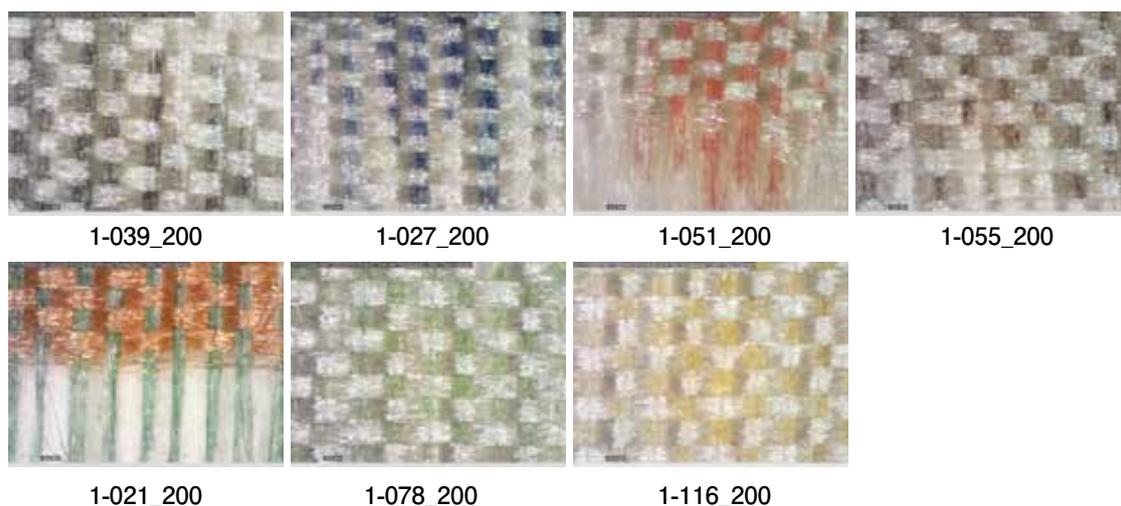
絵甲斐絹型染め
(1-003_200)

解甲斐絹型染め
(4-010_200)

緋甲斐絹
(上 : 3-001_200
下 : 2-011_200)

縞甲斐絹
(3-021_200)

② 絵甲斐絹型染めの色



1-039_200

1-027_200

1-051_200

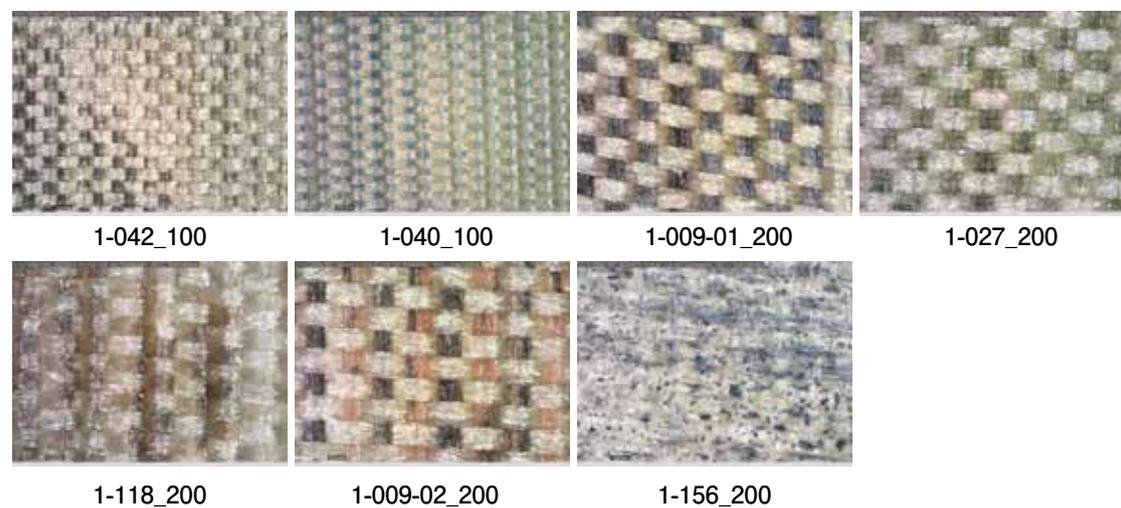
1-055_200

1-021_200

1-078_200

1-116_200

③ 絵甲斐絹型染め色の濃淡、色の重ね、後染め



1-042_100

1-040_100

1-009-01_200

1-027_200

1-118_200

1-009-02_200

1-156_200

④ 絵甲斐絹型染めのグラデーション



⑤ 絵甲斐絹型染めのにじみ



⑥ 縞甲斐絹・格子甲斐絹



3-045_50



3-043_50



3-038_200



3-103_50



3-102_50



3-065_50



3-076_50



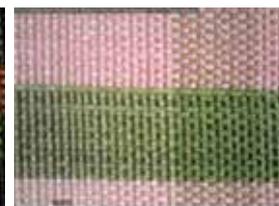
3-089_50



3-090_50



3-020_100



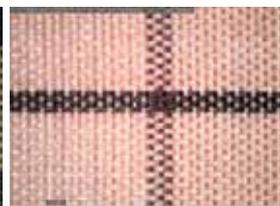
3-028_50



3-021_50



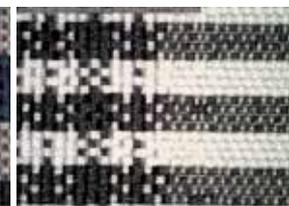
3-105_50



3-011_50



3-086_50



3-080_50



3-018_50



3-007_50

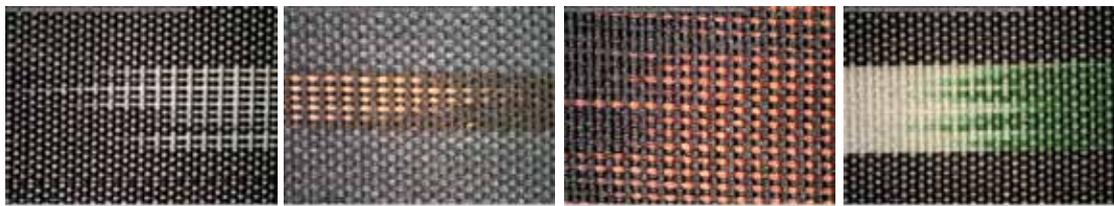


4-014_50



3-059_50

⑦ 絣甲斐絹

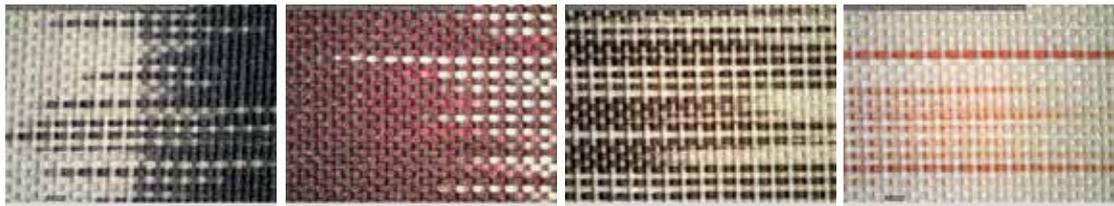


2-024_50

2-064_50

2-019_50

1-080_50

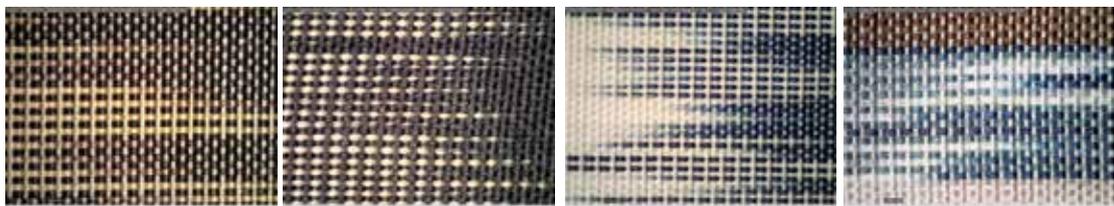


3-032_50

2-067_50

2-025_50

2-033_50

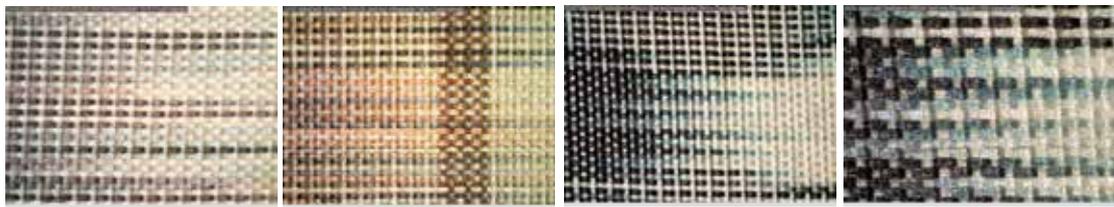


1-105_50

2-060_50

1-143_50

1-087_50

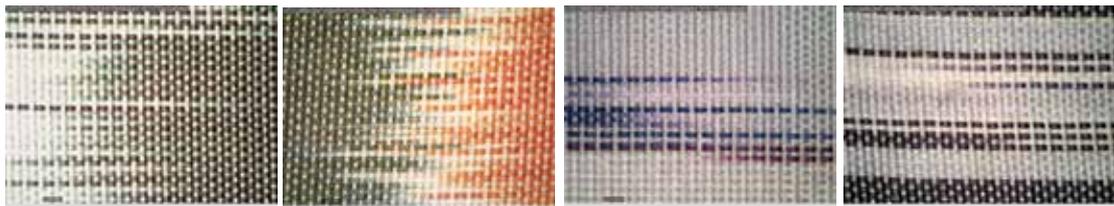


2-058_50

2-040_50

2-016_50

2-016_100

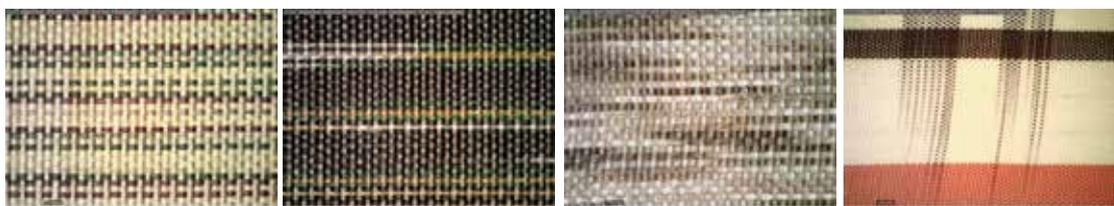


1-143_50

1-147_50

1-046_50

2-020_50



1-089_50

3-001_50

1-081_50

2-047_20



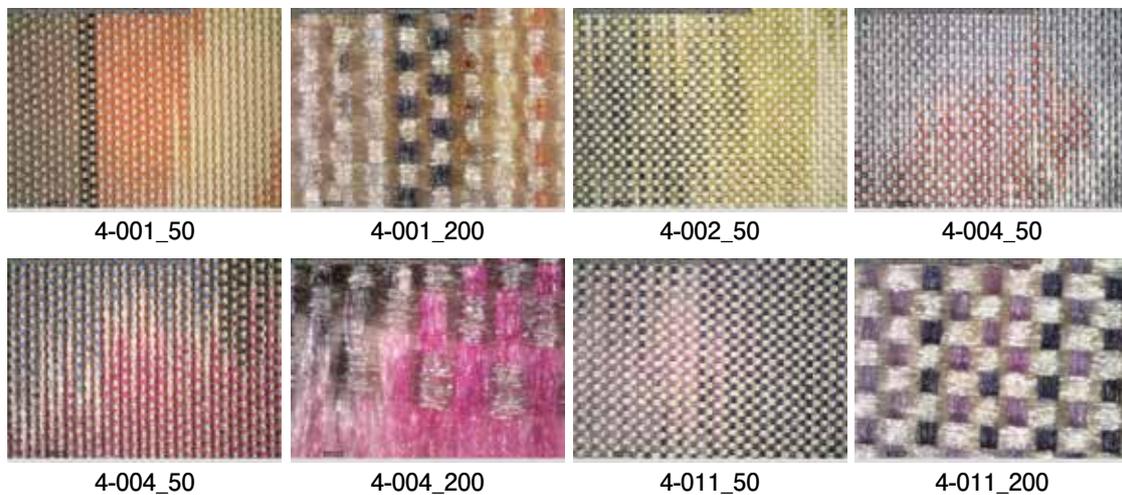
2-051_50

2-011-02_50

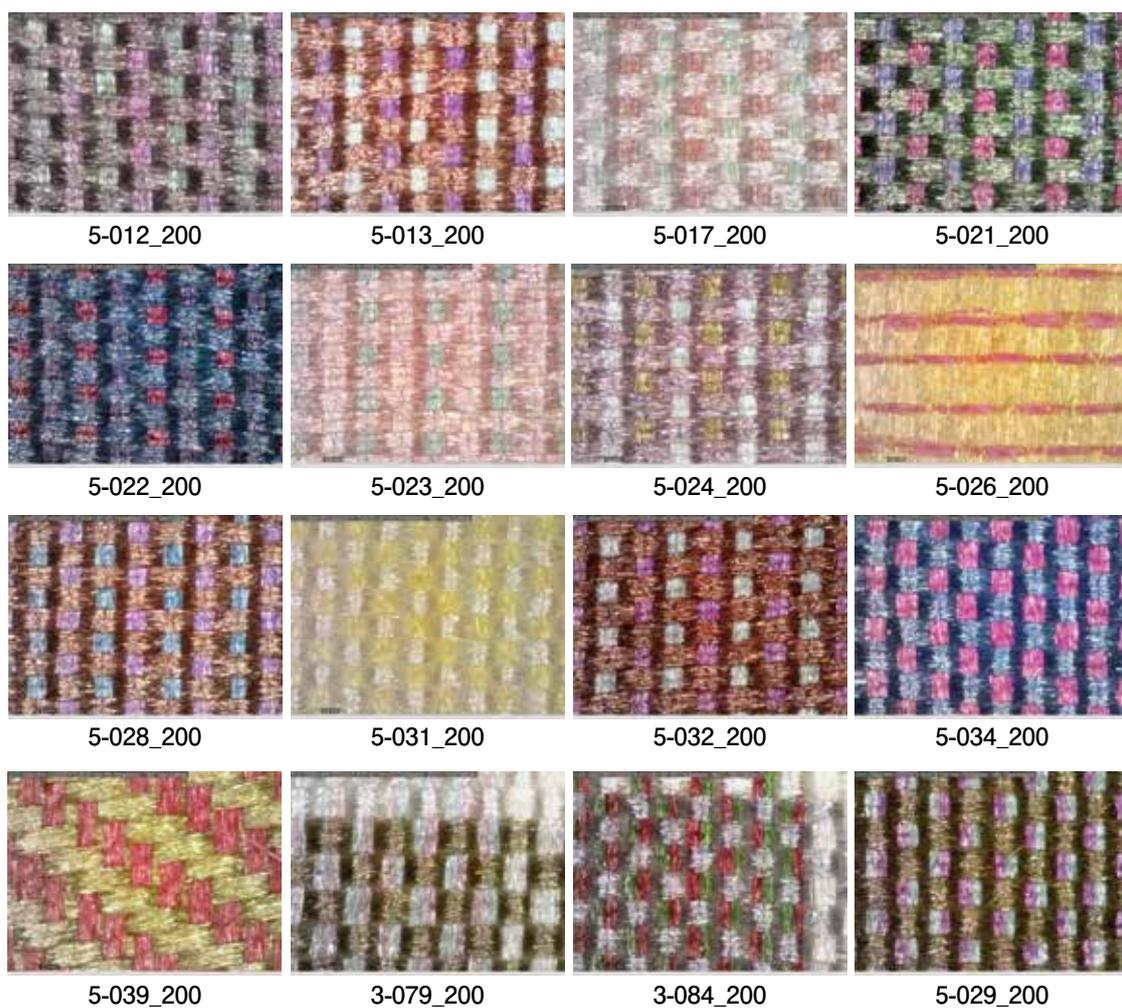
2-010_50

2-011-01_50

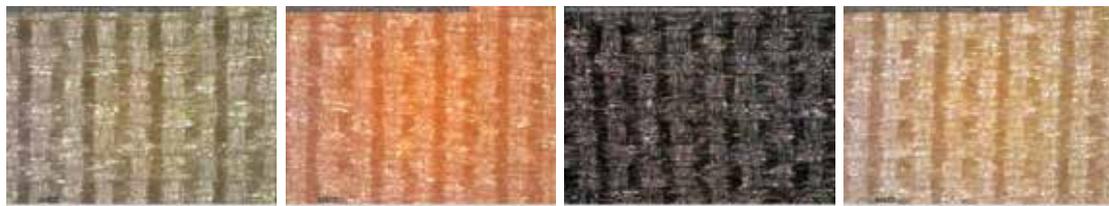
⑧解甲斐絹



⑨玉虫甲斐絹・カメレオン甲斐絹



⑩無地甲斐絹

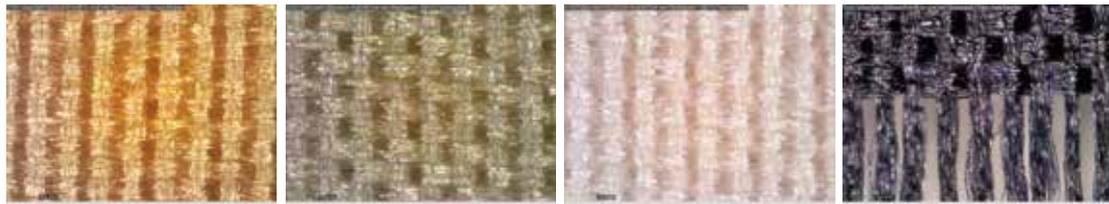


5-001_200

5-002_200

5-003_200

5-004_200



5-005_200

5-006_200

5-007_200

5-008_200



5-009_200

5-010_200

5-011_200

5-014_200



5-015_200

5-016_200

5-018_200

5-019_200

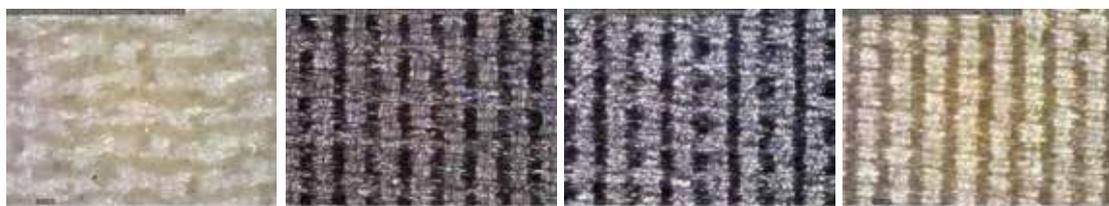


5-020_200

5-025_200

5-027_200

5-030_200



5-033_200

5-035_200

5-036_200

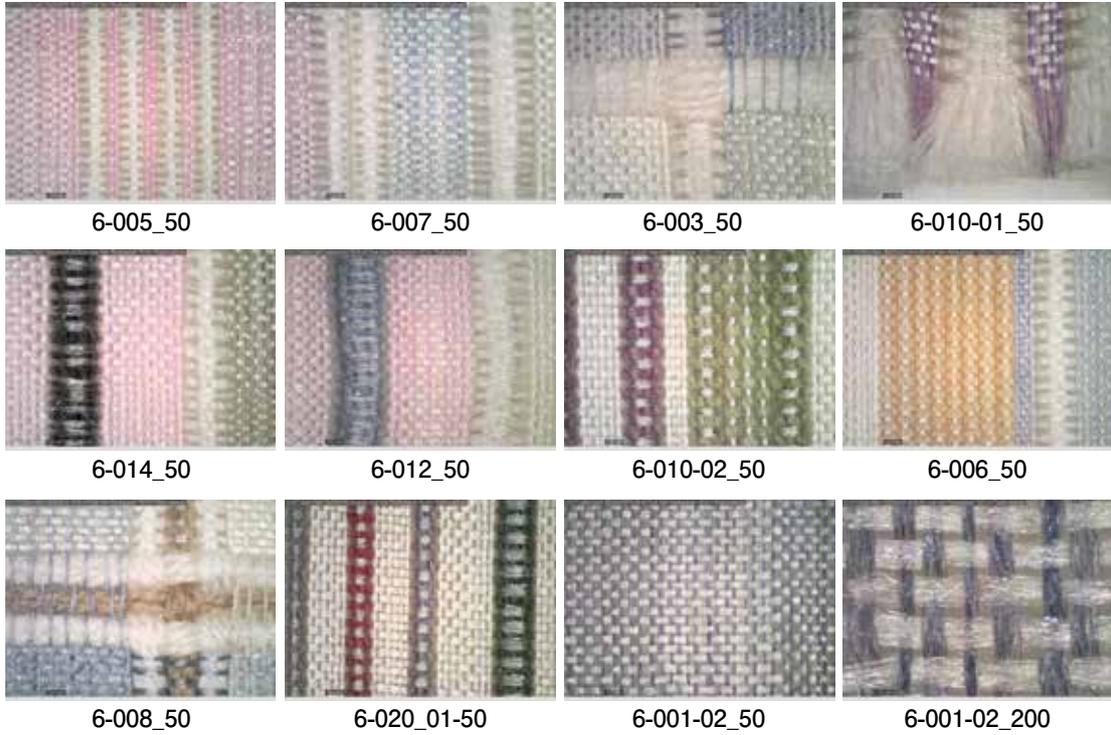
5-037_200



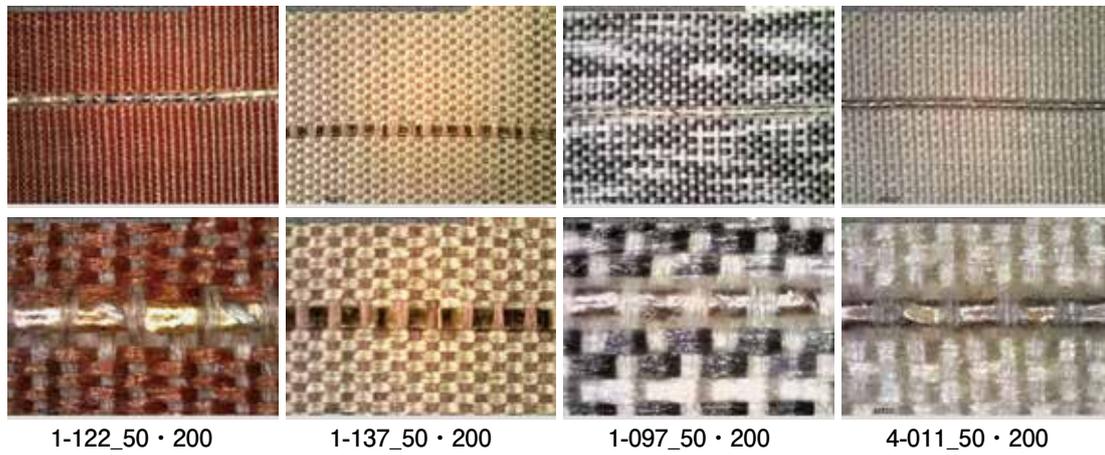
5-038_200

5-040_200

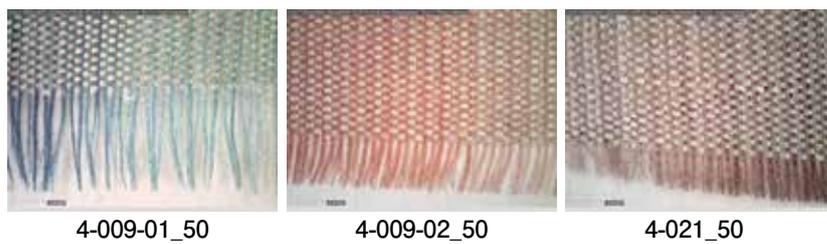
⑪高配甲斐絹



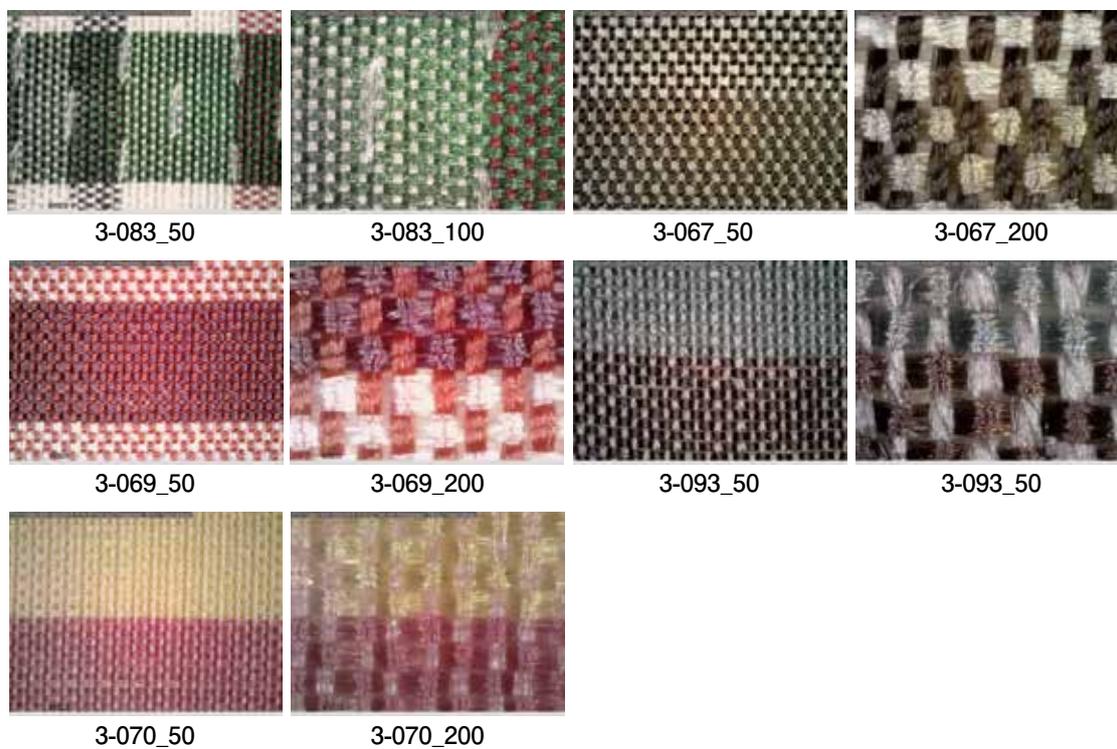
⑫金糸・銀糸



⑬グラデーシオン



⑭その他



※資料番号の後ろの 50、100、200 は、顕微鏡で観察した倍率を示す。
それぞれのスケールは以下のとおりである。

50 倍 - 1mm、100 倍 - 0.5mm、200 倍 - 0.2mm

山梨県立博物館 調査・研究報告 15
近代以降の甲斐絹の生産・デザイン・技法に関する基礎的研究

令和4年3月31日発行

編集・発行 山梨県立博物館
電話 055-261-2631
〒406-0801 山梨県笛吹市御坂町成田 1501-1

印刷・製本 株式会社 内田印刷

無断転載・複製を禁じます。



山梨県立博物館
Yamanashi Prefectural Museum